

てゐた児童たちがもつとも深みある、もつとも特色あるものであることを見いだすであらう、あまりにはやく離されたものはつねに自己を失ふ危険にある。しかしそれは決して單に身體的關係に依るものではない、たとへこれなしにはそのことが一般に存立しないことは確かであるとはいへ。母性本能はたとへそれが身體的に作用しつくす能はざるばあひにもそれにひとしきもしくは近きものを作用する。けれどそのやうにして實に母と子との單純なる自然關係は直接的共同態の永遠なる原圖として存する。

9) これにもつとも近きものはともにもる児童、兄弟姉妹もしくは遊び仲間が児童の魂の生長に對して及ぼすはなはだ強き勢力全體をもつての、子供仲間(Kinderkreis)である。全くそれ故に、一般に何處でも家族が缺陷あるときには、そして缺陷あればあるだけ(それは殆んど一般的にさうであるが)、これに對して、償ふところのものを設けなければならない。(以下については著者の *Volkskultur und Persönlichkeitskultur* (Leipzig 1911.) S. 35 ff. を参照されたい。)それは幼稚園のみによつてはできない、それはただ一の應急手段であり、非常に不充分である。何となればそれは児童をその自然的家庭から取り出し、家庭からは家庭的共同の辛勞と責任とを、しかしそれと

ともにもまた測るべからざるその祝福の領けまへを奪ひ、そしてそのやうにして自己の職分としては家庭を全く分解することそして教育の義務の抛棄を家庭にとつて容易にすること、そしてそのやうにして民衆に於ける根源的に生長した魂力の最も強き泉を涸らすことを、ともに助けてゐる。習得せる幼稚園保姆は母を、偶然のそして變化する遊び友達を、そして兄弟姉妹を充分に代理する事はできない、それはまた最良のばあひにも「代理」たるに留まる、それはまさしくすべてが直接性を要するところにあだかも間接性を置くのである。むしろもつとも痛切に必要なことは、民衆自身に教育のよろこびと祝福とが、家庭に特有なる完結的共同生活の直接性に於いて、普遍的に再び意識にもたらされ、そしてその實行が、彼らがいま在るがごときものではないしかしふたたび成り能ひそして成らざるを得ぬ生活關係から純粹に生ひ出でそして彼らと緊密に結合した一つの形式に於いて可能にされ、もしそれが能ふならば、必然的にされることである。これへと導びく唯一の途は家庭教育の普遍的義務的組合編制である、それは近くに並んで住んでゐる、または、さなくとも職業の共同によつてすでに組合的に結合されたる家庭的集合の、第一には就學前の児童のしつけに於いて互ひに助けあふための、結合の形式に於いてである。これに



於いて重要なのは自己行爲である。これらの組合は、その必要のあるときは（はじめに於いてはそれは非常に必要であらう）能ふかぎり同種類の生活範圍に屬する、習熟せる助力者によつて援助されもしくは一時的には代理されることもできる。しかしながらいかにかして能ふだけ多くのことは、各々のもつとも小さき組合のなかでそのもつとも適する人々は必らず最近に隣接せる組合の餘剰の力を假り來るとともに指導權をもつやうに、そのやうに自力によつて爲されねばならない。一たびそれが運轉するならば一つのこのやうな設備は全くおのづから、それにもつとも適能するものをその位置に置きそして彼らを實行と實例とによつてより適能的にするといふ効果を擧げるであらう。これのための簡單なる訓練をばこの領分に於いて經驗あるものはたやすく考へぬきそして遂行することができやう。このやうな群の群はまた更に相互の補助のために集合するであらう。遊戯、祝祭、遠足等は共同にすることができ、もつとも小さき、二十乃至二十五人の兒童を二人もしくは三人の成年者の指導者の下に包括する組合にとつては小さい場所で足りる、すべてより大いなる場所を要することのためには、大きい組合が存在する。すべての官廳的監督は遠ざけられねばならない。自己參加、自己責任、自己調制のうへにすべては根ざさ

ねばならない。ただこの施設一般の存立のために國家は配慮せねばならない、しかしそれはただこれへの刺戟を與へそして可能性を造り與へる以上であつてはならない。いかに深く家庭生活が危ふくされてゐるにせよ、なほすべての生活範圍に母たちが在る。彼女らこそ、ベスタロツチのなほいまだに滿されざる要求にしたがつて、教育事業の味方に引き入れそして武装されねばならない、彼女らは彼女らのあひだで約定しそしてこれのみ健康なる母性の基礎のうへに一つの家庭生活を、彼女らに達しうべき周圍のなかに、ふたたび築きあげること助けなければならぬ、彼女らはその母性の力を協せて、母心と母の力とを、それがなほ認知しうべく、そして更には、見かけには、死んでゐるところに於いてふたたび生命によびかへしそして生き生きと保つといふ明瞭に認知せらるべき、彼女らの全行爲を指導し規定する意圖に於いて、この高き救濟の事業のために致さなければならぬ。新しいベスタロツチたちは起たねばならぬ、そして彼らはその心裡に母らしき心が死滅してゐない各々の若き婦人に、もつとも神聖なる義務としてもつとも貴き自己の生活の建徳として、比ぶべきものなき、いかなる價のためにも犠牲にしがたき母性の寶を、彼女らがベスタロツチの小説の「ゲルトルート」の模範にしたがつて、母性の善をただに自己の



子供たちに對してのみならず彼女の全周圍に對して行ひそして相互的扶助によつて擴げそして普遍的に確立することを努力することによつて、それ以上の沈落と全部的な荒廢から救ふことを、心に銘じさせなければならぬ。これは今日少くも經濟的また政治的新建築の何らかの要求と同様に重大でありそして切實である。これら兩者はもしこれらがそこにのみ根ざすことのできる生命根據が再び獲らるるにあらざれば健全になることはできない。何故なら人間は在るものでなく成るものである。人間が子供から以外に成り出でないといふ、また人間がしかしただ母たちによつて子供であり、そして子供から人間が母たちによつて以外に成り出でないといふ、主張にだれが反對することができやう？ たしかにまた父たちにも彼らの人間の再建への協力の義務と權利へのわけまへは減ぜられてはならない。しかし彼らが父たちであることを彼らはまた母たちに負つてゐる、そして彼らのもつともよき協力は母性をふたたび教育の中心に置くことである、あだかもベスタロツチの民衆教育の課題の眞摯とそしておどろくべき困難との深き尊重より要求されたるごとくに。

今や吾々はこれから再び直接的<sup>インテリゲンツ</sup>生活<sup>インテリゲンツ</sup>建築<sup>インテリゲンツ</sup>の内容をなすものに向はう、そこですべてのこ

とに先つて根本原理的普遍性をもつて斷言すべきことは、直接的<sup>インテリゲンツ</sup>生活<sup>インテリゲンツ</sup>建築<sup>インテリゲンツ</sup>が、直接なるものたる以上全くその最低の生理的根柢よりもつとも精神的なる頂點まで悉く自己<sup>インテリゲンツ</sup>建築<sup>インテリゲンツ</sup>でなければならぬ、といふことである。生理的自己<sup>インテリゲンツ</sup>築成<sup>インテリゲンツ</sup>とは授乳とそして乳兒の全身體的配慮より始めて規則正しき身體訓育、感覺や神經や筋肉の陶冶、あるひはまた生理的勞働陶冶よりかのギリシヤ人がこれまで凌駕されざりし模範を定立したところの身體的文化の高貴なる完成にいたるまでを謂ふ。ギリシヤ人には勿論それは比較的容易であつた、何となればそこではそれは第一に一の土地所有に根據をもちそしてこの高き身體的文化なしには支配權を數世紀間維持しえなかつたであらうところの上層に關したからである。しかしまた勞働する下層のものも主人と奴隸とふ殆んど族長的な關係に於いてさへ、しかしながら今日のごとくには機械的技術の使役とそしてすべてを平板ならしめる商業的掠奪に委ねられてはゐなかつた、却つて彼らは自然なる業務に一つの輕蔑すべからざる自由なる、獨特なる、直接なる活動の頒けまへをもつて勞働することができた。あだかもそれは吾々に於いても手工とそして農業的小經營に於いて、實際悲惨なほど壓迫せられてはゐるが、しかしなほつねに存してゐるときものである。それが救ひがたく頽廢しなければならぬ



ならば、それだけです、一つの、労働する人間を取得せらるべき仕事のために犠牲にする、すなはちこれの奴隷とする、そして奴隷とする以上にも惨酷なるものでなく、他のあるひは仕事  
が断念せらるるかぎりにおいてこれを断念するから然らざれば仕事の形成に於いて同時に労働者へ  
の人間を形成し、身體と魂とを自由に健やかに保つごとき途を見いだすところの、機械的労働の  
一の新形成が達成されなければならない。機械的労働自身がそれを不可能にしてはならない、そ  
してそれはただ一の階級が他のためにでなく、すべてがすべての階級のために労働するやうにな  
るや否やそれを不可能にはしない。何故ならそのときにはすべては共にこのことを思ひはかる  
であらう、それは今まではめてわづかの人が眞摯に思慮したのみであるが、魂らが日傭ひにさ  
れてはならないこと、むしろ労働の正當なる日々、時間、然り分そして秒の報酬は、間接にまた  
は直接に、労働者自身の、實にすべての人の高貴なる生活築成であることを達成することを。

技術の發達が必然性をもつて労働の分裂としたがつて無靈化とにみちびいた、そして同じ必然  
性をもつてみちびきつつある、といふ抗論は一應出て來やう。けれどまさしくこの危険が迫つて  
ゐるからこそ一つの救助手段が見いだされねばならない。確かに、労働の外延的發達はその内包

的洗練を困難にし、それを今はさまざまなしかたで不可能ならしめてゐる。けれどそれは結局た  
だ人がそのために用意してゐなかつたからである、むしろこの課題が未だ殆んどかつて眞面目  
に定立されなかつたからである。そのやうにして平均は勿論妨げられてゐる、そして今はそれ  
だけますますそれを恢復することを必要とする。自體にはそれはまつたく可能である、それは  
たゞ各々の労働者に於いて内包的なる、精神化の力が必要なる程度に強められなければならない  
といふことである。労働者は労働から解放せらるべきではない、ただ労働に於いて、そして、に  
由つて解放せられるべきである。何となれば労働は創造であり、死からの生命の産出であり、永  
遠の否から永遠の然りを奪ひ取ることである。それ以上、労働は人間に於ける唯一の生けるも  
の、生命創造的なものである。たしかに今日自己の労働によつてくるしめられてゐる労働者に、  
忍耐せよ、必らずそれはこのやうなものでなくなることができ、そしてなくなるであらう、もし  
も……そしてもしも……そしてもしも……ならば、と説教することは充分ではない、今必要なの  
は第一には彼を助けてすでに今さへ彼の労働にこれが受け容れあたふだけ多くの精神的内容を注  
入せしめることである、第二には、そのときにもまた要求されることをやめない犠牲をある一部



分のみがでなく、すべてがともに負擔するやうにすることである。犠牲なしには、然り生命を賭けることなしには何らの創造はない。ただ死からこそ生命が奪ひ獲られるからである。不正はただ一つの部分には犠牲が、他の部分には収益が割り當てられてゐることである。重荷と利得との正當なる分配によつてただに今日過重の負擔を荷へるものの重荷が軽減されそしてそれを負擔する身體的力が高められるのみならず、協力的負擔の兄弟關係は内的靈魂的威力を解放する、そしてこれこそはじめて外的の重荷に對して最強の對重を提供するであらう。これは戦ひについて安當する、戦ひのうしろにはしかし勝利が立つてゐる、そしてそれがただ永遠の希望としてであれ、それは戦ひそのものとひとしくすべての人に共同である。またこれも一つの力である、そして實にその最弱のものではない。けれどまたそれも希望の共同にまつたく結びつけられてゐる。

特殊のことからとしては、もし吾々が外的な條件から始めるならば、第一は、一般生物學、生理的そして心理的的人性學、衛生學そして工學が緊密なる聯合に於いてこの老成なる社會的教育的課題について思慮し、社會的に必然的なるそして効用ある労働をまづこのやうに形成しなければならぬ、すなはち、その労働は、何らかして能ふかぎり、まづ間接にその所産によつてでなく、

すでに直接に生産として、労働に従事するものの健康なる生理的生活築成に寄與するやうに、もしくは少くもこれを不可能にしないやうにすることである。すでに人間を單に労働力としてのみ眼中に置いた經濟學のもつとも粗野なる考量さへも、何がここで等閑視されてゐるか、そして何が、人が眞剣に意志するや否や、仕事の形成そのもののために、労働収益の上昇のために獲取せらるるかについて、眼を鋭くせずにはゐられなかつた。けれどもしもまた機械労働のもつとも困難なるものにもすべてが参加し、そして自己の身體に於いて、生理的の重荷に壓迫される、とは何を意味するか、そしてそのときかにはなはだしく靈魂が危險に瀕するかを經驗するならば、そこに留まることはできずそして必らずそのときはそこに留まりはしないであらう。そのときは發明的な人間精神はまた労働の内的解脱のために道を見いだすであらう、それを人は今はただ彼らがそれをまるで眞面目に求めない故にこそ見いださないのである。

96  
内面的豫件に於いてはしかしながら第一に必要なものは技術的認識の解放である。たしかに何人も、機械の意味とその諸必然性の理解を習得しなければ、機械に於いて労働すべきではない。機械に於いてのすべての労働はそれ自身學校とならなければならぬ、能ふべくば、數年を通じて



主として實習學校(Experimentierschule)であらねばならない、そしてその強き内面的理解は各々の技術的作業者を、他様にすれば身體に苦惱となるところのものから、すでにある程度に於いて超脱せしめるやうにしなければならない。習熟せる技術者は、あるひは彼は身體的に同様に困難に、あるひはより困難に、より内包的に、より持續的に心と手をもつて、いはばあらゆる神経と筋肉とをもつて、労働しなければならぬかもしれないが、しかも彼はただにそれを忍ぶのみならず、却つてそこから高き歡びを汲む、何となればそれは彼がそれに於いて思想の主權を自由に試練しそしてつねに清新なる刺戟に於いてますますひろく、擴張し能ふからである。またしばしば、否通例のこととして、殆んど希望なき失敗さへも、彼がその失敗ごとにそれから學びそしてそのやうにして目的により近く進みつつあることを信ずるときには、そのかぎり彼の勇氣を沮喪しない。また理論的研究者もいかに甚しく彼が誤ることあるかを知りそして日々に充分に經驗する、けれど彼はやめない、何となれば彼はまたいかに誤謬の覺知が彼を再び高めそして解放するかを經驗するからである。かゝる純正なる研究のソクラテスの人物以上に内的に確實なる、自己のうちに満足せる人は殆んど存在しない。各々の技術的労働者にまたこれの充分なる頌げまへが

與へられなければならない、さうすれば彼は同様なる經驗、すなはち彼の労働が單に労働者としての彼のものでなくて同時にすべてに於いてまた彼自らに對しての労働であり、これによつてはじめて全く彼のものであり、そして自己の精神の自己築成が労働者の最高の、唯一確實なるそして奪はるることなき報酬として利得である、といふ經驗を爲すであらう。

けれどこのやうな考察はそれだけとしてはあまりに甚しく偏狭であり、惡しき意味で利己的である。それは結局労働者らを、すべてを麻痺せしめる鎖のなかに囚へて放さないであらう。何故なら魂の生活の全體を欺いてその正しき權利を失はしめたものはまさしく單なる技術的知力の偏狭なる支配である。これよりもはなはだ深く作用する第二のものがある、すなはち、労働の意志指導に於ける、すなはち全體の共同的作業の規整と組織とに於ける各労働者の充實せる參與である。それに對する彼の協力的労働について他人によつてただ指圖され、彼自らはただ機械の一片のごとくに装置され、しかしいかにしてそれが彼に役だつか、何をそれが彼から作るか、もしくは彼が恐らくは他の場所に於いて彼自身のためそして延いてはまた作業のためにより効果多く仕事することが出来るものではないかを問はずして、彼の身體力とそしてばあひによつては習慣に



よつて達せられた熟練とがもつとも有利に應用されそして使用されるかぎり、そのかぎりまた何を、そして何故に彼が造るかについてのすべての透察は彼に慰安を與ふことなく、あるひは恐らくは彼の勞働に對する内的反抗をもつとも高く高めるであらう。勞働は、單にそれだけでは、まだ彼のものにならない。けれどすでに充分なる技術的透察は單に機械的なる諸勢力の錯綜のみに関しない、それはつねに同時に勞働者の意志勢力の影響を見る、この後者の干渉なしには機械は作業しないであらう。いままではなほだ僅かしか研究されなかつた指導や服従の、そして協力的勞働者の意志動機の全錯綜の心理的そして社會心理的技術はこのばあひに必要である。その幾分は軍事に於いてもつとも早くから形つくられ、行はれてゐる、むしろすでに存したといつていゝ。けれどまたそこでも全く別様に、自由なる自己參加の精神に於いて、そして單なる鐵のごとき「規律」をもつてでなく、それは形成せられることができたはづであり、形成せられるべきであつた。しかしいつでも、また最後までも、あらゆる避けがたき嚴格をもつて各々の賤しき者の自己意志を覺醒し、そして彼にあらゆる、もつとも微少なる位置についてすら共に負ひそして確實にする責任の念を植ゑつけることを理解してゐた士官らは充分に存在してゐた。それ故に人が

規レギュレーション律すなはち、教練、もしくは訓練すなはち習得を擧げたのは決して全く誤りではなかつた。それは、その限界内に於いて、意志の學校であつた、そしてまた内面的前進への、したがつて魂の解放の一部分への促動を含まぬものではなかつた、たとへこの組織の最良の精神については何ものをも解せず、そして命令の技術の粗野なる、外的に技巧的なる習練によつてただ機械的に訓練されたものによつてこの最良の精神に對して無數の冒瀆が犯されつひに全組織の避けがたき、あまりに當然なる崩潰にまで到つたとはいへ。それ自身に於いては決して誤算なき、しかしながらつねに非常に偏したる軍事の組織の程度を無視した擴張とそしてそれとともに與へられた無理な緊張過度とはつひに必然的に一つの過重なる非自由にまで導いた、この非自由はあらゆる自己意志の壓迫によつてつひに、それなしには一軍隊が危急のばあひに存立するを得ざる共同精神を腐蝕せずにはゐなかつた、そしてそれはつひにもつとも根本的に腐蝕した。これをもつて避くべからざるものとなつた崩壞の經驗は一つの警告的な例を與へる、經濟的勞働の眞にそれに劣らず高貴なる軍隊秩序はそこから切實なる教訓を得るべきであつた。實に兩者は今同じ破船に惱んだ、勞働の士官たちは今はさまざまに彼らの肩章や腕章を奪はれ、棍棒は彼らの書類を裂き破り、彼



らの地位は召されざるものと能力なきものによつてしばしば嘗つて聞かざる粗暴をもつて奪取されてゐる。眞に、彼らのすべてについて、彼らが崩壊をみづから起したのだ、と主張することはできない。しかしながら責任は充分に深い、ことにまさしくこれらの者たち、すなはち經營をその手中にもつてゐたそしていまもつてゐるもの、工場書類の所有者たち、そして他人の勞働の收益からつねにもつともよく己のが財囊を満すことを知つてゐる商人らの全輻重隊とに於いて。他人の爲せる勞働の利用の輕卒さ、もつとも輕易なる仕方、すなはち單に若干の書類を所有することによつての優力なるもの驕慢、かゝる人々が明白なる社會的不正によつて占得されたる高みから苛酷なる賃銀勞働に鎖で縛られたものたちを見下すこと、これらは殆んどそれ以上に爲されることができないくらいであつた、それはつひにそのやうに正義を褫はれたものたちの、劣らず程度なき憤懣とそして炎々たる反抗に導かずにはゐなかつた。そしてもしもそれが一つのよりよき状態の建設のためにあまり希望多きものでないとしても、それでも人がまづただ單に鋒先を轉じてそしていままでその力に委ねられてゐたその當の敵たちに、一度は翻つて暴力の下に置かれることがいかなるものであるかを味はせやうとしてゐることは無理のないことである。單なる

個人的もしくは非個人的強制によつて天下りにするのでなく、各參與者の充實せる共同責任のもとにする組合的勞働分配によつての、共同的勞働の整序の確實なる學問、そして學問的に基礎づけられた技術、それはいままで殆んど眞面目な試みに於いて存在しなかつた。しかしこの學問は見出されねばならず、そしてもつとも根本的に精練されなければならぬ、何となればそれに対する需要は事實とともに興へられ、天下りに勞働を整序することは崩壊し、勞働自身はしかながらはなほ爲されんと欲するからである。新しい組織は容易ではないであらう、けれどその課題には内面的不可能性は存しない。在來の勞働整序の明白なる狂氣が、殆んど信すべからざる反自然が可能であつたくらゐらば、健康なる、事物の單純明晰なる基礎關係に適應せる勞働の理性秩序は正に可能でなければならぬ。それは實にかつて在つた、それは今日なほ、たしかに小規模にであるが、透明なる、自然より生れたる關係に於いて、殘存してゐる。今日その道を沮み、それを一般に不可能とするところのものは、されば何らか事柄自身の不可ではなく、傳承せられたる、今までなほ全たく前面に立つて支配してゐる状態自身の深き不健康さである。永いあひだ槽船に鎖づけられてゐたものは自由な自然な歩きかたを忘れてそしてそれをまづ再び習はな



ければならない。それは時と練習を要する。けれどただ最初の一步に、いはば麻痺した神経の開放に困難は存する。これがまづ成し遂げられれば、さうすれば今日不可能と見ゆることはたゞに可能なるのみならず、今まであつたものよりもつと容易とならずにゐない、何となればそれは自然的なもの、事それ自らより命ぜられたるもの、事それ自身から、それがたゞ無理にされないかぎり、おのづから流れ出るものであるからである。それ故にそれは何よりも、そして殆んどただ意志の關することである。それ故に今日第一に必要なことは社會的秩序への意志をよびますことである。それはしかしただそれを直接に労働へ仕掛けることによつてのみよびさまされる。組合的労働經營は、他のすべての有効なる結果をしばらく顧みぬとしても、全く殊にこの特長をもつ、すなはちそれは各個人の自己行爲と自己責任を單に一般に要求するのみでなく、直接に辿らるるその結果をとほして一步一步に開展しそして一たびそこに入つたならばおのづから先へと進ましめる一つの軌道の上に置くものである。

95下 一つのそれ以上の、今日なほ全く充分に測ることのできぬ助力を第三の手段が爲すであらう、それは労働の藝術的淨化である。またこれについてもベスタロツチは明晰なる豫感をもつてゐた、

吾々の詩人や藝術家たちはそれをただに豫感したのみでなく、明晰に精神に於いて觀照し、そしてさまざまに彼らの創作に於いて叙述した。純正なる藝術家のうちには、人がこの主想をただかすかに提起するや否や、ただちにそれに熱中してそして己れの藝術自身に於いてそれへの多様な結合を見いださなかつたものは、殆んど一人もない。労働者たちがそれをいまずでに認識すること、彼らがそれを一つの美しい未來の希望として單に謂はしめずして、苛重なる労働の眞中で今日すでにそれを感じぬきそしてもつとも深き魂の底にまで把握するであらうといふことは、一般には期待すべきこと、況んや要求すべきことではない。それにはまづすでに謂つたやうな豫件が充足されてゐなければならぬ、すなはち、労働者の悟性と意志とを労働そのものの築成のしかたによつて解放することである。この二つの豫件なしには對象へと向けられた魂の諸勢力のうちでもつとも内面的なるそしてもつとも根源的なる、自體にもつとも強大なるものは、自由なる創造の力は、まさしくそれ故に開展することができない、何故ならそれをその牢獄に囚ふるものはそれと類を異にする、そして敵對せる、外部から規定する知力と意志との桎梏であるからである。けれどあたかも藝術家が、彼にとつてもしばしば困難そして苛重なる労働を、自由なる魂を



もつて貫ぬきそして内部から支配することを習得することく、そのやうに労働者はみな彼の労働を、それがいかに苛酷であり絞めつけるものであるにせよ、もしも彼が全く解放された知力と解放された意志をもつて仕事し能ふときには、そのとき、そしてそのときのみ、彼の魂をもつて貫ぬきそして支配するであらう。知力と意志とはただ魂の兩腕である、けれど魂は兩腕を自由にもたねばならない、そのはたらき爲す仕事を愛しつゝ包容しそして抱きしめ、生みなしつゝ生氣を吹き入れ、生命によびさましそして物言はしめるためには。あたかもプロメトイスがその造れる人の形像に向つて爲したやうに、語れ、話せ、愛らしき唇よ、私に！ あゝもし私がおまへたちに、おまへたちが何であるかを感じさせることができたなら！

社会主義の現存の指導者たちのうちで少くも一人を吾々はこれについていくらかを認識した人として擧げることができる（他のものはそれについて豫感もないやうに見える）。それはサンチカリズムの哲學者、ジョルジュ・ソールである。（*Les illusions du progrès* 及び *Réflexions sur la violence*, Paris, Marcel Rivière et Cie.）彼はギリシヤ人とローマ人から、またドイツ人からも學んだ、彼はユデア宗教そして基督教の精神について一つの感覺をもつてゐる、彼は東洋とそして

中世を尊重してゐる、彼はこれに反して西ヨーロッパの民主思想の平板なるそして誤れる合理主義と自由思想とによつては、そして十九世紀と二十世紀初めとがそこに深く囚はれてゐた十八世紀の偽はり多き自由と平等と進歩との自己欺満によつては、すこしも迷はされてゐない。彼は今日の藝術がその一般的影響に於いては、群衆がそれに對する、そしてそれが群衆に對する地位に於いて、殆んど娛樂てふ最低の段階以上に出ないといふことを、藝術がその第二の段階、すなはち社會的教育の段階に、確かに到達しないこと、しかしその最高の課題、「偉大」の表現には遙かに及ばないことを、明晰に看取してゐる。偉大はこゝではたしかに適切な言葉ではない。ソールはまた「天才」について語つてゐる。その意味するのは無限性である、あらゆる魂の内部の狹隘からの脱出である、その根源的運動性へと自己よりする魂の解放である。尙ほそのうへ彼に於いては生産の創造的要素が充分明晰には表現されてゐない、それには辛うじて「創意」といふ名のもとに軽く觸れてゐるのみであるが、これはしかなほあまり單なる技術的要素に固着してゐる。「藝術」は彼には「高次の生産」の先驅である。そこには正當なものがある、しかしそれは外的業績を意味してはならない、たゞ人間の生産を意味せねばならない、ただ人間そのものを築成する



ことに、自己を人間にまつたく一つに變化し彼と一の魂となることに役たつ仕事の生産、翻つて人間は彼の魂を活かしつつ彼の仕事のなかに沈潜させ、魂を仕事のなかに體化する。またこの點についてもベスタロツチは根柢に於いてすでに決定的な言葉を語つた、外的勞働は内面的勞働に役たねばならぬ。(Christoph und Else, 20. 23. 30. 及び Abendstunde.)それは根本に於いて三つの助力手段、知的、道德的及び藝術的、のすべてに妥當する。

しかしまさしくベスタロツチのこの言葉は更に隠されたる深みを指さす。すべての單に藝術的なものは畢竟しかしながら「藝術」に留まる、すなはち、それはそれが人間の内面性に奉仕するにせよ、けれどこれに對してなほ一の外的なものとして對立するかぎり、自然から自己を遠ける。たしかに人間は彼の仕事の形式に於いてのみ自己を形成する、あたかも仕事がただ人間の深奥の魂に屬するあるものがこれに於いて自己を形づくり、このなかから語り出すかぎりにおいて一の人間的な形象たるがごとくに。けれど今や吾々の問ふのは一つの非常に深き、全く形成し盡されたる精神とそして同様に全く精神化されたる形象との、單に一になることではなくて、直接に一であることである、されば嚴密にいへば一つの對立についてはもはや語るることができないのである。

音楽と舞蹈に於いては、創造者と造られたるものとの二重性の、もしくは更にこの二つからまた受けとるものが分立した三重性の、表象が全く不充分たることはことに明晰である。ゴットフリード・ケルラーの描いた樂しき女舞者は彼女の舞蹈に對して何らの觀者を要せず、またかゝるものを知らない。純正なる創造者はみなさうである、けれどまた彼は決してそこに自己を創造するところのものを自己から分離しない、それは全く——ただに彼のものでなく、彼自身である、そして彼はただにその形成者でなく、全く彼の形成するものなかに進入し、没してゐる。純正なる言語藝術として造形藝術に於いてはそれはまた必らずさうでなければならぬ。「藝術」てふ言葉がいかなるときにも言ひ表はすべき高き妥當を彼にとつて作品に與へるものは、決して、聽者、讀者、觀者、一般に受けとるもの、でない、それはまた作品への深密なる感情移入に於いてでさへない、また翻つて受けとる者を拘束し、確信せしめ、彼に何ものかを與へ、彼にこの深き感情移入の高き享樂を與へる能力でもない、一言でいへば何らかのしかたでの業績ではない、然りまた最後の見地に於いて創造の魂からの自由なる湧出、一つの深く動かされたる眞實と實在との最後の深みにまで潛入したる内面性の純粹なる自己言表でさへない、却つて純粹なる受容。



魂の受胎てふ絶對的に業績なき恵ベグナーツングまれこそその特色をなすものである——これに對しては勿論「藝術」といふのは考へ能ふ最悪の言葉である。それは本來まつたくこの意味をもつてゐなかつた、それは却つて、*Keine, ars* といふ語とおなじく、能作の、支配の、契機を言ひ表はさうとするものであつた。そしてこの能作についてはつねにたしかに他人に對する、受けとるものに對する、はなはだ要求多き「公衆」に對する征服的な威力がともに考へられてゐる。しかしプラトーンカポのいはゆる「美」の意味はまつたくこれとは別である。理念すなはち純粹なる觀照として、それはむしろ永遠者の啓示であり、感性的なものただ中にありながらしかしその最深の底、その極限があらゆるその天のかなたに、天空の彼岸をひらくところに於いて、ただ自ら己のが内的存在の最深の底にまで下り、今や突如として彼が自己から出でて、時間と空間とそしてすべての有限的關係性から高揚され、脱せしめられて、超限的なるものへと一のそれ自身超限的なる、したがつて、すべての可經驗的なる現實より見れば、異類なる關係に移さるる者にとつてのみ可見である。そのやうにしてそれは全く生の充實のなかにある、然りそれはそのなかに、ただそのなかに自己をはじめて充分に自覺し、はじめて自らに、純に自己のために、そして何ら他人のためにで

なく、眞の意味で生きる。すべてその他のものは非生命である。生は一の他のもののため、何ものか他のものに對してのものではない、神に對して以外には。しかし神とはただすべての生の生そのなかに於いて同時にすべての死が死へと、それみづから永遠への甦りたる福ひなる死へと來るところである。

103  
なほまた生のなかに何があるか、生が何を意味するかが謂はれなければならないとすれば、吾々は取りあへずつぎのやうに答へるべく誘惑される、それは單純なる「自ソフヘンから生レベきゆくこと」の神秘的なる流動リッムにほかならぬ、と。そしてたしかにそれは、そのもとにのみ美カポが生きたるものに、まさにその生きてあることの高みに於いて、意識されることの條件である。しかしそれはまた生の流動のなかに於いても、これがまだ呼吸をすひそして吐くやすみなき交替のなかに閉ぢこめられてあるかぎりには、すなはちただ勞働しつつかあるものたるかぎりには、自己を啓示しないであらう。ただもしも個々の呼吸のあらゆる上下のあひだに、吾々をすべての衝動、すべての努力とそして失敗との暴力性から引きはなし、そして魂を、かの無運動性にあらずしてしかしながら魂の運動そのものの唯一的方向と永遠性への方向の靜かなる均衡を意イにするところの、自在の靜けさのう



ちにつねにふたたび引きもどす安靜の契機が定立せられるならば、ただそのときはじめてそれは自己を解放されたる眼のまへに顯はす。しかしこの内面的觀照は勞働からそれほど自己を遠ざけるものではない、却つてまったくそのなかに存留する。それはただ勞働せるものにのみ頒たれる、たとひ觀照は勞働でなくまた勞働によつて得らるるものではなく、却つて勞働のなかで吾々に休むことを教へそして内面的安靜を保つことを教へるものではあるが。それによつてのみ、この安靜の契機が勞働から分離したことによつて、勞働はある暴力的なる、破壊的な、魂を虐殺するものとなつた。この契機が取り返されぬかぎり勞働はいつまでもさうであるであらう。

103 下 それはすべてにしかしながら一つの最後のものに觸れる、それはそれ自らはもはや勞働の概念の下にあるものではないが、しかしそれなしにはすべての勞働に、内的にせよ外的にせよ、最深の内面性と侵犯すべからざる自己固有性がなほ缺けるであらうところのものである、それは宗教的要素である。私はすでに以前に一つの「勞働の宗教」について語つたことがある。またソールもそれについて語つてゐる。彼の意味するのは勞働者たちを彼世の慰藉的な期望によつてこの世での運命と融和せしめる、もしくはは彼をそのやうに教育し、彼をその義務に固く支持する一の

宗教ではなく、超感覺的なるものの生き生きとした經驗によつて彼をその深奥のものまで捉へそして再び生み、そして彼をやがて、同じ解脱を他人のために獲得し、魂から魂への共同を再び築きあげるべく、抗ひがたく促すところのものである。これがただなほ下線すべきことであらう、この魂の生活の深奥のもの、最も個性的なものが最後の超限的な生命根據に對する全體の直接の關係。それは「外にはない」、(それを外に求めるものは愚人である)、それは「汝の中に」在る、何故なら「汝」をば——各人が自己からそれを永しへに産み出すからである。「この深められた意味を私はそれにして私がかつて次のやうに曰つたとき言ひ表はさうと努めたところのものに與へたい、「吾々は一つの永遠なる仕事に働いてゐる」、すなはち「人道を各人の人格のなかに」築きそして維持するために。これに添加すべきことは、そして、神性を人間のなかに、といふことである。このやうな勞働の意味の銘記、敬虔からおのづから窮乏のまへには經濟的同胞の念が、敵のまへには法的道德的平等が、死のまへには藝術的創造的な自由が流れ出る。——何故なら天才はまた死の天使であり、創造はまた決意的に彼がその所有權をもつところのものを死に與へて死よりも深きものをまさしく死から奪ひとることである。それらすべては實になほ生存の戦ひ



に屬する、これは労働の切實なる、いかなるもののためにも失ふべからざる意義である。けれどそれを高く超えて——それについてはすでに一度指したのであるが——なほ一つの最後のもの、もつとも自由なるものそしてもつとも力つよく解放するものがある、それはそのなかに窮乏と敵と死が制せらるる勝利である。「すべての労働者のために、彼らが「彼らの労働より休息を得べし」といふ約束を含むものこそはじめて純正なる労働の宗教である。これがただ觀るもの、創造するものの態度と宗教的なものとのそれとの繊細な境界である。兩者は労働への對照關係に於いて考へればともに靜止である、けれど前者は労働に於ける、後者は労働からの靜止である。このやうな意味での宗教は私事であつてはならない、すなはち何かそれをもつて各人がその好むまゝに振舞ひうるものであつてはならない、それはみじめな寛容主義であつて、社會主義は決してそれを許容してはならない、何故ならそれは畢竟人が内的に拘束されてゐることができ、少くも労働のあらゆる非自由からの最後の脱出を自他にとつてやめやうとすることである。永遠の沈黙の夜のみへにも恐れざる一の統一的意志のみが永遠の晝の力強き曙を経験するであらう。ただ彼のみがまたそれなしには何らの勝利、何らの決定的な解放が望まれざる戦ひの意志の無制約性を起す。吾

々が今日沈んでゐる低きところから見てそれが最後の、もつとも遠き目標であらうとも、もしも吾々がこの低き位置から自己をふたたび擧げるならば、さうすればそれはもつとも近き、もつとも始めに達すべき目標である。この絶頂へまづ登らなければならぬ、次ぎにそこから降りに於いて労働の藝術的そして道德的透徹を経てそのもつとも明晰なるそして純潔なる學的そして技術的形成へと道が見出されるであらう。何故なら労働は自己目的ではない、自己目的とそしてしたがつて究竟目的はただ人間である、手段はしかしながら目的にしたがつて向けられねばならぬ、目的が手段にしたがつてではない。

105 たしかに労働についてのこれらの異つた見かたはいはば異なる諸平面に位するものである、それらは労働に於けるその永遠性の根據に對する労働者の地位、内的自由より創造するものとしての自己の所有、共に労働するものに對する道德的態度、そしてはじめてまつたく最後に形成せられるべき仕事とそしてそのために必要な一定の外的動作の干涉とに對する單に知的なる關係である。ただこの最後のものについて、少くも手近かには、靜止的な、有限的考量に於いて表はしつくし能ふ諸關係への固定的關係が生ずる、そのなかに於いてさへもこれまたツールが力説



した正確や、仕事そのものに對する正直さは一つの道德的契機である、すべて他のものは運動的な一般に決して靜止せざる因子に對する運動的な關係である、そして實にそれは内部から、畢竟は超限的なるものから動かされて、それ故にいかなる有限的計算に於いても定立しがたきもしくは捕捉すべからざるものである。けれどまたすべての外的なる、周延的なる作業、すなはち勞働のすべての學問的技術的要素も、内的なる、第一に實踐的なる諸必然性から流れ出るものであり、しかしてこれらの必然性は創造の深き内面的根據より、つまりは人間の最後の、最深の核心に於いてただ彼自らにのみ體驗さるべき永遠性の根據より、出づるものである。初めてこれこそ彼の究竟のもの、直接なものである、全く彼自らである。すべての間接性はこれに對してはただ學校として價值をもつのみである。深く素質ある人間にとつてはそれはもつとも困難な事である、けれど表面的な人間はそれを容易に習得する、何故ならそこでは彼は自己の元素のなかにゐるからである。彼はまつたく間接なものに於いて生きる、故にそれは彼により密接に位するものである。これが外的勞働の誤れる過重を大體説明する、その過重が勞働者の外面フニルオウツセルングに、勞働からの全きエントオウツセルング分離にまで、導いたのである。それはまたこの外面化と分離とを眞に強めたところ

の、いはゆる才能者が支配者の位置に昇ることの容易さを説明する。「それ故に勞働への教育のためには勞働の直觀アインザウツシツグ根據に決定的な重點を置くべきである、そこにすべていまままで展開したことは包含されてゐる。それにはもつとも早き時期から各人がみな參加してそしてそこに堅固な根帯を占めなければならぬ、そしてそれによつてまた各人が更に上昇し能ふあらゆる高みからそこへ還る途を再び見いださねばならない。されば勞働アムバウツセルング陶冶は何人にも免除されてはならない、そしてもしも經濟の必要からや法の要求にしたがつてでなくても、すでに人間の教育のみのためにも、普遍的勞働義務は、少くも一つの確定されたる服役期間の形式に於いて、以前の徴兵勤務のかはりに、いかなるばあひにも少青年期の若干年、更につきにあるひはより短かき時期（週、もしくは一定の日、時であれ）に對して、妥當しなければならぬ。かゝる勞働義務からの全き免除は、このやうな仕事には適能せずしかもこれに反して内面的勞働によつての深化と解放とはすぐれて能力あるもののためには、實際可能でなければならぬ、しかしそのときはそれは大いなる責務を包含する一つの高き特權として妥當しなければならぬ、しかし種々の程度の差は普遍的に必然的でありそして全くもつとも細心に行はれなければならぬ。それ自身に慰安なき、人



を卑くする労働を全く除き去ることはできない、しかしもしも一度労働せる人間への顧慮が支配的な、否絶的に決定的なものとなるならば、かゝる労働ははなはだしく制限され、正當なる配分によつて堪へやすくされるであらう、そしていかなるばあひに於いてもその労働に於いて思想と心とが自由でありうるやうに、魂らが日傭かせぎをしなければならぬことのないやうになるであらう。

106下 これはいま實際先へ進みすぎてゐる、しかしそれは、もしも吾々がいままで謂つたことから兒童に於ける社會的精神の最初の築成のために歸結を引き出すならば、直ちにここでまづ取り扱ふべきであつた事へと引き戻す。初めから——それはすべての前の考察の純粹なる結果として實に單純に眞向にふり翳すべきことである——無制約的に自己の築成が先に立たなければならぬ。そこから第一に、全く純粹に自己創造的な力の内面點から發出しそしてつゝにそこへと歸還する労働の自由に運動的な臨フエアツアイヒスレング本としての遊戯の侵すべからざる權利と他のものをもつて換へがたき價値が歸結される。ここでは何ら急ぎすぎた方法化が侵入してはならない。兒童の遊戯の眞剣さを一度でも注意深く觀察した人もしくは自己の幼時からのほ記憶にもつてゐる人は、遊戯が

いかに高き教育的價値を包含するかを理解せずにはゐない、そして、できるならばいかなる兒童からも、すべて他の力にまづ途を拓き與へるこの教育的な勢力が遠けられてゐないやうにと努力しなければならぬ。人はそのためにはほとんど何ごとをも爲す必要はない、それを妨げないといふことのほかに、それはさうすればおのづから爲す。然し妨害は今日非常に多い、人はそれを除き去るだけにすでに有りあまる仕事を見いだすであらう。それは根柢に於いて教育の、むしろ全民衆生活の、下からの健全なる新築成の全體を意味する。今日は勿論なほまだ遊戯せる兒童があるといふことは殆んど一の驚異である。

107 だんだんに明瞭にしかならぬ遊戯は本來の創造的な労働へと移る。遊戯は何ものか、ますますひろき創造への助力、下圖として建築基礎として、存立するところのものを創造せんと欲する。またここにも重要なことは自己作成である。私はここではことに土捏ねと形とり、つぎに圖畫のことを考へる、これらに對しては——何となればここにはすでに幾分かの方法が干渉せねばならない故に——諸種の方法が疾うにもつとも美しくしてもつとも精確に彫琢されてゐる、ただそれは今まであまりにわづかしか普遍的に行はれてゐなかつた。ただ外から單に受容する觀察



とそしてつぎに模倣することなく、自己の自由な構想、そのみが純正なる直観である。これはむしろ観アインシヤウエン入Eintritt(*intuitus*)といった方がいゝ、けれどもまたそれも究竟のことを曰ひ表はしてゐない、それでもまだ対象が外にすでに存在しそしてただそれへと自己の途を見出すことが主であるかのやうに見える。むしろ一つの自己観入ジツヒンシヤウエン(*dieichhineinschauen*)が要求される、それに於いて対象ははじめて成るのである。ただそのやうにして直観と労働とは全く一でありそして内的労働は全く外的労働の主人となる。すべての狭隘にする感化はまたここでは嚴重に避けねばならない、ことにここではすべては不可換的に特有なる才能の方向ができるだけ自由に自己を表明することにかけてゐるからである。才能の方向は人がそれを自由に残すや否や誤りなく自己を示す、しかしもし人がそのはたらきを一定の豫定された方向に強制しやうとするや否やそれは這ひ隠れる。

100  
しかし今や意志の陶冶の、すなはち協同作業の問題に來る。すでに兒童の遊戲に於いて個性が自己を啓示する。けれどもまた遊戲は却つて共同へと導く。相互の刺戟、競争、抗争に於いてそれは、獨り遊びに於けるよりも一層明晰に、同時に害なき獨特性をもつて、發達する。しかしそ

れは次には目的なき遊びから規定的なる作業に向けられたる、したがつて規則づけられた労働へと經過的に導くべき時である。ここにそのとき本來の作業訓育が挿入されねばならぬ、そしてこれに於いては協同的労働の自由なる規整が教育にとつて特に重要でなければならぬ。ヨハンネス・ランゲルマン(J. Langermann, *Der Erziehungskunst nach Stein-Fischschen Grundsätzen in einer Hilfsschule durchgeführt*. また著者の *Volksschule etc*, S. 52 参照)は、いかに兒童の純粹なる労働生活に於いて、また例へば才能弱きものから殆んど白痴に至るまでのものための一つの補助學校が提供するとき、非常に輕易ならざる條件のもとに於いてさへも、一つのまったく自由のうへに基づく教育ユルチウウシツグスフユルツァイン的結社キツシャが可能でありそしてつとも美しき果實を産しつつあるか、をもつとも確かに説得的に叙述した。それは最初に兒童たちに、彼ら固有の、彼ら自身によつて共にまつたく議會的形式に於いて議決されそして決定された計畫にしたがつて一つの土地を耕作すべく課與することから始める。全くおのづからそのときに一種の立法、管理、貨幣消費についての責任、裁定等の必要なることが示される。すべてこれらの職能を教師は行はずして兒童ら自身が、ただ教師の、つねに直接に事そのものから湧くところの、それ故に兒童らにとつて殆んど感



知せられざる指導のもとに、遂行する。彼らはそのあひだにきはめて速やかにまたいかに読みそして書き能ふといふことがすべて彼らの意圖のために缺くべからざる必要事であるかの経験をす。そのやうにして彼らはそれを學習する、それは何となればそれが教授計畫のなかに豫見され、成年者が彼らの成熟せる透察から兒童らの福祉のためにそのやうに考慮したから、ではなくて、却つて何となれば彼ら自らがそれを要し、そしてそれ故に自からそれを求むるからである。いかにこのやうなしかたに於いて各々の自然的な道德性の單純なる根本概念、財産、相互の責任、誠實と正直、義務と権利等はおのづから成長し、そして單なる概念たるに留らずして兒童の直接なる生活に固き根を張るであらうかを人はたやすく看取することができる。それにはそれは何らの問答示教カチススムを要しない、何ら抽象的の道理を、何ら訓戒やまた他人の模範を、また罰や賞を要しない、事ザッそのものが教へ、確信させ、警告し、眼のまへに例を掲げ、罰しそして賞する、そしてそのやうにして一つの行ひそのものに於いて力づよき生き生きとした道德性を生産する、それはあらゆる言葉の教へまたは技巧的に外部から試みられた意志指導よりもつと確かに各々の外部から來る障害的な影響に抵抗する。

「助手組織ヘルプシステム」をもつての新しき経験もまた同じことを保證する。一人の精通者がこれについて述べてゐる。(E. Becher, Erziehung zur Menschenliebe und Helfersystem, in: Philosophisch und pädagogische Arbeiten, herausgeg. von E. Becher. Heft 2, S. 45 u. 47.)「各人がすべてのために、全體のために、各人がその諸能力にもつともよく適應する位置に立つこと、それが一つの理想的社會的秩序の最高根本原理である。今日の集團教育グруппエンエデュケーションの組織は不幸にしてこの理想の反對に立つ。個性化にあらずして單一化、同一の型にはめること、がその特色の一つであり、そしてそれはそれとともに利己主義への不斷の訓練を結合してゐる。各人が自己のために、しかしすべてができるならば同じしかたで、といふのが學校事業の一つの根本規則である。そこには行爲によつての愛他の社會的志操への訓練が缺けてゐる。これらのもつとも必要なものの重大なる閑却の結果を吾々は今日もつとも悲慘に經驗しなければならぬ。」またフェルスター(Fr. W. Förster, Autorität und Selbstregierung in der Leitung der Jugendlichen, Langensalza, 1915)も自己統治自己統治の教育的な力に充分な尊重を拂ひそして彼がいままで特に高調した權威アウタリテイの原理との關係を精密に考量した。彼は示す、すべての指導はただ、強く動かされたるそして自己活動的な力が解放されてあり



それに人が方向を與へ能ふときに、そのときにのみその名に値ひする。單に鎮壓的な規律は指導の反對、指導の抛棄、生命への謀殺行爲である。そしてそのうへにこれは規律自身の失敗を、あらゆるその刹那の結果にかゝはらず、意味する。何となれば規律はまさしく自由なる行爲のうち、に於いてこそ自己を維持せねばならない。中心にあるものの負擔過重、規制の上長裁決權の無制限等はフェルスターによれば、國家そして社會に於いても吾々の權威組織の全體の根本誤謬である。それによつてしかしながら單に下位の裁決權の自己活動への教育が妨たげられるのみでなく、また中心にあるものの一つの眞に指導的な活動が不可能にされる。そのときには少青年者の團體精神の強き權威と教育の權威とのあひだに一つの戦争状態が生じ、これは若少なる人々の良心の生活にただ迷亂的に作用するのみである。この教育的諸權威の二元はひとりただ自己統治によつて組織せられたる、團體精神と教師とのあひだの、協同的勞働によつて除かれる。私はフェルスターの教育が「生きた諸勢力に一つのより高き彫塑的原理をまづ加へ入れねばならない」といふ前提に賛同しない。けれど私はそれだけですますます進んで自制と自己責任の教育的な力の尊重のために彼を援用する。まさしくそれらによつてのみ純正なる權威と指導とが可能であるといふことは

まつたく正しい。けれどもそれはそれが指導せらるるものの自己活動性を單に手段としてその使役のもとに置きそしてひそかに自己に隷屬させることによつてさうであるのではない、むしろそれら自ら單に助力的に生成しつつある意志の自己解放のために奉仕することによつてさうなのである。何となれば自己をますます要なきものとして、被教育者をできるだけやく彼自身の上に立たしめることがその課題であるからである。

III 兒童が指導なほ要するかぎりには、彼がそれをもつとも密接な近さに、すなはち同年齡もしくは少しく年長なる仲間について、決して彼より非常に高くにでなく、見いだすことがもつともよきことである。同じくもしくは互ひに接近して立つものの相互的教育の勢力は高く上に立つものそれよりも比較を絶して強くそして影響深きものである。後者はつねに一種の遠隔作用にもとづくものであつて距離に比例してはなはだしく減ずるものである。しかしながら自己活動の覺醒は意志が自己を孤立せしめる事をその目標としてはならない。それは共同態を止揚するであらう。しかしながらまた自己活動とそして周圍の世界の要求の代表としての外的指導との單なる均衡もまたその目標であつてはならない。さうすれば（もしその均衡が達せられたと假定すれば）勞働



が、經營が全體としては結局主人となり、人間が主人ではなくなる。さうすれば何人もはや他人の直接的強制のもとには立たない、けれどすべては差別なくいまや正しく全能なる物の強制のものに立つであらう。人間は自己の主にあらずして、またそのやうにしてもはや彼のものならぬ勞働の僕であるであらう。そして畢竟はこれはただ二平面ツワイエーベネンに歸るものである。一方は、勞働者の最大部分は全く勞働への隷屬状態に留まり、他方は、きはめて少数は自己を勞働のうへに、しかしながらただ彼らが勞働から脱退せるが故に、高く擧げるであらう。そこから次にいはゆる「能者の上昇」といふ通語の意味するところのものが成立する。それは實に見やすきごとく社會の二階層を豫想するものである。ここにはより高き才能の證示によつて勞働へのではなく勞働からの自由を克ちえむとする熱き競争が生ずる。區分はつきにしながら避けがたく非勞働者の勞働者に對する命令的、支配的位置となる。「より高き」才能は上に立つこととして命令することの才能を意味しやうとする、しかしそれは經驗によればもつとも才能なきものにも能ふことである、それにはただ力が彼の味方にあるを要するのみである。そのときは勿論眞實に於いて權威を行使するものは彼ではなくて、彼が——ドイツ語がそれを無類の正直さをもつて言ひ表はす

ごとく——「着る」(日本語で「任ぜられる」占める)位地である。人間は制服なる、人間でなく、その上着が命令する。せひそのなかに人間が入つてゐなければならぬだらうか? 經驗によればそこには必ずしもつねに入つてゐるわけではない、況んや正常なるものがゐるわけではない。命令權力を行使するものが人間であれまたは教養であれ、それはみじめなる「形式的」教養である、例へば、言語と外的定文の熟知、もしくは威壓の技術、それからは重大なるばあひごとにもつとも悲惨に効力を失ひそしてそれとともに偽り飾られたる權威の空虚さを恐ろしきまで啓示する。吾々は、これについて警戒せざるには、あまりにも苦がくこれを經驗した。疑ひなく事柄の主人ヘルとして師マイスターであるものはさうでないものに對しての一つの合法的なる命令權がある。しかし何人も他人について主人マイスターとして師であるべきでない、ただ各人はその位置に於いて彼の支配するところのものについて、彼がそれを保フルシユテ障シユテし能ふ故に、すなはち言葉どほりにいへば彼がそれについてそれが正しく爲さるることを保シユテ障シユテし能ふ故に、主人として師である。そこでは何人も彼に容喙してはならない、もしも彼がまたいかに他の同じやうには事柄に通ぜざるものとしてそれ故に同じやうには責任なきものが爲すべきかについても規定し能ふべしとするならば。それはし



かし一人を主人に、他方を僕とすることではない。却つて両者は、命令と服従、規定と規定に従ふことは、<sup>ドイツ</sup>勤勞、事についての勤勞である、そしてそれは畢竟共同の、純粹に事そのもののため、すなはち共同態の築成のための事についての勤勞である、何となればすべての事は畢竟この築成に奉仕すべきであるから。

それはしかしふたたび吾々の最初の根本原理、教育の組合的編成の原理へ歸つてくる。吾々によつて考へられた教育的、(そしてことに本質的に)、自己教育的組合は一般にただ經濟的共同の豫想のもとに、全くはじめに説明された組合の概念にしたがつて、全くこのやうなものなかに築きこまれたる、むしろその胎から直接に生ひ出でそしてつねにそのなかに残留するものとしてのみ思惟せられる。堅實なる娛樂、身體的訓練、兒童及び少年の遊戯のための、また成年者らの教養と技藝の練磨のためのすべての共同施設はこれらの組合に屬するものであるであらう。私はそのやうにして一つの中心的な、經濟的共同態の基礎の上につたく自己統制と自己規制にもとづき、民衆文化のすべての方面を同時に包容する組織を思ふ。經濟的共同態への編入に由つて、この考へられた教育組織は全くおのづから、何らか外的の強制手段を要することなく、一種の義務

的性質を帯びるに至るであらう。自己をそれから除去するものは同時にその考へられたる聯合の經濟的そして法的利益を喪失するであらう。民衆の大なる多數は一つのかゝる一たび確立されたる施設に悦んで参加するであらう。各々の自由なる組合が、社會的全的秩序の全權的器官として承認せられむがために、さきに考へられた教育的(自己教育的)施設をその組織企圖のなかに採り入れそして普遍的規範にしたがつて恒常に保ちそして改善に努力する、といふことはその前提でなければならぬ。それはしかしひるがへつてまた一つの全く自律的なる教育組織の統一秩序を、國家内に於ける一國家としてでなく、國家一般の魂として、促進せしめる。經濟的國家と法的國家と、兩者は教育國家に於いてただはじめて正しく存立し能ふ。教育はそこから經濟と法とがそれに奉仕する器官として自己を築き上げそして繼續的に養はれそして指導せらるる中心器官でなければならぬ。もつとも直接にはしかしこの三の社會的機能の根本關係は社會的結合の直接的形式、全社會的體制の細胞としてのもつとも狭い意味での組合——隣人組合と人は巧みにも名づけた——に於いて自己を表現しなければならぬ、そして全社會的體制はつぎに更に連續的な段階を経て、組合の組合としてそして更に進んで、つひに最も包括的な全體、社會的國家にま



113  
で自己を築成しなければならぬ。

そのやうにしておのづから生長しつつあるものの教育は最初の道程より最後のものまで、人間の生涯を搖籃より柩まで覆ふ、相互に錯綜しそして相互に依頼する教育的感化の確實に編まれた體系のなかに整序せられるであらう。そのやうに編制された共同全體への從屬は純粹にかゝるものとしてすべてそれに参加するものための教育の全く自由なる組織を表現するであらう。また本來の學校も一つのただ比較的獨立なる一員として同じ全組織のなかに、そのすべての階段をとほして、編入されそしてそのやうにしてはじめて眞に「教育の學校」たるであらう。學齡以前に對してはさきに與へられた意味で擴大されそして普遍化された幼稚園、託児所ナシヤイナートが、義務教育後の少青年のためにはことに道徳的、藝術的、宗教的教育の方面への教養繼續學校の一つの非常に自由なる擴張が、身體的鍛鍊や健康なる慰安やそして品位ある交際の修養と手を携へて、そして成年者のためにすべてが民衆講義、民衆大學、民衆館等の事業をもつて永いあひだ努力しつつあるところの、ここかしこにはまた多くを期待せしめるしかたで始められたところの、勿論いままでは何處でも徹底的に實現にまでもたらずことのできなかつたものが、對應しなければならぬ。そ

れにはあまりに多くの事情が、ブルジョアの社會の全特徴が、ことにその偽り多き上昇の時期に於いて、人が試み能ふもつともよきものに對してさへ、禍ひ多く作用した。それに於いて本來考へられそしてこのやうな助力をもつとも多く要してゐた階級にまではそれはほとんど徹しなかつた。それはまだそのまゝにありそしてすべてに於いて社會の龜裂を示してゐた、その上に人は徒らに橋を架けやうと努めたが、けれどかゝる試みのすべてをもつてただますます鋭敏に感知されるやうになつた。人は民衆に、それが本能的に感知したとほり、決して外部からもちきたされることのできない、ただ民衆によつて自ら創造され、むしろ彼らから自由に生長し出でねばならなかつたものを齎らさうとした。人は民衆にそれを指示しそして彼らの救ひを自ら造るべく彼らに助力すべきである。最後にしかながら彼らには何も外からもちきたらされうるものは役に立たない。ただすべては、それが重要なことであるが、民衆が自ら助ぐることを學ぶことである。それはその各々の方向と各々の段階に於いて社會的教育の全體に妥當する、それはしかし何よりも——その基礎づけについて妥當する。



## 五 社會的統一的學校

さきにはいかに社會的教育への唯一の重量に堪へる基礎が家庭聯合に於いてつぎのごとく定められるべきかが示された、すなはちそれは財の生産と財の分配の、すなはち經濟の、組合的構成のなかへと固く編み込まれて、直接にこれへと、これをとほして國家へ、最後にすべての兩者のそとに遠くひろがる人間に於ける人間的要素の完成へと、最高のものまでもみちびくものであらねばならない。一たびこの土臺が安全に定められたならば、さうすればそれをもつと社會教育のそれからさきの建て上げは殆んど避けがたく豫定せられてゐるといふことができやう。しかしこの基礎は存しない、それ故にそれはまづ人間への教養をこの安全な土臺のうへに置くために一つの技巧的な仲介を要する、といふのは、學校は、今日あるがごとくでは殆んどいかなる點でもここに定立されたる要求を満さぬ一つの學校は、それが、成るべきところのものへたしかに導き能ひそして必然的に導くやうに、そのやうに新たに形成せられねばならない。學校が、それが今日ただあり能ふごとくには、一つの衰れむべき代用品にすぎないにせよ、それでもそれはより純正な

るものに由つて、むしろ唯一純正なるものによつて、それが能ふや否や直ちに、取つて代られるやうに、それをめがけて労働し能ひそしてしなければならない。それ故に學校はその本質に於いてとにかく保存せられるべきものである、それはその健全なる根本的存立に於いて決意的にそして力強く自己を保持する權利と義務とをもつ、しかしそれは、學校がその自己改造、然りそれがただその準備たるよりよきものによつての更替の義務をはなはだ嚴肅に取るといふ條件の下にある。學校にとつてはこの義務を沈思してそしてその充足を考慮すべき時である、しからざればそれはまたそのもつとも健全なるいままでの存立をも保持すべきでない。

學校がかのベスタロツチの言葉「直観」「フレンツァウング」に由つてもつとも單純にそして最高の歴史的權利をもつて言ひ表はされた直接性の基礎を恢復する、といふことは、しかしそれは單に第一のことではなく、むしろ唯一に必然的なことであり、勿論一たび正しき途を去つた以上は、同時にすべてのうちでもつとも難きことである。ルソーはそれを「自然」と呼び、そしてベスタロツチもまたしばしばさう呼んでゐる。それ自身にはあまりに無規定的な、しかし生活に密接なる、そしてそのうちに含む善き刺戟のために拋棄すべからざるこの通語は、疑ひなく、人間をその魂と精神の生



長の健康なる地盤から漸次に分離したすべての媒介（知力のであれ、意志のであれ）からの解放を意味した、それは純粹性への復歸、根源性、直接性、無拘束、そしてそれとともに形成的な觀照、觀照的な形成に愛をもつて身をゆだねる無遲疑である、かゝる觀照、形成は自由に、すなはち個性的に、しかし個性的法則的に、生成しつつある、まだ斷絶なくその現在のなかに生きつつある、現在によつて包容されつつ包容する生けるものの形成的諸勢力の解放されたる自己作用のなかに發育する、それは一つの技巧的に、教育の前もつて確定された意圖にしたがつて整理された代用的世界、學校園、學校作業場、蒐集、模型、況んや言葉の記述などのそれならぬ純正なる「兒童園」に於いて、ひとしくすべての開放された、一つの自然的な共產主義に於いてすべての人に指し與へられた大地の運動場の兒童園に於いて、發育する。地はおのづからすべてのものと同財である、それは少くも兒童にまづそのやうに作り與へられることを要しない、兒童は生れながらそれが自己に屬することを知り、それをわがものとして取り、何らの考量的な遲疑なしにこのすべて生けるものなかに生きる。兒童のためにそれをまづ獲得することが教育の任務ではない、却つて彼を學校への最初の一步とともに同時にこの失はれざる樂園から無理やりに追ひ出さ

116  
下  
ないことこそその任務である。むしろ教育するもの自身がこの人間的形成の處女地の根本的基礎のうへに兒童とともに踏み入るべく準備すること、すなはち彼自身が一人の子供らしき人間たること、が健全なる教育の第一の條件である。

そのやうにして學校園や、學校作業場のかはりに人は生成しつゝある人間を——たゞ妨げられずに全環境世界、いかにそれがまた吾々には「自然」から離れてゐるやうに見えやうとも、しかし彼にとつては彼が自らまだそれである故にまったく自然たる環境世界のつねに開放されたる作業場、ひろき園に置け——むしろそこに放て。この世界はまた吾々にとつても、もし吾々がそれをまた全く自然として認識するには自然からあまりに遠かつてゐなかつたならば、さうであつたであらう。そこで重要なことは單に勿論第一に重要なことのみではない、すなはち野や森、山や河、地とその上にある天空、ありとあらゆる光、音響、香りそして味をもつて、それが吾々のなかによびさますあらゆる名狀しがたき感覺の動搖と感情の暴風とをもつて、そして家畜や鳥やそしてあらゆる數多き動物や植物が吾々の教師となること、吾々が聖フランシスとともに魚に説教するのでなく、彼らを吾々に説教せしめるべきことのみではない。このやうな自然的なエデンに



於いては、ロシア人や東邦人一般のそのごとき萬有感マンゲツキのための場所がある、しかしまたかゝる感情を、ドイツ人を實に知つてゐる何人も、ドイツ人に於いて見失ふことはできない、彼はたゞ彼の眼を凝視しそして彼が妨げられずに彼自らでありうるところに於いて、同様に靜かなる自己確實性に於いて出會ふだけで足りる。しかし人間には、ことに西邦人には、このエデンに留るといふことはつひに許されなかつた、彼は一つのはなはだ樂園らしからぬ、殘酷なる戦ひや、苛重なる辛勞や、裂けるやうな渴きや、焦がすごとき炎熱、威迫的な旋風の埋没やに満たされた生の沙漠のなかに出て往かねばならなかつた。けれど吾々は認識しなければならぬ、またこれも、自ら充分に自然であり、それを自然的に取り能ふものには、自然である。何故なら自然は創造を意味する。しかるに創造は平和ではない、却つてそれは戦ひである、創造はただ死から生を奪取することである。それ故に、全くその中に立つものはあらゆる戦ひと苛酷なる勞苦によつて生活否定的に觸れられることには感じない、却つてまたそれもとゞ彼のより強き、より獨自なる、より深奥なる生より流れ出る。むしろあらゆる不協和音の鋭さからこそ一つのただそれだけですすます深き、ますます豊富なる諸音が彼に聞える。そのやうにして争ひそのものが彼には萬物の「父、」

すなはち生を恵むものとなる。生はそれが自己を死から奪ひ取るときにはじめてまったく自己を自己創造として感知する、あだかも自由の歡呼が鎖を断ちきるときにもつと熱く感知せられるごとくに。「學校」は吾々にとつて決して何ものか更に力弱げなものを意味してはならない、それをもつて謂はるることは、學校が「自然」として人が考ふる斷絶なき根源的諸音から無限に重なる分裂をとほして一つの共鳴へと、しかし決して最終のものとして考へられることを欲せずとして決して最終のものたらすただやまさる自己深化に於いてつねに新しき共鳴を新しき克服へと發出せしめる一つの共鳴へと、貫ぬく過程として理解されむことを欲する、といふことである。何となれば、ヘラクライトスの言葉にしたがへば、隠れたる、つねにふたたび自己を隠す諸音は、反音をまつたく強制しえたりと思念する、表はれたる、すなはち表面的なる諸音よりも強く、そしてその敵手、すなはち反音に匹敵するものである。そのつねに、ますます深く展開せる不協和音を、とほしての和絃の自己深化の方法的無限性こそはじめて學校の充分なる概念を與へる。學校はそれ故に決してそれを「自然」の平和から奪取する仲介を回避しやうしとはならない、それはただまつたくその仲介に對してつねに主人となるやうに、決してそれらの捕虜とならざるやうに決心



118  
してゐなければならぬ。學校はあらゆる仲介をとほしてつひに最後の直接なものにまで迫るべく努力しなければならない。

しかしながら仲介が一つの見渡しがたき序列に於いて一を他の上へと築層するとき、これもつて同時に與へられることは、より高きものがより低き階段に立てるものに、より高く迫り昇れるものの助力に由つて、結びつけられる、しかしそれはまたともに向上的に努力するもの、然りまた後より來るものたちの助力によつてであるといふことである。何となれば人はまた翻つて教へることによつて學習する、すなはち學習するものから學習する、協同的な向上に於いて下からみづみづしく努力してきたものは却つて、さなくばより高き進歩のあひだに麻痺したであらうところのものを支へそして擧げる。上昇の衝動はただ若き族と緊密に結合しそして後者の向上的努力に愛しつゝ生き生きと關心するところのものにのみ若々しく生き生きと残る。そのやうにして一步一步に、事實的に遊戯が労働へと進むごとくそのやうに遊戯から労働へと共同的に前進するものの相互的關係に於いてかの自然的共產主義、實はただ教育的共同態への觀念的出發點を形づくるにすぎぬ共產主義は、本來の學校にとつてははじめから終りの時期まで固有でなければならぬ

い前進過程の眞の社會主義に變ずる。畑、「自然」もしくは「地」は共同である、畑を耕すこと、そこから地の築成として「文化」てふ名が生じたるもの、は共同であつてはならない、しかし組合的でなければならぬ。そのときには競争や、先がけやまた後に遅れることや、上るものや下るものがあるであらう。そこからもつとも重大なる種類の危険が生ずる、それについてはなほ充分語るべきことがあるであらう。しかしそれは畢竟は相互に對してではなく、相互とともに、相互のための戦ひである、また自然に對抗してではなく、自然をもたむがために戦ひは進む。何故なら——くりかへしていへば——自然は、單なる創造されることではなく、まつたく自己創造の行動的意味に於いて創造である。それ故に純正なる意味に於ける文化はまさに最初の自然根據から起つて作用する、つねに自己を高め、自己を乗方する自然である。そしてかゝる乗方の系列は、第一の項や最後の項なしに、無限なものとして考へなければならぬ。そのかぎり無邪氣と無義務との一つの仙境的な原始状態からの暴力的な分離の神話は、人間が實に在りそしてかつて在つた境位のまつたく誤れる譬喩である。この神話は吾々に與へられたならば吾々を殺すべき自己を誤解せるあてがれの詩である。何故なら吾々はまつたく課題の無限性のなかに生きてゐる、それ



は勿論、もしも理解的知力と努力的意志とがそれらをまつたく支配すべきであつたならば、兩者を全く壓縮し窒息せしめずにはゐないであらう、しかしそれらとたえずしてたえず格闘することこそ、吾々を唯一に生命に保つところのものである。まさしく吾々がこの希望なく見ゆる戦ひを斷然吾々のうへに負ふとき、敵をまつたく眞剣に敵として、それから生を奪取すべき死を全く死として、吾々の勝利を徒勞ならしめむと欲する悪魔をまつたく悪魔として取るとき、まさしくそしてただそのとき吾は單に生くることのみならず、また勝つことを希望し能ふ、ただに死から生を救ふのみならず、死そのものを救ふことを、ただに悪魔に抗するのみならず吾々の反抗のまゝに彼の敵對がつひに消滅するのを見ることを、敵から武器を奪ふのみならず彼を友として得ることを、希望し能ふ。これがはじめて練達者アイスタラーとなることである、そして學校が自己に課題として立せねばならないものは決して小さい練達者アイスタラーではない。

119  
そのやうにしてはじめてベスタロツチとゲエテとが一致しつゝこの「たしかに築きなされたる持續する地」の上の人間の状態を「中間状態ミッテラフシュタット」として解しそれを彼ら二人が弟子の、状態として、さればまさしく學校として解したその意味が全く理解される。彼がそこから出發した一つの「自

然状態」への復歸はそのやうにして人間にとつてはもはや問題ではない、彼の目標は、もしもすでに、單に概念的に、「進化」の前進に對する類推的な反對に於いて考へれば、實際に於いてはただ觀念的な出發點とは實にまつたく別のものである。兩者が自然と呼ばれるなら、しかしながら再び自然になつた文化は、一般にまだ自然にまで進み迫ることなく、そこへとはじめてあこがれつゝある文化とまつたく異なるものである。人がそのなかに個態インディヴィデュウム、部分なきもの、自己のなかに不分なる一者、また全く自己のうちに完結され、やうやく（あだかもただ鏡裡に於けるごとく宇宙を己れのうちに荷ふ）内面點より外へと自己をひらきそしてそこからうけとつた光線を反射しやうとする個態を考へてみれば、さうすれば人は必らず、それをもつてはじめて踐まれた途との反對に於いて、宇宙ユニバースの、「一に向へるもの」の、何ら完結されざる、却つて永しへに自己を遠くする周延を考へるであらう、宇宙は、個態とおなじく、何ら一つのそれ自身に空虚なる零點の無味なる抽象を、また一つの終りなくひろげられたる空虚なる觀念的空間の同様に内容なき普遍性を意味せず、ただ超限的具體的なるものの全く充實せる内實の全體を意味しやうと欲する。けれどもまさしそのやうに具象的に取りそして具象的に互ひに結びつけて考へれば、たしかに兩者は、



理想的に考へて、同一であるにちがひない、一つのそれ自身普遍的に個別的なもの、個別的に普遍的なもの、ただ一方はその根源的内包的統一に於いて、他方はそこから流出する外延的統一に於いて思惟されたものである。また手近かな、己れ自身のうちに還る圓周の昔ながらの譬喩も、またもし人が圓を旋渦形にまで擴がらせるとも、この關係を全くは言ひ表はし悉さない。それらに於いては比較はまだあまりにはなほだしく一つのただ微分<sup>ディフェレンシャル</sup>化する發展の表象に固執して留つてゐる、それはしかしまさしく決定的に重大なる積分化<sup>インテグレーション</sup>を默殺しもしくは隠蔽してゐる。これを人はむしろ一つの唯一的な普遍的勢力の概念のもとに、しかし空虚な力素のそれとしてではなく、充實せる具體的發動、すなはち精力として、思惟することが出来る。實際人は力をまさきに個態のなかに求める。人はまた力をそこにもとめるあらゆる權利をもつてゐる。何となれば力はただ個態のなかに於いてのみ意識せられるからである。けれどそれは反射として意識せられる、それが根源的に個態に於いて包含せられそしてはじめてつぎに外に投射されたかのごとくにはなく、このやうに、すなはち萬有生命の具體的統一がただまさきに彼に於いてそして彼のためにこの中心點から體驗するかのごとく、自體にはしかしながら一つの他のものでなく、却つてこれをもつて

充たされて、まさしく積分的な、すべての體驗者にとつて、そしてまた彼らすべてに最後の根柢に於いて共同な統一として意識せられるかのごとく、そしてそれは個別化にかゝはらずすべて一にそして實在の深底に結びつけられ、そこにもつとも深く根ざし一なるものであるかのやうに意識せられる。まさしく個態意識が自己をまつたく自己のうちに、把握するときに、それは己れにそれ自らよりも以上の何ものかを知る、單に一般に他のものに、我に對する一時の汝ではなくむしろそれに於いてそしてそれに由つてのみ個態意識自らがそして吾々すべてが生きて在るところの萬有生命の全體に關係してゐることを知る。かゝる最後の、最深の心化<sup>ベジネーション</sup>と内面化<sup>インナーゼーション</sup>に於いて個態の意識ははじめて正しくその心に、その内的存在に來り、そして單なる生活と體驗からたゞ彼にのみ知られたるそれ以上へ、すなはち實に消滅にあらすしてあらゆる消滅の消滅なる一つの死へ來る、それはまた一つの他の、たとへより高きものでも、状態への経過ではなく、實にすべての経過の経過である、あらゆる過去と未來とが、不分の、超時間的な現在のなかに消えることである、それに於いてすべての死ぬべきものが不滅になることである。兒童期、成熟、そして老年はそれをもつて書き替へられる、そしてそのやうにして再び一つの新しき側からすでに



今も<sup>ロニヤリシオン</sup>族から族への文化の生殖としての、老年より少年への継続的贈與としての學校の理念に對して前提が與へられる、それはつねに再び自己を新しくする處女的自然の原始的地盤に種子を沈めることである、次にそれは自己よりの継続的生産と新たに結實せしめるための成熟作用、つひに死滅のごとくに見ゆる最後の成熟である、これに於いてはしかしながら生産一般がではなくたゞ有限化する特殊の形成が徐々に消失しそしてまさに最高の生産性を意味する一つの無限化に場所を譲るのである。それはすべてを完成する「老年」の一つの意味である、しかしそれは勿論有限性に戀着すること深く、したがつてそれから離されることが死のごとく見ゆる人には、全く消滅するにちがひない。より深く視る人は、死のほか、何も死なず、生は生くるほか能はずそしてそれが死から刺針を奪ふときその最後の勝利に達するといふことを認識する。

しかしまたそれをもつて學校の理念の内實は悉されたのではなく、却つて一つの更により高きものへの指示が與へられる。學校は單に成熟したものが成熟しつつあるものに爲す勞働ではない。學校に於いてただ一の個態らの結合を、個人の個人に於ける勞働のみ、そしてそのなかに兒童期から漸次の成熟作用を経て人格的完成への、そしてつぎに再びより少く成熟せるものを自己の

成熟の高さに挑み招くことの不斷の循環——見かけの循環を見るものは一般に一つの狭き見解である。否學校の仕事全體が一つの唯一のものであり、それに對する個人の各般の寄與がみなただ全體の仕事の一の隷屬的契機である故に、この全體は決して單に部分項として一定の生活範圍の、ひろくは民衆全體の、最後には人類の、共同的精神的發展のより大いなる全體のなかに編み込まれるのでなく、また單にそれは同時にその内實上、それに於いてそしてそのために働くところのすべてをそして各々のものに於いて、より大いなる全體に關係するのではない。却つてこの決して靜止せざる、つねに運動的なる、決して在らざる、永しへにただ成りつゝある全體そのもの、すなはち人類の歴史こそ、民族の歴史、個々の民衆範圍の、もしくはより狭き共同態の、そしてはじめてまつたく終りに各個人の、歴史を包容しそして規定する人類の歴史こそ——これがはじめて學校の概念を充足する。そのやうにアウグスチヌスや、レツシングや、すべての嚴肅なる歴史哲學は考へた、何となれば彼らは歴史を人類の教育と解した。實にこれは歴史とまた教育の、したがつてまた學校の、本來のそして充分なる概念である、學校はこれをもつて今や精神の生活そのものそして一般と全く一になる。何故なら精神はただ個態から個態へ、族から族へ、時代か



ら時代へとつねに新たになることとして自己を殖すことに於いて生きる、すなはちそれは「歴史」と呼ばるる生の特有の様態に於いて生きる。歴史は單なる成起ではない、それは實働的に向けられた成起である。あたかも單なる見るに對して「觀」が關係するごとくに。それは一つの成起の自己作成、自己生産であり、それは一般にただこの成起を作用しそしてその責任を負ひそしてその主たるものが精神たるところに、精神たるかぎりに於いてそこに成立する。それは直ちに共に言ひ表はす、精神がそれに於いてただ自己を自由に自己から形づくりそして象どり、生の「學校」に單に自由意志的に赴くのみならず、自己をこの學校のなかに取り入れそしてつねに、意識してそして意志をもつて、そのなかに自己を維持することを。

またなほ學校はその意味のかやうな最後の深化に於いてもまつたくその「中間状態」の特性を保存する。それは労働の規則づけられた段階的進行、方法、抑揚づけ、また餘すところなき律動化に於いてもつとも容易に把握することができる。しかしこれは直ちに個々機能の一つの確實なる組織と、そしてそれとともにかの呼吸と比較された平均化そしてそれによつての加せる諸勢力のもつとも豊富なる發展を包容する、そのなかから、さきに示したやうに、法的國

家的組織のあらゆる意義は、その利益そして危険、美德そして弊害とともに、成長する。そこに今日多くの人々はまつたく疑問となつた、それ自身にはしかも根柢深き、實際全く止揚しがたき學校と國家の二概念の聯絡が基づく。人は學校の獨占的國家化に對して用心する多くの理由をもつてはゐるが、けれどこのやうな用心に原因を與へる多くの弊害の核心は、一般に公共態が學校を專占しそして私人もしくはは家族もしくはは狭き地方的組合（學校組合）の望むらくは善良なる意志にそれをゆだねえぬことには存しない。かへつて誤謬は一にかの普遍的に國家に對する正當なる不信任を喚起したもの、自由なる自己管理に對する強制的中央權力の一方的過大に存する。それは殊に根本的に顛倒せる、ただに民衆教育のそののみならず、民衆一般の、そしてそれとともに人類と歴史との意味全體を偽造する一つの觀念、一つのひろき一般に非精神的、反精神的でないとしても、しかし精神的なものの物質的條件に本質的なものに於いて固執せる多數者の、一つの精神の獨占と支配とに於いて思惟されたる、それ故に獨占的に教育の能力ありそれを職とする上層によつての、引き上げの觀念にみちびく。教育のかゝる中央主義は一の階級によつての他の階級の經濟的掠奪と法的壓迫とに恰かも對應するものである。これに反して吾々によつて要求され



たる兄弟的、共同労働の経済的自律とそしてそれから歸結する平等の原理にしたがつての組合的労働規制の法的自律には教育的組合もしくは組合的教育的の精神的自律が對應する。これがはじめて精神的自由の要求を全く眞理ならしめる、それは同時にはじめて法的平等と経済的兄弟的共同の内面的可能性と最後の保障を創造する。しかるにこれ自らはその可能性の根據とその最後の保障を自己以外の何處にも求めず、純粹に自己からそれを汲まなければならぬ、それらは何らの外的設備、何らの（誤つてしか名づけられた）「組織」（それは實はむしろ機械化である）によつてもそこにもたらされまたは傳へられることができない。このやうなものはしばらくは幻惑するやうな見かけの成功を獲るかもしれない、それはひろき擴布に於いては一つの普遍的「教化」の欺き多き光澤を群衆のうへに投射するかもしれない、しかしこの光彩は最初の眞剣な試練に於いて直ちに剝落しそして腐敗せる自然、直接性と原始性との根據の全き破壊のほか何ものをもあとに残さない——それを吾々は今日眼前に見てゐる。幾分かのこととは成し遂げられた、それで各人は彼の新聞を読み、文學と藝術とについてともに談じ能ふと信じ、劇場や音楽の演奏をあだかも一つの興奮飲料のやうに飲み込み、そしてその上に経済的、國家的、そしてそのやうにまた精神的すなは

ち教育的諸秩序の客體であると同様に主體であり、そしてそれらを好惡によつて變更しもしくはまつたく顛覆することの権利要求をもつて登場する。これに於いては實は何もおどろくべき事はない。何故なら精神的事項が國家的立法、指導そして監視のもとに立たなければならず、それによつてその各々の方向を受け取るのである、といふ素朴な前提はつひに完全になつた「デモクラシー」の一つの新しき獲物ではなく、却つて全く古いシステムから引き繼いだものである、たゞ今はそこからまた、これらについて國家の權能に依屬するすべてのものについてと同様に、各個人が、國家市民として、ともに參與し、簡單に隨時の多數がそれについて議決しそして少數は多數議決に絶対的に従はなければならぬ、といふ充分な徹底した結論が引き出される。この結論がいかに愚劣であるにせよ——それは精神的なものの一般の國家化の歸結であり、それは疾くに原理として妥當してゐた、そして今人がこの歸結をもつて少くも眞剣になつたといふことはむしろ賞むべきことである。實際むかしの官僚政治が恰かも精神的な事項については専門的理解を尊重しそしてまた、それが失敗したときには、一般のための最善を眼中に置いた、といふことは完全に眞實である。しかしまた單に個々の有能なる官吏たちのみならず、精神的事項の全官僚的管理



の組織の最善の意志そして最善の専門的理解も、あだかも一般に中央集権的指令によつて訓育や教育や全體としての共同態の精神養護の事柄に於いて一つの枠縁以上のものが作られ能ひ、そしてそれを満すことが自由に自己をはたらかす精神の固有の力によつて豊富な仕方であらうか、そのやうに考へた根本的誤謬を改善するものではない。畫を作り能ふものはたしかにまたそれに適する枠を考へ出すことができやう、これに反してまたもつともすぐれた枠も畫に何ら貢献することはできない、しかしたしかに豫じめ確立されたる枠はつねに畫自身の創造から充實せる自由を奪ふことの、創造をただ拘束しそして迷亂し能ふ制約に繫縛することの、危険を包含する。

それでは精神的な事柄の全體は精神的にもつとも高く立てるもの、自由なる考量のもとに置かれねばならないのか？ けれどそれは遂行しがたいであらう。たしかに、事を解するものが決定せねばならない。けれど何人が、何人が事を解するものであるか、について事を解するものであるか？ 恐らくはかつて一度存在したとき何らかの普遍的に認容された精神的指導は現在存在せず、今日までの發展の全過程よりみれば存在しえない。またもつとも普遍的なる認容も一つの眞に事に正當なる指導の保障を與へない。何故なら集團としての集團はその自己の事柄の無理解

について明らかであるだけ、況んや眞正の事を解するものをそれとして認識するだけ、充分に事を解するものではない。彼らが、一たび彼らが自らその指導者を定めることの責任を自己に取つたのち、彼らが見づから惹き起したものに苦しみ、それ故にその結果について嗟歎してはならない、といふことは一つの悪しき慰藉である。何故なら最後に問題となるのは罪なきかもしくは罪あるかではなく、何が福祉に、何が禍悪に役だつか、精神の實が、その管理される仕方に由つて、維持されそして増大されるか、もしくは投げ出されそして無にされるか、である。集團はしかし集團としては何らの精神をもたぬ、ことに最高精神的なものは決して集團の共同財ではなかつた、そしてないであらう。集團に於いてはつねに彼らが集團として共通にもつものが支配する、そしてそれはただ卑しきものである。非凡なものは彼らのなかではつねにもつとも難き立場をもつ。まさにそれをもつてしかしながらまた、最高の精神的なものが一つの威力を非精神的な集團のうへに行使すること、たとへばそれは彼らを己れの高さに擧げることであれ、または彼らを、まさに非精神的なものとして、彼らの限界の中に固く抑へそしてそれによつて精神のために自己開展の可能性を集團の上にあるよく劃られたる範域に於いて救ふことであれ、それはまつたく不



可能となる。前者は内面的に不可能である、第二のものは時間の限定された外延内では結局可能であるが、しかし繼續的には支持すべくもなくまた純正の精神的自由のために眞に有利でもない。精神そのものがかゝる技巧的向上と制限とに於いては萎縮しそして非自由にならずにはゐないであらう。それはあたかも一つのはじめは勝ちほこれる、つぎにしかします危ふくされる他のものに對する強制支配、ますます強制するもの自らへの強制となる強制支配に於いて生きるであらう、それはあたかもプラトーンが、強制することへと強制せられて、最後に自己の護衛兵の捕虜となる専制君主の位置を描けるそれのごときものである。

そしてそのやうにして一般に、諸民族とそしてしたがつて人類が一つのより高き段階に昇るのを見る何らの希望も残らないであらう、もしも一般に全く非精神的なる集團に對しては少數の精神的者の豫想が適切であつたならば。しかるに幸ひなことにはそれは當らない。集團は、集團として、勿論非精神的である。集團そのものの暗示、抽象的普遍性のための個性的差別の抹消、それらこそまさしく精神を殺すところのものである。しかし決してそれ故にとて個々のものたちは精神によつて見すてられなければならないのではない。精神はその欲するところに吹き、それはそれを荷ふものをまだ汚されぬ、誤つて形成されざる下方の層に求めることを知つてゐる。精神の閃光は實にすべての人のなかにほのめいてゐる。それがすべての人に於いて焰にまで燃えあがらないことは、單に彼に必要な通風が外部から與へられず、したがつて人が通風を増加し、強くすることによつてひろき民衆集團の一つの特別に高められた精神性に到達する事を希望し能ふといふことではない。却つて必要なのは、各人の固有の生活が自然的になつた、それ自身固有の根據のうへに生長する、共同態に於いて自己を展開し、眠れる芽がおのづから生へとめさめ、そしてそれに適はしき生長を自由に營み能ふやうになることである。

人間の大きいなる集團に於いてあたかもたゞ集團を、すなはち物質を見、それに精神的形式がはじめて外から刻印されなければならない、といふのは根本的に一つの唯物論的見解である。精神的形式はそれをもつてそれ自身何かただ外的なもの、それ自身に生命的ならぬものにされる、何となればそれは實にここではもはやそこに於いてそれが現象に來るもの固有の萌芽から湧き出づるものとしては思惟されないからである。一つの外的に立てられた目標への多少とも暴力的な引きあげとしての教育のすべての觀念はこの根本的誤謬を病んでゐる。吾々がそのかはりに自己



の萌芽の内部よりの自己開展としての教育の意味を高調するならば、それは決して各人がその才能の特殊性に囚はれそして固定せられなければならないといふことを意味しない。却つて各人は能ふところに於いて各々の彼のうちに眠れる能力をみな開展しえねばならない。あだかも彼にとつてもつともたやすきものを、何故なら彼の卓越せる才能に對應する業績は彼を、業績のため彼の存在が不足するときことなく却つて業績は人間が彼自らに於いて在るところのものからの自明的流出、自然的言表であるのに必要なだけに、業績から解放するであらうからである。業績は共同態に屬する、しかし共同態自身は、それが、自らは全く個態たちの自由なる固有の勢力から生長しつつ、まさにこの固有の勢力を各個人のうちにもそれ自身に要求したがつて發展せしめるやうに、そのやうにつくられてゐなければならぬ。個々の人に對するその反作用はそのときただまた解放的であり、輕易にするものであるであらう、それは各人の固有力を拘束しそして抑壓しない、ただ解きそして高めるであらう。共同態は奴僕化でない、奴僕化は共同態ではない、個性は城郭のなかに自己を封鎖することではない、かゝることは外部からの奴僕化を避けるためにただ自己奴僕化となるであらう。

されば學校は必らずこのやうな自由な個態たちの自由な共同態でなければならぬ、ただそのとき學校はその概念を充足する。そのときには學校にとつてはもはや何らの「集團」はない、そして學校自身は、今やそれが集團に對して、それ故にあたかも生活の外に、然り生活に敵對して、破壊的に立つてゐるかのやうにみえるその孤立から完全に歩み出る。何よりも學校は、それが今日形成されてゐるごとくでは、家庭生活を妨害しそして破壊する、そしてしかもそれが自體に恐らくは考へえらるるごとく、一つの他の等價値なる、もしくはより價値高き、固有の學校生活をそのかほりに置くことはなく、そのやうにして自己の彼岸なる眞の、より熟實せる生活の學校となることなしに、である。その結果はつきに、學校は家が築きあげたものを覆へすがごとく、そのやうにまた學校後の生活ははなはだ速やかにそしてはなはだ根本的に、學校が辛苦して築かうと試みたところのものを掃除する。そのやうにして吾々の社會的教育の今日有力なる形態は、それに於いて全く個々の構成員が單に生命なく並立するのではなく、互ひの上に促進的そして靈活的によりはむしろ敵對的にそして破壊的に作用する一つの社會構造を、ただあまりに明らかに反映してゐる。これに反して全勞働生活の一つの組合的築成に於いては一つの、自由なる相互の補助



の同等なる原理のうへに築かれた、學校は全く同等的に自己を接合するであらうそれは、純正なる作業學校として、勞働生活の築き上げを根本から遂行し、そしてそのやうにして學校としてみづから生活であり、生活としてみづから學校であり、そしてそのすべての階層をとほしてつねにさうであるであらう。それはベスタロツチによつて本質的にはそのやうに思惟された、しかしそのやうにはそれは何處でも今まで實際に形成されなかつた。必然的となつた社會の新建設とともにそれは無條件にそのやうに要求され、そして他様にはもはや可能でない。それをもつて統一、學校として、一つのすでに存在する、單に承認され、ともかくも次にはそれ以上に補助すべき學校の意味に於いてではなく、一つのまづ創造すべき、現在はまだ遠く達成されざる國民的生活の內面的統一のそのの意味に於いて、かの平等としての社會的統一の誤れる概念によつて謂はゆる同等化（それはもつとも有利なばあひすなはち一つの原始的な、發展なき、發展能力なき共產主義のばあひに於いても、ただ集團をはじめて集團（質量）とするところの靜止的、靜體的平均である）によつてではなく、動的なる、なほ一層適切にいへば、有機的なる、すなはち無制約的に運動的な、ただに微分化されたのでなく自己を無限に遠く微分化する統一の充分なる意味に於いて

である。あだかも微分化するところの、しかし有機的に微分化するところの、すなはち發展するものとして、この學校は同時に積分的であり、そしてそれをもつとも内面的に統一を創造するものとして作用するであらう、これに反してすべての外面的に、機械的に、分化する學校は單なる外的結合によつての技巧的統一以外のものを生産しない。これをもつて今や學校のあらゆる國家化、すなはち共產主義化は排斥せられる。他方にはしかしそのやうにして學校自らが國家内の一國家となる何らの危険もはやない、却つて國家すなはち自由なる組合國家は學校の中からそしてそれに由つて組織的に生育し、そのやうにしてすべての組合は同時に學校に、すべての學校は同時に組合となるであらう。そしてもはや何らの教育する階級も單に教育の客體たる一つの他の階級に對立しないであらう。對立は救ひがたく再び支配國家てふもつとも粗野なる意味に於いての國家化に引きもどすであらう。然らずして自由なる「相互のために」に於いてすべてがすべてに於いて働くであらう。すべてががねに生涯學校に、ただ年齢の階段に對應してその教育的機能に於いて差別あり、あるものはより多く學習し、もしくはあるものはより多く教授しつつ、そして更に教へることそのことを學びもしくは教へつつ、在りそして残るであらう、これらすべ



ては才能とそして普遍的自然の程度とそしてことに方向としたがつて個々の人に於いて差別ある時限に於いてされる、多くのものは、他のものがいはば最初の課程に於いてすでに登攀する段階に達するために半生もしくは全生涯を要するであらう。しかしすべてはそのやうに一の唯一の共同の仕事として存し、そのなかにはより高く昇れるものがはじめて昇りつゝあるものにする助力としてのほかに何らの命令も妥當しない。それは権力なき権力の、ただ上位にあるもの、確信せしむる透察と意志の優越の基礎のうへに於いて、理解あるものが有意的に屈することとしての服従の、最後に、直接に彼がまた他人のなかに創造的固有力をよびさまししてはたらかしめ、他人を解きがたく自己に結びつけそしてそのやうにしてその楽しき、然り靈活されたる追隨を確實に有し能ふ眞の創造的な人の明白なる秘密である。

それはデモクラシーの理念のもつとも純粹なる充足であらう、すなはち民衆は、それが自己の主たることを學んだ故に、何ら他の主を要しない。民衆がそこに達すべきであるならば、それはそのためにまさに學校を要する。この學校は、自己統治の學校であるためには、全く自ら自己統治の原理の上に築かれなければならない。そのやうにしてはじめてそれは全く民衆自身の

學校であるであらう、そしてそれはそれをとほして民衆が自己を民衆として經濟的、法的統一として、最も高くしかしながら精神的統一として、まつたく「一」の精神がすべてに共同であれ」の  
高き要求の意味に於いて、はじめて築成するところのものとなる。學校が、民衆の學校として、  
必らず統一的學校である、といふことはそのやうに理解されるべきである。

古代から主張された學校の法的秩序への、すなはち國家への、すなはち民衆への内的關係はこれをもつて基礎づけられる。あたかも家が經濟的勞働の直接的生活に對するやうに、そのやうに學校は法的國家的秩序の間接性に關係しなければならぬといふ事は自ら示された。この間接性は人間のうちに横へられてある諸勢力のより豊富なる展開のために、決して現在に停立せずしてやまず前方へと迫進する、畢竟は超限的な人類の課題にと向上する意欲をすること社会意欲の奇蹟的な力の充分なる展開のために、必要である。またこの意欲も畢竟はただ力、すなはち手段である(力は一般はたゞ手段である)、それはそれ自身からは究竟のことについての問ひへの何らの答へを與へない、何のためにすべての勞働とすべての勞働意志の力が仕掛けられねばならないか?、それは經濟や法や國家や學校を超えて一つのより高きものを指示する問ひである、そ



れについて吾々はなほのちに語ることがあらう。けれど國家に於ける人間から人間への經濟的法的關係に於ける意欲力の充實せる、自由な發展なしには、人間の超時間的、超感覺的、超悟性的そして超意志的、したがつて超經濟的、超國家的なる生の充分なる意義は明晰になり能はず、そして生活眞理の全き充實に達することはできない。それは、すべていまままで曰つたこととしてなほ曰ふべきことを缺いては、たとへそれがいかに説得的に正當であらうとも、單なる約束であり、そしていかにそれが内容に満ちて思惟せられたりとも、しかし吾々にとつては、現實的生活にとつては、効果なく残るであらう。

<sup>170</sup> そのやうに高くしかしながら目標が遠ざけられやうとも、それは目標として意志を、社會的目標として社會的意志を豫想する。實際たとへそれが共同的なものであつても、單なる意欲によつては目標は達せられない、この一つの絶對的實際的合理主義の古き誤謬は克服せられねばならぬ。けれどその克服は決して、意欲したがつて法と國家とが、人が人道のより高き目標に直接に達するためには、飛び越され能ひもしくは飛びこされなければならぬといふことを、意味することはできない。道が國家に於いて、究竟は個々の國家にあらず、國家の理念が自己からすでに

要求することく、國家聯合の國家(Biaturen-Staat)に於いて、肉とならぬかぎり、そのあひだは人類てふことばは生きた内容なき一つの聲ある言葉たるにすぎない。

さて學校が社會的教育の、すなはちそれがまさに社會的すなはち法と國家とへの教育でなければならぬといふ方面への、特有の形式であるならば、學校の問題が政治的問題であることそしていかほどまで政治的問題であるかは明らかになる。そのことはまへからその問題を全く政治的事項とすべく誤り導いた。それは危殆なるものとなつた、そして吾々は今なほはなほだしくこの危険のうちに在る。精神が國家に指令すべくそして何ものに於いても國家の指令の下に自己を置くべきでないといふことは今日まだあまりに僅かしか一般の意識に迫つてゐないが、そこから國家に對する學校(最も廣い意味で)の單に嚴正に獨立なるのみならず、それ以上に支配的なる位置が歸結される。少くも國家に面して司法とそして宗教とに歸せられるとき一つの獨立性が學校にも歸せられねばならぬといふことはたゞもつとも手近かの、もつとも切迫せる要求である。これら二つは實にそれ自身廣義の學校、社會性への社會的教育の特殊の形式にすぎぬ、法はむしろ回顧的にすべて一つの存立能力ある社會的生活の制約に於いていままですでに獲得されたるも



の、保存と促進とに向ひ、宗教は前方へと、かの一つのより高き、單に經濟的そして國家的ならぬ生活の永遠の目標、兩者を單に保全するのではなく却つて覆へし、根本から更新しそして聖化すべきかの永遠の目標へと向ふ。けれど兩者のそれ自身社會的に規制された仕事は結局社會性への教育の全體系(その核心は傳統的な意味での學校である)のなかに編入される。學校はしかしまさしくそのときはつねになほ廣義に解せられなければならない、ただに兒童學校としてのみでなく、充分に大<sup>ホツホシユール</sup>學をとにも包含し、そしてこれは單に一定の「高等」の職業のための準備學校としてでなく普遍的なものとして、すべての人のための大學として、すでに職業のなかに立つてゐる成年者の全社會的生活にも隨伴する民衆大學として、解せられねばならない。吾々はそのやうにして教訓、傳達とそしてそれに附隨し、それを補助しそして試験する練習の形式に於ける陶冶のあらゆる共同的に組織された仕事をそれに數へる、しかしまた訓練でもなくまた一般に個々の特殊な設備の仕事でもなく、實際に個々の者を包容しそして行<sup>イット</sup>の學校へと取り入れるだけの内的威力を證示する何らかの共同態に於ける生活の直接の作用たる眞の教育をもそれに數へる。

(3) そのやうにして、そしてたゞそのやうにしてのみ學校は、完全なる自律に於いて、生活の側らに

ではなく、その眞中に立つであらう。組<sup>グロウペンシヤット</sup>合は一般にその根據を提供する、それは單にそれがこの根據の上に自己を築成するといふだけでなく、全くそのなかに築き入れられ、そして實にあらゆる階段をとほして、各員から組合へ、國家へ、組合の全體系、諸組合の組合としての國家へ云々、といふやうに築き入れられる。すべては同時に、身體の護養と醫術、農業、手工、製作、商事、交通、そしてこれらすべてに對する關係に於いて各段階の法律的規制、立法、管理、裁判、そしてこの堅固なる大地の地盤の上につき「精神」の光榮ある上層建築の全體、科學、藝術、宗教——すべてこれらのものは統一的な作用に於いて、人間を、そして實に各人を、その人間性の段階に、彼の能性の程度と特性とにしたがつて彼に達せられるべき段階に、もたらすべく協力して努力しなければならぬ。人間的教養のこの統一化をしかしながら正しき意味での大<sup>ウニウエルシテイト</sup>學が代表しなければならぬ。それが本來大<sup>ウニウエルシテイト</sup>學の概念である、それを大學は——それについては不幸にも何らの疑ひがありえない——現在充足してゐないが、しかしそれはまた決して忘却されてはゐない。大學がこの高き要求にいかにかして隨ふべきであるならば、それは決して、今のやうに、あたかも一つの島の上にあるやうに世間を離れて、または一の修道院のやうに寂しい山の頂



きに、その處を求むべきではない、却つてそれは豊富なる民衆フオルクスホフシューレ大學の組織に自己を分枝しなければならぬ、そしてこれは全國に擴布されて、それ故に何人にも到達されるやうにし、しかもそれを養ひそして指導する中央的器官としての狹義の大學によつて統合されそして養はれる。

このやうに廣く解すればまづ學校こそ何人をも除外せざる、全民衆の與かる事である、そしてこれをもつて統一的學校の概念は充實される。それはあらゆる階級的、教育學の純粹なる克服であるであらう。もはや一つの部分が他の部分に精神的營養を計り與へるのではなく、すべてが共同的な仕事に於いて同時に能動的そして受働的に、主體としてそして客體として、參加しそして實に原理的に同等に、勿論比例的同等の意味に於いて、すなはち、各人がその能力の量と類とにしたがつて、參加する。

<sup>132</sup>これは勿論永遠にただ課題である。何故ならそのやうに解せられた、ただそのやうに解すべき純正なる精神のデモクラシーは決して實現されない、それは全く實現されたとして思惟されてはならない。却つてそれはつねに總體アルトの位置に自己を置くべく努力し、したがつて他のものに對して強制的になるあらゆる特性ごとに、これに對しての戦ひに、それが一つの多數であれまたは他

のもの以上に位する少數であれ、あらゆる暴力に對しての、よりよき未來を斷絶する一つの刹那的意志のあらゆる偏せる支配に對しての、戦ひに踏み留まる。このデモクラシーの止揚すべからざる理念性に於いてこそその打ち勝ちがたき内的強力は存する、それは勿論外に對してはたやすく弱さとなる。しかし總體の理念(Idee der Allheit)に於ける堅固なる支持はつひにはそれを征服しがたきものにする、何故ならすべての特殊的威力はただ刹那の優越であり、日はこれを生み日がこれを呑む。

このデモクラシーの意味に於いての學校が、全體の、一の民衆の學校として、したがつて統一的學校として、實現されて在ることなく、しかしただつねに進行的に自己を實現することに對しての決定的制約は、すなはち各人が彼の人間たることへの彼の途を彼が民衆たることに由つて見出すといふことである。何故なら統一は、總體の統一として、あたかもこの總體に對して個々のものが單に數として數へられるかのやうに、そのやうに解せられることを欲しない。ただにすべてが包容されてゐなければならぬのみでなく、各人が自己から總體へと己のものを寄與しなければならぬ、あたかも海に於いて一つの波、然り一つの滴、一つの滴の一つの原子も失はる



ることなく、その各々がその分に於いてともに全體をつくるがごとくに。もしくは統一は差別の統一として、協和音の統一として解されねばならぬ、協和音には個々の音の明瞭なる分離が一言への交流とひとしく本質的に必要であり、それは決して無差別なる一様を意味せず、そこに加はりまたはそこから去る個々の音ごとに一つの他のものとなり、それにとつてはその獨特の性格のために何らの個々の音も缺けまたは選擇なしに添加されてはならないものである。まさしくこの要求が純正なるデモクラシーの根本原理にひきもどす。もし後見人的な、たとへ何ほどか高く精神的に意味されてゐるとしても、アリストクラシーの方式が「すべて民衆のために、しかし何もかも民衆に由つてではなく、」といふのであるならば、デモクラシーは謂ふ「すべて民衆のために、それ故にすべて民衆に由つて、」何故ならもし民衆自身に由つてでなければ、それはまた眞にそれのためのものとはならないからである。

<sup>131</sup> すべて民衆のために、それをまた貴族主義的な國家憲法さへ欲する。そのやうにしてすでにプラトーンは一つの非常に大規模なる國家的教育を全體の自由なる市民團のために要求した、それはある意味に於いてまた統一的教育であり、一つのはなはだ根本的な身體的そして藝術的教育か

ら始めて、絶頂に於いて治者の最高の、學問的、最後に哲學的教育に達するものであり、全くその唯一的理想的統治者たる正義の要求にしたがつてそして正義を護るためのものであつた。しかしそれに於いては社會を一つの下層の、ただ經濟的に勞働する階級と、一つの中間の、獨占的に行政的な階級と、そして一つの上層の、統治する階級とに劃然と區分する事が前提であつた。各人が「彼の事」を、すなはち彼がもつとも善く爲し能ひそして國家によつて備装され練磨されたものを國家に於いてそして國家のために爲すべし、これをもつておのづから各人は同時に彼の最高の満足を得そしてそのやうにして各人の福利は全體のそれと一致する、といふことは指導的な思想であつた。それはそこまでは全く眞實な原理であつたらう、ただ傳承される素質の意義の誇大にされたる觀念の結果として社會的生活の三つの本質的機能、經濟的、政治的行政的、そして統治的機能が、その數だけの劃然と分離された階級むしろ族に配分されて考へられたといふ一つのみしかに重大なる誤謬を除いては。もつとも適能なる者の選出によつての上昇は第二階級から第一階級へは可能である、しかしはるかにもつとも數多き第三の、手で勞働しそして營業に従事する階級から二つの上の階級へは可能でない。(そのやうにプラトーンは「國家」に於いて説く、の



ちに「法律」に於いては全市民團は直接的經濟的作業から解放されてゐる、それは全つたく外國人と奴隸とに委ねられる。中世は一つのそれに似た社會構造を示してゐる。またそこでも下層と上層の精神的道徳的教養のあひだには一つの深き間隙がある、中間の、獨占的に行政的なる階級、騎士團と君主もその乏しく計り與へられた精神的教養の分けまへについてはまつたくその無制約的に特權ある負擔者、僧侶の指令を受ける、そこから教會の老大なる勢力そしてそれに對する國家の永き、徒勞なる抗爭は理解される、しかし民衆の老大なる集團は低く下方に、二つの上層の階級の後見のもとに残り留つてゐる。それはやがて徐々に、君主と諸都市とが經濟的そして政治的に強大になつたこととともに、全産業の漸次的改造とともに變化した、そしてそれに由つてただに今まで政治的に指導的であつた上層のみならず、次第にまた産業的階級も、ことに都市に於いて、また精神的に上昇した。けれどそれでも今日までまさしく教化の事柄に於ける後見の一般的精神の少からぬものが残存してゐる。たとへばはなはだ動きやすい限界に於いてであるが、一つの下層の階級はつねにまだ残つてゐる、それに對して上層の、今はしかしもはや僧侶と騎士團ではないが、所有と教養とによつて成りあがつたものが後見の權利と、政治的そして經濟的指導

と同様に精神的指導の權利を、實際法的に要求することはできなくても、けれど事實的に行使してゐる。しかしながら下から上へと迫り昇ることは、一度始められては、抑へがたく持續する。すべては、もつとも微小なるものまでも、人類の精神的財産について彼らの分を、しかも原理的に同等なる分を欲求する、もはやこれ以上一つの高く偏重された狭小なる階級が人類の高處に歩んではならない、過大なる多數が暗き低處に引き留められてゐるあひだは。この欲求は、一たびめさめたならば、もはや再び壓抑することはできぬ、またそれに對して一つの覆しがたき柵を置くこともできない。それ故にその原理的な正當さを認めそしてそれを、能ふかぎり、勝利へと助力することのほか何ものも残つてゐない。しかし平等はここではただ自己に固有なる内面的生活形成の同等なる自由を意味するのみである。受容性や創造的自己力の、種類と程度としたがつての、それ自身はなはだ大いなる差別は、永遠なる、無限なる目標のまへには消滅する、その目標は畢竟すべての人にとつて同一であり、同時にすべての人にとつてひとしく理想的であり、そしてまさしくそれ故に質的そして量的業績としたがつて教養の各々の現實的非平等に對してよく順應し、それをもつてすべての人にとつてただその目標へと仰ぎ見そして自己をその方へと向



ける同等の権利とそして同等の責務とを意味し能ふ。

歴史的にみれば、ル、テ、ル、の改革はその方向への決定的な轉向を意味する。それ自身には純粹に宗教的に意味されたのであるがそれはしかし内面的に個態の獨立化てふ一つの全く普遍的な運動と合一した。そのころはじめて、そしてそのときから次第に多く、ベスタロツチ自身は宗教改革の一般影響に主として歸するところの、自己配慮ゼルプストゲルツのペスタロツチ的精神がめざめた。宗教改革の時代以來、社會的教育の思想が、社會的國家と社會的經濟のそれと緊密なる結合に於いて、ますます明晰に自己を語つてゐることは、何らの偶然ではない。そのやうにすでにモーアの「ユトピア」(一五一六年、さればルーテルの決定的な事業のすぐまへ)に於いて。それはプラトーンの國家理想のデモクラシー化への最初の、非常に斷然たる蹶起であり、それに於いては直ちに社會的教育が一つの全く決定的な意味を得てゐる、全體の立案は本來教育學的に思惟されそして意圖されたものである。それからちますます聲たかくそして明瞭に全民衆の例外なく普遍なる精神的そして道徳的上昇への呼び聲はひびく、それは一つの普遍化された、すべての民衆階級、また男子と婦人をもともに包括して、事實的に深刻に把握する學校教養に由つての上昇である。追放さ

れたボヘミア・モラキア兄弟會の敬虔なる司教、アモス・コメンスキーははじめて(十七世紀に於いて)充分なる明晰をもつて四つの段階に於ける公共的教育の築成の基礎的計畫を構想した、四つの段階とは、母の學校(すなはち純粹に家庭的な教育)、六歳から十二歳までのすべての兒童に共通なる母國語學校、つぎにはじめて、すべての人のためではなく、特に著しく能力あるもののために更に六年のラテン學校、最後に民衆の未來の教師として導師(Dructores at ductores)たちの教養の完結のための大學。これは殆んど精確に今日の「統一的學校」の要求が意味しそして意志するところのものである。その基礎づけはしかし斷言的につぎのことである、すなはち各々の健全なる能力は發展に來させられ、何もかも訓練されずに残つてはならない、あたかも優しき太陽があらゆる生長を同じく促進し、何もかも亡びさせないやうに。それは意識的に、基督教的に考へられたことである、神はその太陽を善きものと悪しきものうへに照し、義しきものと不義なるものにひとしく雨をふらす、神の眼には何人も他にすぐれて、よくそして義しくはない、すべてはひとしい。しかしこの平等は決して機械的に考へられたのではない。まさしく才賦の差別こそその正當な權利を得なければならぬ、あたかも植物の生長のあらゆる差別が太陽と實ら



する雨の同一の愛護のもとに自由に開展し能ふごとくに。ただそのやうにまた平等の要求も理性的に理解されることができ、そしてそれは今日まで眞摯にしか理解されてゐる。もしそのかはりにすべてのもののための、家庭的そして學校的教化の、分量と内容上の、固定せる一様さの愚劣なる觀念が置き換へられ、そしてこの意味に於いて「統一的學校」が「平等的學校」として、賞讃されるにせよ、また嘲笑されるにせよ、または巧みにもしくは拙劣に演ぜられた哲學的眞劍さをもつてか、論難せられるならば、それは、もし意識的そして有意的な偽はりでないとするれば、粗野な誤解にほかならぬ。

136 一七八九年の革命はそれのもつともすぐれたるものに於いてはかの「比例的平等」以外のものを意志しなかつた、事實にはしかしながらそこから全く他のもの、殆んど全く反對なものが成つた。單に、あたかも社會の根本的な變革が普遍的人間理性と議會の議決とによつてけふから明日へ遂行されるかのやうに考へた一つの誤解されたる理性主義の誤りからでなく、却つて主として、革命の指導が、はじめのあたかも酔へるがごとく、まもなく蹉跎せる突進ののち、一つの階級の手のなかに、貴族と僧侶との後見からはすでに疾うに内面的に自由になり、そして自ら彼らの地位

に自己を置くためにはただ疾うに弛んだ鎖を全く振り落すのみで足りた一つの階級の手のなかに残つたことに由つてである。その結果は、一言でいへば、資本主義でふ新しい世界勢力の解放であつた、この勢力はそれからのち輝きある勝利の行進をもつて全地表を征服した。

137 ドイツはそれまではまだ全くはその渦まきのなかにともに巻きこまれなかつた。それ故にドイツは「國民教育」(そのころの合詞であつた)の偉大なるそして純粹なる理念を、そして實に全く個性主義的方向に於いて、それがフランスに於いて悲惨にも蹉跎した瞬間に於いて採用することができたペスタロツチ、フイヒテ、言明せる個人主義者たるキルヘルム・フォン・フムボルトさへ、みなこの精神によつてそのころ満されてゐた。男爵フライヘルフオム・シュタインは、民衆に於けるあらゆる力はそれぞれ固有の、自由なるはたらきへと、一つの嚴密にそれを目がけた「國民的」すなはち全國民を包容しそして一にする教育によつて、展開せられねばならない、といふ決乎たる要求を樹てた。最初の、唯一有意義なプロイセンの學校法案(一八一九年)はそれを一つのおよく熟考された、下からの國民的教育の「有機的」築成に於いて、統一的基礎學校の土臺の上に、しかし上方へのもつとも多様な分化に於いて實行しやうと企てた。それはすでにそのときも、のちに



は全く、貫徹しなかつた、何故ならそのあひだに資本主義の洪水はまたドイツにも注ぎ、そして今やここで、永いあひだ等閑にされたものがもつとも短かい期限に爲し盡されねばならなかつたところに於いて、一つの不健全なる、類例なく速かなる發展に於いてそのもつとも害悪多き結果を曝露することができたからであつた。その扨従としてはじめて、わが邦には以前存在しなかつたもの、一つの無産階級が成立した。「民衆學校」はまつたくその意圖に反して、さまざまにしてまさに無産者學校となり、その氣味わるき集團的仕事に對して上層の階級はますます隔絶した。國民の統一を表はすべきであつた學校はただますます明らかに、そのなかに開いた深い裂罅を暴露した、そして自らそれをますますはだしく深めることを助けた。

何處から裂罅は來たか？ それではヨーロッパの人類はすでに「啓蒙」の時代から、一つの漸次に全民衆に徹入する、その基礎に於いて普遍的そして社會的な教育によつての內的解放の途の上にあつたのではないか？ 確かに、それはさまざまの外的そして內的の壓迫からの解放であつた。けれど解放は脱出ロイヤルとなつた、そして裂かれたる各員は互ひに立ち向つた。他大陸の盜掠をもつてそれははじまつた。それは成功多き掠奪者らに恐るべき勢威を加へた、統治者は民族に對し、

征服者民族は無害なるそして無防禦なる民族に對し、各民族内に於いて階級は階級に對し、そしてまた各階級に於けるもつとも有力なる征服者は勢力の劣れるものに對して。しばらくはあだかも今まで悦んで荷はれたる一つの疑ひなく善意ある官僚國家の後見は崩壊を防ぐかのやうに見えるたのであらう。靜かなる漸次的發展に於いてはそれは恐らくはなほ永いあひだ可能であつたであらう。しかしながら發展は漲るやうに前進しそして間隙を深め、それ故にもはやまもなく何らの官僚的才智もそれを再び閉合することの課題に適しなくなつた。

<sup>134</sup> 吾々はドイツに於いて比較的よく、ヨーロッパ的文化の何處か他の邦土に比べてよりよく、統治されてゐた。それは吾々の父祖からの遺嗣であり、秩序の遺産であつた、それが、さきに云つたやうに、吾々のところには他の世界諸民族に於けるより遅れて侵入した資本主義の高潮を防いだ。けれど——それはもはや殆んど再び曰ふを要しない——吾々はあまりによく統治されてゐた、それに於いて吾々は吾々みづからを統治することを學ばなかつた。今や上からの統治が老大にまで増加した困難のうちに破綻してゐるとき、吾々は吾々自身を統治することができなければならなかつたのに！ しかしあたかもそれを吾々は教へられなかつた、吾々みづからはそれが一度は



そしてすでにそのやうに早く、吾々から要求されるであらうとは全く豫感しなかつた、そしてそのやうにしていま吾々の水の漏る船は舵なしにもつとも荒々しいあらしのなかに進む。——それは戦争のために來た。けれどもどこから戦争が來たか？　ここから、すなはち普遍的な劫掠や盜奪が抑へがたき暴漲に於いて地上のすべての民族を捉へ、そして全地表上の財と勞働力の獲得のため一つの熱病的な競走に驅り立てたからである、そしてこの競走はすべてがすべてを敵とする戦争に終るよりほかはできなかつた。そしてただにすべてがすべてとのみならず、殆んど各個人が自己と戦争状態に在る。裂罅はもはや單に支配者と被支配者とを、掠奪者と被掠奪者とを、教育あるものと無教育なものとを別つのみでない、各人が己の胸のうちに兩者を、掠奪者と掠奪されたものとを、奴隷にするものと奴隷にされたものとを、精神と非精神、そして反精神とをもつてゐる。それが自由か？　それはむしろますます増大する暴力性、強制である。何人もそれを欲しなかつた、しかしそれは在りそして各人がそれについて自己の責任の分をとともに負つてゐる。すべての人は、彼らが征服しやうと、暴力を用ひやうと欲しなかつたと、神聖にそして嚴そかに誓ふ、彼らはさうするほかできなかつたのである。すべての人は、強制しそして自己を強制せ

しめる、といふ一つの強制のもとに立つてゐる。けれど、わが欲することを能はずして、ただわが欲せざることを能はざること、それが自由といふものか？　吾々の解放はそれでは見かけであつた。それは疾うに曰はれた、吾々は離れた、すべてから離れた、しかし自由ではないと。自由であるとは意欲し能ふことである、しかし意欲は堅持である。しかしまさにこの堅持こそ、内面からの支持こそ、吾々には失はれた。吾々の誤想せる解放はただに共同態の統一、根據からのでなく、またそれに於いてのみすべての純正なる共同態が根ざす吾々の固有の本質の統一根據からの、離出であつた。この統一根據を再び獲得すること、むしろそれを初めて贏ち得ること、それが、共同態に由つて共同態への教育としての、社會的教育の課題である、それに於いてのみ純正の自由はその處を見出す、それは自由者の共同態であり、そしてそれをもつて自ら自由なる共同態である、それは差別あるものの統一、それに各々の音が自己のものを寄與する諸音の統一である。

それがあり能ふか？——それはあらざるを得ない、そしてあらざるを得ぬものは、またあり能ふであらう。——けれど孤立してはそれはあり得ない。社會的教育は天から來ず、天から落ちて



來ない。そしてもしそれから天が降つてきたならば、それは留らないであらう、それは教育せられざる經濟と政治に對しては生長しないであらう。ただ吾々自身、吾々自身のうちに、共同生活の經濟的そして政治的築成から離れてではなしに、これのなかでそしてこれとともに、これとの精密なる相互的交渉に於いて、築成することができる。社會的教育へのいかに僅かな一歩とても、社會的經濟の、社會的法律への、社會的國家への進歩に結合されざるものはない、しかしまた社會的經濟、社會的法律、國家へのいかなる歩みも、兩者に對應する社會的教育の一の形成なしには存在しない。そして教育は究極するところ指導的であり、國家と經濟は追隨的でなければならぬ。ペスタロツチはナポレオンについて曰つてゐる、ナポレオンは一人の偉大なる、一人の驚異的なる「役人」(すなはち社會的權力行使のすべての手段の練達者)であつた、しかし彼が彼の主人を見いださなかつたので、彼は自ら主人を演ずべく餘儀なくなつた、そこに彼とすべては蹉跌しなければならなかつた、と。しかし彼はそれをもつて世界に一つの大きい教訓を遺した。その教訓は、吾々にとつて吾々の今日の切實なる經驗が意味しなければならぬところのものと、根柢に於いて同一である。經濟と國家とはその性質上ただ役はるるものである。すで

に疾うにかう謂はれてゐる、人は經濟のため、統治のためには經濟せず統治せず、自己を統治させない、ただ人間のため、人間の生活のためにするのである、と。これに對してこの人間の生活教育が自己の課題として立てる、生活の內的自己築成は、それはそれ自身のために在り、それは彼自身、人間であり、たゞに何ものかそれに役だつものではない。それはその養護と保全のために經濟の勞働と、守護の體、形式と支持とを與ふる國家でふ粹縁を要求する。しかしながらもし役僕が主人を演じやうと欲するならば、そのとき彼は必らず蹉跌し、そして彼がそれに對してただ仕ふべきであつたもの、人間、人間の生活が全く蹂躪せられる。もしはじめに人間が健全であつたならば、そのときは經濟と國家の健全化は直ちに進んだであらう。築くに馴れて、健全にされた精神はまた己のが畑と己のが家を築くことを知つてゐるであらう。もし彼が自己に崩潰したならば、そのときはすべてはまた崩潰する。彼が自ら根柢から離れてゐるならば、何處から種子は新鮮なる成長に進むことができやうぞ？ しかし內的生活築成は、自ら安固なる地盤のうへに更に生長しそしてその生長に於いてあらゆる外的障害に對して保障せられてあるためには、地盤にまでそして深く地盤の底に根ざさなければならぬ、すなはちそれは經濟的そして國家的諸



秩序を自己の需要にしたがつて形成しなければならぬ。人間への教育はそのやうにして勿論同時に經濟と國家への教育でなければならぬ。それは吾々の教育全體に、ことに高等教育に今まで缺けてゐた。それ故にそれは今や虚空に浮動して、經濟と國家への途を見いださない、そして兩者は教育への途を見いださない。かゝる状態を社會的教育は救ふはづである、そして統一的經濟と統一的國家とに對する必然的對照たる統一的學校はこれを爲さうと欲する。

社會的教育の問題はこれをもつて政治的である、それはただに國家もしくは他の公共的權力もしくは公共的保護のもとに立つ（たとへそれ自身國家外的であつても）裁決權がそれを指令しそして遂行しなければならぬかぎりには於いてでなく、また國家市民を教育し、國家そのものをまづ内部から築くことがその本質的任務に屬するかぎりには於いてである。また問題は經濟的である、それは單に社會的教育のすべての勞働が經濟の收益によつて養はるるかぎりに於いてでなく、また經濟的勞働へと教育することがその任務に屬するかぎりに於いてである。そして吾々の目のまへに見るとき國家的そして經濟的生活全體の崩壞に面しては、眞にこの兩方面への任務は一つの全く巨大なるものである。きはめてわづかの省察でも各人につきのことを明らかにするであら

う、今までこれらの方面に向つて教育によつて爲されたことは、吾々が今日そのまへに立つてゐるのであるが、任務の重大さに對揚するにははるかに足りなかつた。それを看取せぬ人は、その人はまだその問題の切實さをまつたく理解せざる人である。ただ今日あるところのものをもつてのみ計策するのみで、そしてまた遠く今日を超えて先方を考へる勇氣を見出さない實際政治、實際經濟そして實際教育は在り能ふもつとも非實在的カウニユムガクのものである。そしてあだかも偏狹なる實際政治と實際經濟とがこの戦役に於いて屈辱的な破船を経験したごとく、そのやうにまた偏狹なる實際教育も蹉跌しなければならぬ。今日なほ古くから試みつくされた教育的勢力と方法の上のみ築かうとするのは、屋根全體がひび割れそして破片が烈しい流れで落ち來る瞬間に流氷片のうへに築かうとすることである。しかし決してこのことは、社會的教育がただ經濟と國家との奴僕であらねばならぬといふことを意味してはならない。全くその反對に！實にすべてのものの同等の業績義務の條件として保障的根據としての、すべてのものの同等の生活權、それが社會的教育の目標でなければならぬ。社會的教育とそしてその核心體としての社會的統一的學校はまさしくそれに向つて直接にそして、何となればそれは深奥の點から、すなはち各個人の固有



の心術とそしてそれに由つてめざまされたそして方向づけられた透察と意志行爲からする故に、中心的に労働する。それにしたがつてその根本原理はこれであらなければならない、各々の促進すべき勢力を、それがその最良を、個人自身とそしてそれに由つて共同態のために、作業するやうに、その特有の方向と程度に於いて展開すること。つぎに社會的經濟と社會的國家の任務は、また各々の勢力が、そこに於いてそれが全體のためそしてしたがつて個人自身のために、最良を作業するやうな場所を見出しそこに仕懸けられるやうに配慮することであるであらう。

それにはしかしながら三年もしくはより多く（今までのもつとも進歩的な提案によれば六年）の學校年限だけの基本學校の單なる共通は充分ではない、基本學校は全體の社會的教育の、搖籃から極までの、あらゆる段階をとほしての一つの統一的築成のなかに有機的に自己を組み入れなければならない。けれど基本學校の統一はたしかに全統一築成の核點でありそしてそれ故に問題全體の中心點に立つ。

吾々はしかしながら、いかに學校訓育のこの第一段が、そしていかにそれにしたがつて一般に學校が、社會的教育のただに最初の始めにとつてのみならずその築成の全體にとつて絶對的に缺

くべからざる基礎として吾々のまへに置かれたるものに、すなはち家庭の直接的教育に對して、位置を取るべきかの問題の重量をことに重く感ずるであらう。家庭の直接的教育は今日ひろき範圍に於いて掘り崩され、然りまつたく荒廢されてゐる、ただに下層の階級のみならず、すべてに於いて。それはまだしも一つの僅少なる中層に於いて生きてゐる、しかしそれはどこでも名狀しがたき、つねに増加する困難と戦はなければならぬ、そしてその困難のために今日多くのものはすでに全く絶望してゐる。そこから根本的改革的教育學のサークルに於ける家庭教育反對の明白なる謀反はおのづから理解される。それは兒童の權利か、または少くも生長しつつあるものの權利を楯に取る。これに反對するために簡單に未だ成年ならざるものについての指令の親權に頼るのは、問題の切實さを根本的に誤認するものである。それはよりよき位置にある階級にとつてはとにかくも意味があるであらう——しかしその階級はすでに殆んど存在しない。ことに大都市の、工業都市の住民の廣汎なる多數にとつては、しかし事柄はまつたく別である、今日事物がしかあるごとくには、そこでは家庭が最初の幼年期の向ふまで（この幼年期にさへも）教育について無制限に指令するといふことは、たとへそれが全く願はしきことでなかつたとしても



全く不可能である。社會的教育のためにせらるる家庭權への鋭利なる諸種の干渉がそこでは必要になつた、しかしそれらはますます増加する弊害に對して支配者となるには遠かつた、それらは群集の、また他のしかたに於いて上層階級の、全生活の崩潰的經過に對して殆んど効果がなかつた。それ故にもしもすでに疾うにプラトーンやそしてまたフィヒテやそしてフランス革命時代以來の數多の理論家のごとく、根本的に考へる人々が、兒童を早くから、恐らくは出生から、家庭から分離して一つの公共の養育のなかに收容したいと考へたのははなはだ解しやすきことである。そのやうに、もしただこの一人を名で擧げるなら、グスタフ・ブーネケンが家庭教育をまつたく後退的なものとして説いてゐる。家庭は、新しき代に對して、沈降しゆく舊代の情性力を代表する。それ故に兒童を家庭から分離するほかに何らの福ひはない。家庭は、もしそれがその教育權の要求をできるだけはやく斷念し、そして兒童を——ブーネケンが好んで普遍的國家的設備として思惟する教育所（ミルナー・ウシグス・ハイム）に引き渡すならば、その爲し能ふ最善のことを爲すのであると。

142  
今やそれは完全に眞實である、今の形態に於ける家庭は教育形式として退歩的である。それは永いあひだ共同態からの離脱に對する殆んど最後の避難所であつた。けれどそれが今日ありそし

てはたらくごときまゝでは、それはこの離脱に對して何らの充分な防備を提供しない、況んやそれが共同態の斷ち切れた紐を再び新たに結ぶ力をもたうはづがない。しかしただそれだけですすます切迫してあらゆる社會的教育の深き根據への、家庭的共同に於ける生活の直接性への復歸が要求せられる。ありしところのものを復興すること、もしくはそのみじめな殘物を技巧的に保存することが任務ではありえない、むしろ一つの純正なる家庭的生活を始めて正しく設立し、家庭の典型にしたがつてそしてその自然に與へられたる教育的諸勢力一般の充分なる張力のもとに於ける一つの直接的教育のためにまづ地盤を再び造ることである。何故なら家庭のなかにこそ全體の内面的そしてまた外的の生活築成の根抵力が存する、ただそれに由つて「自然」の救濟的な諸力は再び強くなり能ふ、しかも最近の數世紀の社會的發展の悲しむべき結果は實にこれらの諸勢力の全部的な破壊であつた。もし「教育所」がここに達する途を見出すならば、しからばそれは吾々にも歓迎せられるべきである。ブーネケンの見かたはしかしこの點では一つのおどろくべき精神的の貴族主義に根ざしてゐる。彼にしたがへば家庭のかはりに無制約的に優越せる精神的な人間の、ただに知的そして道德的のみならず、直接に人格的な、本質的に働く指導が、立たぬけ



ればならない。實際この貴族主義はみづから「社會主義」と名づくところのものに導かうとは欲する。然りまたきはめて高度に精神的に意味されてあり能ふ一つの社會貴族主義もある、そのやうにプラトーンに於いて、彼は徹底的に家庭をまつたく除外し、兒童を最幼年から一つの學問的、哲學的に指導された國家監視のもとに收容しやうと欲した。しかしそれは、もしも人が今日の問題の位置に移植するならば、すでにそれ自身のうちに一つの矛盾を含む自由への強制である。プラトーンの國家理論は社會主義と名づけられることはできない。それは社會主義のうちの消極的契機をたしかに含んでゐる、それは「過利」(一人の利益が過大になること、すなはち本質的に餘剩價值占有である)の、そしてそれとともに掠奪者と被掠奪者との階級の分離の、原理的な排斥である、けれどプラトーンの國家理論は正しき經濟構成の積極的問題に面してまつたく斷念する、何故ならそれは國家の經濟的基礎を簡單に無權利的無權利的小民の自由意志的勞働と奴隸の強制された勞働とに由つて與へられるものとして假定し、そしてそれ以上はただそれによつて經營生活のあらゆる勞苦と危險から擧げ救はれた市民團を問題とするからである。今日ではしかし「社會主義」の下にはただ一つのこのやうな社會建築が理解せられなければならない——それはそれ自

身のうちに共同生活の經濟的基礎の、一つの規制せられたる相互とともにそして相互のための勞働に由つての、保全を完全に包有するものである、そしてその規制されたる相互とともにそして相互のための勞働には、直接または間接に何人もみな參與するのである。一つのかゝる社會主義はしかしながらただ一種の指導と和睦する、それは高度に精神的なるものの非精神的なものに對する壓迫的な過重に依らずして、却つてまたもつとも高き精神性さへも直接的勞働の根柢地盤の上で、またこの根柢地盤にまつたく密接に立つもの——それだからとしてしかしながら非精神的なものではない——と合することを耻ぢとしないことのみ依り能ふ指導である。このやうな指導の精神はそのまゝに自由の、平等の、同胞の、精神である、それはまつたく家庭の理念に對當しそしてこれをまつたく眞實に表はす一つの理想である。ただ兄弟らのあるところのみ同胞性がある、あだかも父たちのあるところ、母たちのあるところのみ父國もしくは母國があるごとく、兒童があるところのみ兒童の國があるごとく。そのやうにもし資本主義が家庭を破壊したならば、社會主義は家庭を新たに築かなければならないであらう、さなくばそれは自己の原理を理解しないものである。いかに家庭を基礎づけるべきか、それはすべての困難な問題のなかで今日



たしかにもつとも困難なものである。吾々は答へを與へやうと試みた、すなはち大都市の收容軽減、組合の形式に於ける平地の新移住、すべての異議なしに生活促進的にあらざる工業の撤去、すべての生活必需品を地方もしくは都會の周邊に移すこと、教育的諸組織を組合的に整序される經濟經營のなかに組み入れること——それはそのなかに家庭にとつてはじめて再び地盤が開かれる一つの社會構成の方針線である、その地盤の上に家庭は、人は望み能ふ——おのづから再び生育するであらう。

それは在來の型式の特殊學校をもまた(地方のもしくは都市の)教育所をも不用にすることはできない、却つてそれはそのかはりに一時の代用に役たつことができる、しかしそれは始めから、そのときには困厄そのものとそしてそれとともに困厄の救ひを除去するであらうところの健全な状態を、恢復することに目がけてゐなければならぬ。人はまた温室に於いても植物を育てる事ができる、しかし自由な、地盤に安立した生長にはそれは畑を要する。それでは永遠に大都市として工業都市をもつとも強き民衆生活の墓となるべきであるか？ 吾々は、この石造の墓が吾々の子孫を呑みこむことに、數世紀のあひだをとほして楽しくその枝と小枝を伸ばすことのできた

あれほど多くの幹が、今やあはれに枯れはてなければならぬことに、永久に黙従しなければならぬのか？

かゝる新しき基礎なしに一つの社會的生活が再び榮えるであらうといふ希望はまつたく徒らである。また學校もただこの新しき基礎の上のみ榮えることができる、しかしそれを不必要にすることはできない。人は、學校が、ひとりそれ自身のみでは、制度として、共同態を形成するものとしてはたらくことはできない、といふことについて自己を欺いてはならない。單に同じ學校の椅子にともにすはることは人を兄弟にしない、ただ相互とともにそして相互のために勞働することの直接性が人を兄弟にする。かの深い裂罅が生活全體を貫いて走つてゐるかぎり、それはまた學校を貫いて、生徒と教師の、生徒と親と、生徒と生徒とのあひだに、走つてゐるであらう。けれど學校自身が直接的勞働的共同の性格をますます多く取るにしたがつて、すなはち、ベスタロツチの要求にしたがつて、まさしく家庭、共同態の典型に近接するだけ、それだけますます決定的に學校は、もしその他の事情がそれに對抗して優つて強く作用しなければ、内面的共同化へとはたらきかけるであらう。



労働共同態<sup>アルバイクメイシヤフト</sup>へはしかし學校はそれが直接的労働を、手の労働を、經濟の典型に従つて、中心に置くこと以上に何らより確實なる途を見いだすことができないであらう。それはしかしながら何故に手工労働がつひに充分なる外延に於いて共通的基本學校に導き入れられなければならないかの唯一の理由ではない。數世紀以來すでに指導的な教育理論家は手工學校<sup>エルクレユール</sup>を要求した。はじめて吾々の時代にケルシエンタイナーがミュンヘンでそれを、その頃<sup>その頃</sup>に於いて可能であつたかぎり、現實に導き入れた。今やこの要求をつひに充分なる汎さに於いて普遍的に眞理にならせる時である。吾々の學校はつひに、それが同じく永いあひだすでのぞまれてゐたごとく、口授學校であることをやめなければならない、それはつひに純正の實科學校に、すなはち労働學校にならなければならない。吾々が今それに進みつつある恐るべき經濟的困厄は、望むらくは少くもこの透察の果實をつひに成熟にもたらすであらう。

勿論まだこのやうな透察の多くが現れてはゐない。今日あのやうに聲たかくなつた「有能者<sup>フウラレユナイター</sup>の上昇<sup>アウフクマール</sup>」の聲はそれを殆んどまつたく見失はしめる。これが通例理解されてゐることくには、これはしかしただ社會的、建築的、より、高き階層への上昇を、すなはち支配權の、社會的紳士地位の、

分けまへを安定にする諸種の技能の習得に由つて手工労働の苦しき責務を脱却することを意味する。これらの技能を人はいはゆる「高等」の學校に於いて學ぶ、それ故に人は何よりもこれへ登ることを努める。これに對してそのとき理由なしにでなく、嘲笑的にもしくは眞剣に、問はれる、それでは民衆學校に、共通の基本學校の四年または六年のうちに、才能なきものは残らなければならぬか？ 労働的職業から智力は引き離されなければならないか？ それは階級的教育の古い立場に外ならぬ。實は何らのただ手で労働してゐる階級があつてはならない、あだかも他方に何らの、手の労働からまつたく解放されたる階級があつてはならないやうに。問題は一般に次のやうに設けられてはならない、すなはち、何人が才能があるか、何人が才能がないか、だれが高く、だれが中庸に、だれが僅少に才能を與へられてゐるか？ さうではなくて、問題はむしろ、何に對して才能があり、何に對して才能がないか？ といふのでなければならぬ。各人はそれのためにまさしく神と自然とが彼に才能を與へたところのものに對してみな才能をもつ、神と自然はその賜物を豊かにそして正しくすべてのものに頒つのである。各人はみな神と自然とがあたかも彼に拒んだところのものに於いて才能がない。各人は何處かの地點に適當しそしてそこにい



かなる他人よりも優つて彼の事を爲す。この地點を見出しそして彼をまさにそこに置くこと、それが課題である。またたしかに各人はみないかやうにかして手工労働に適應する、しかしまた各人はみな何らかの精神的な仕事に適應するただ何處に中心が各人にとつて存するか、が差別をつくる、この點についてはもつともひろき差別化がそれ自身に可能でありそして要求せらるべきである。この差別化についてはしかしいままでの學校は殆んどまつたく顧慮しなかつた、理論的にも、そして實に實踐的にも。統一的學校はこれに對して可能性を提供する、しかしただ、それがすべての才能の種類のために、全くことにしかながら手の労働と工藝への才能のために、はじめから充分な發展可能性と生き生きした刺戟を提供するやうに、そしてただにすべての純粹精神的なもののために同様の可能性をのみならず、第一のそしてもつとも包括的な、堅固なる共通の基礎、ペスタロツチのいはゆる直觀の根據を、またすべての精神的なものにとつて意味するやうに、そのやうに設備されてゐるならば、である。

この偉大なる教育家の明晰なる透察と生き生きした社會的意志の、その純眞なる豫言者の天才性のわづかしさ、人が彼の謙遜なる頭の上に重ねたあらゆる名譽にかゝはらず、事實的に、その

後教育上の事物を取り扱つたそして今日まで取り扱つてゐる人々に、移し傳はらなかつたことは實に悲しむべき事である。しかし「頭」と「心胸」として兩者のもつとも深き内面化への教養に並んで、これに先つて「手」の教養を推奨するに倦まなかつたものは彼のみではない。また新人文主義の建設者たるヘルデルも、また教育學のほとんど登りすぎた理想主義者フイヒテも、教育のこの實在的基礎をまさしくまたその素質の特性がことにすぐれて精神的形成の途へと指進するものためにあらゆる強き語勢をもつて要求してゐる、それはかゝる特性が民衆共同態の健康なる大地の根據から離れないためである。生きた叡智、生きた道徳、生きた藝術は、生きた宗教さへも、この基礎を必要とする。その精神性が健康なる感性に根ざさないものは、その人は決して充實せる人間ではない、しかし感性はただ自然的なもの、そのみが感官の直接的對象たる自然的なもの、に於ける労働の直接性に於いてのみ健康であることができる。人は吾々をギリシヤ的に教養しやうと欲する。さて、ギリシヤ的教養はまづ第一に健康なる身體陶冶であつた、つぎにいはいはゆる技藝である、それもまた感性的なものから自己を遠ざけない、それは、實際あまり意識されなかつたが、事實的には非常に高き程度で、また技術的教養すなはち労働教養であつた、それは例



へばソクラテスにはつねに認識と道徳の法則をそれに於いて考究する自明的な基礎として妥當した。プラトーンは實際、貴族主義者として、それを輕蔑するやうに見える、しかし彼はたださう見えるのみである、ただ彼こそ吾々にソクラテスの方法のかゝる生動的感性的意義を、巧妙にそして微細に徹する理解に於いて、指示した人であるのみならず、つねに彼は技能そのものを高く尊重した、彼はただ己のが魂を技能に賣却し、そしてそれ自身には健康なる地盤からより高きものへ、理念へ、登ることを能くしなかつたものを特に尊重することができなかつた。いづれにしても吾々はギリシヤの生活に於いて、何ものよりも、この全國民生活を浸潤せる、まさにギリシヤ人の健康なる感性的精神にもとづく彫塑的完成を驚歎しそして羨望する。もしくは人は吾々にゲエテを指示してもいい。ゲエテはしかし決して文字の人はなかつた、各人が知るごとく、彼は何よりも、眼の人であつた、それは殆んど、彼自身の證言によれば、詩人としてよりも更に多く一人の彫塑的な人間であつた、彼は全く自然のなかに、とともに、そして實に單に觀照者としてでなく、形成者として、生きた人であつた、それ故に彼はつねに自然に對するすべての種類の勞働に對して、そしてすべての正直に自然に對して勞働しつつある人間に對して、温かさと同

感とに満たされてゐた。

言語的文字的才能をそれ自體により高等なものとして評價することは一つの根本的な誤謬である。それは一つの別の、一層非普遍的であり一層地盤に遠きものである、しかし何故にそれを一層高等とするのか？ 私は、まさしくそれが直接的勞働の地盤から離れ、それだけますますそれがつきに命令の技能のために必要になる故に、それ故に氣遣ふ。事實的に眞に指導的地位を保つた教師たち、古へのソフィストたちはそれを辨へてゐた、彼らはつねにこの、身分高き家の男子に非常に解しやすき觀點から、彼らの、精妙にされた仕方、これを目的とした辯論家的文學的「智」を賞め薦めた。今日まで吾々の口授的教育家は、このやうなソフィストたちである、人は彼らの著書を一度自己の注意力を向けつつ讀め、人はそれを一步一步に氣づくであらう、そしてつぎに手で勞働せる階級に於いて彼らに對してますます熱く向けられた、そしてすでに今日は吾々の「高等」の教養と、教養の傳達と、のための重大なる危険を意味する、かの本能的な憎惡をよく理解するであらう。

それでは命令は行爲よりも以上なのか？ 魂に於いて自由なるものはもつとも好ましくはまつ



たく命令したくない。彼は自由なもの、意志あるものを自己のまはりに見たい。奴僕や餘儀なくされたものを見たくない。しかし實に命令はあらねばならない。けれど命令も服従も、兩者はともに奉<sup>ダイニスト</sup>仕である。兩者は必要の事である、その一も他よりそれ自體に決して多く、またはより少くではない。各人は彼がよりよく解することに於いて命令すべく、そして他人がよりよく解することに於いて服従しなければならぬ。例へばもし博學多識なる紳士が一つの登山旅行をしやうと欲しそして彼がそれに馴れてゐないならば、經驗ある案内者の命令に悦んで服従し、然りばあひによつては自己を赤兒のごとく繫縛させそして思ふまゝにさせるやうに、彼に切に勧めなければならぬ、さもなくば彼は怪我をするかもしれない。そのやうに人はみな命令権力と服従義務とを解釋しなければならぬ、さうすればそれらは同胞性ともまた平等や自由とも牴觸しないであらう。より高きそしてより低き階級、より高きそしてより低き學校、教養と社會的地位とのより高きそしてより低き階級、そして社會的そしてそれに對應して教養の階段に於ける上昇と下降、といふごとき誤つた概念は全く消滅しなければならぬ。練達なる労働者から中庸のもしくは劣等の教師、僧侶、法律家、醫師へは何らの上昇もない、しかし實に、ルソーに倣つて曰へば、王者

から 人間への上昇が一つある。純正なるデモクラシーの國々に於いてはつねにこのやうな志操の幾分が生きてゐる。例へばシュイスに於いては何人も、すべての民衆の各層からの兒童が同じ學校の椅子にすはることを上層の階級の兒童にとつて何か屈辱的なことは考へない。シュイス人は多大の健康なる事<sup>ウェルフェア</sup>物感をもつてゐる、しかしそのかはりに言語の熟練の才能は少く、またその趣味も少ない。その話しかたにはまたたしかに論理的形成が缺けてゐる、しかし決してそれがために内面的な事的論理<sup>デフハロギク</sup>に缺けてはゐない、いづれにしてもシュイスはそれを行爲に於いて證示する、その行爲へは、言葉からは、殆んど言葉が流暢に出れば出るだけ、それだけですす途は遠い。また吾々に於いてもことに秀でて手で労働しつつある周圍に於いてはさうである。しかし吾々の諸學校では言語陶冶は一つの事柄上全く不正當なる程度に於いて多大に行はれてゐる。それは最も早い時期から一つのあまりに大いなる分量を占め、そして直觀陶冶への最初の、微力なる開始を打ち越して、上へ向つてますます進んで、ベスタロツチが要求しそして原理的にあらゆる段階をとほして最高のところにまで固く保持しやうと欲したごとき、そのやうな直觀陶冶の全き反對となる。それがまづ根本的に改變せられなければならない。職業の必要は實に實科的陶冶



に一つの強力なる重大さを與へることを餘儀なくするであらう。民衆の大いなる多數にとつてはそれは中心に立たなければならぬ、何となれば吾々はさなくば餓え、そして今日あるがごとくに外國の奴隷たるまゝでゐなければならぬ。何人も吾々に自由を贈らない、吾々はただそれを自らに勞働して得能ふ。吾々の高等の技術的訓練はすでに卓絶してゐた、基本的な勞働陶冶はケルシエンシュタイナーとそして他の人々によつてよく試験された、一つの健全なる始めはすでに爲された、つぎはその個々の點に於いて希望多く始められたるものを貫徹的に繼續しそして普遍化することである。

150  
人文學的に才能あるもの、將來の教師、僧侶、醫師そして法律家、のためには、彼らのために特別に定められたる授業がただそれに對して明瞭に適能せるもののみ與へられるといふことによつて多くが得られる。人文的學校はつひに、現在それにとつて實はそこに屬せざる學生の群集が意味する壓迫的な重荷から、解放されるであらう。それをもつて教師に於いても學生に於いても一つの著しく高められた業績能力とそして高められた樂しさが達せられる、しかるに今は兩者はそのやうにしては全く解くことのできぬ一つの課題に徒らに勞力を費さなければならぬ。

この方面に才能を與へられてゐないものを抑制することは、ここでは、特に才能あるもののため  
に道を開くことよりもつと重要である。一つの明白なる才能はつねに自己の途を見いだすこと  
を知るであらう、それは全體に於いて多くの外からの助力を要しない、そしてまさに言語の研究  
のためには、ことに死んだ言語の研究のためには、いつでもまだ時がある。まさしくそれがま  
すます學問<sup>ホフセンレキワト</sup>問てふ性格を取るだけ、それだけですすそれは狹義の學校授業に、兒童學校の授  
業には屬しなくなる。また實<sup>レアル</sup>なものについても學問は存する、しかしあらゆる正當さをもつて  
何人も兒童學校に於いてはそれについてABCよりもやゝ多くをしか與へることを考へない。學  
問は全く自由なる、獨特なる練達<sup>アインアルバインング</sup>の事であり、研究者の指導のもとに、そしてはじめてから獨立  
的な吟味と攻究である。それはしかし大<sup>ホホシユ</sup>學の與かる事である。

實にまさしくそれはつねにそしてすべての人のためにすでに少年教育の少くも理想的な目標で  
なければならぬ。何人も、今こそはじめて精神的財産の自由なる勞働的獲得が始まる、すべて  
今まで得られたものはただ器具の使用に於ける豫習であつて仕事そのものではない、といふこと  
の充分な概念を得ずには、少年學校から卒業させられてはならない。いかなる生活職業も「大學」



の性質をもつつねに繼續する訓練を缺くことはできない。いま今日の意味での一つの規則正しい大學的研究が當分のあひだすべての人にはとても提供されえず、ただ一つのわづかな選はれたものに提供されることができのみであるならば、民衆大學の形に於けるそれに對する代償はそれだけですす必要である。

しかしここで、現在すべての單なる職業教育に對する活潑な反抗が行はれてゐることを見誤つてはならない。人はルソーをして謂はしめた、人間教養は職業教育に先だつものである、と。しかし人はまた他のことをルソーをして曰はしめるべきであつた、すなはち、人間教養の完成のためには職業教育は缺くべからざるものとして必要である、と、何故なら「無職業なる各々の市民は詐欺者である」とおなじルソーは曰ふ、今日の言葉でいへば、掠奪者である、といふのである。しかし吾々が思惟するとき一つの基礎となる普遍的民衆教育が職業責任の誤解にみちびくかもしれない、などは決して心配すべきではない。何故ならまさしく労働の直接性からこそ全く自然的に社會的、責務の意識が生育する。そして精神の自由が、創造の自發性が、職業的責務に繋がれることによつて、必然的に苦しまなければならぬ、といふのは一つの誤謬である。それ

はむしろ一つの健全なる職業的活動からたまたます新しき刺戟を汲み取るであらう、あたかも大學教授にとつては大學の授業から研究へのつねに新しき豊富なる刺戟が生ずることくに。ただ今日大多數の職業がそれに墮した木で作つたやうな硬苦しさが實にあらゆる自由なる精神的感動を麻痺せしめる。けれどそれは本來職業の罪ではない、職業そのものはむしろ精神的自由よりもつと甚しくその下に苦しんでゐる、何故なら精神的自由は、たとへ職業の裡にでなくても、しかしそれに並んで、つねになほ自己の領地を、たとへ多くはただ辛苦してそしてわづかにそれを維持するのであるが、獲取することができたからである。

しかし今日低く沈落した職業責任の意識が一般に再び強くなること、それにはただ唯一の方途がある、それはすべての人を一つの、全く在來の兵役の義務に代らなければならないところの、眞劍なる労働義務に服せしめることである。必要労働の苛酷と困難の全體は各人に充實せる自己の經驗によつて知られなければならない、たださうしてのみ労働者の魂への、そして労働そのものの魂への通路は開くであらう。ゲールが彼の「三箇月の工場労働」を経験してからすでに永いことである。それはまだあまりにはなはだしく「上から下へ」と考へられてゐた。それでもそれは



たしかにそのときに唯一の可能なるものであつた、これに反して今日は直接的労働の最深の生命根據にまでの充分な沈潜は、私は信する、缺くべからざることとなつた。——それでは吾々はすべて工場へ入らなければならないか？——それをまた工場労働者は望まないであらう。けれど吾々自身は吾々の各々が己れの服役義務の分けまへを、少くも以前の兵役義務の程度にしたがつて、負擔することを望まなければならない。ベルトルド・オットーは全く正當であつた、それはいつまでも社會的訓練への輕蔑すべからざる始源點であつた。それは一般的國防義務の制定者によつてまつたこのやうなものとして考へられた、それは實際社會的服務的一つのはなはだ効果ある豫備校になるべく、そしてなりえたのである、ただすべてを荒廢した資本主義はまたそれをまつたく徒勞にした、資本主義は、あたかも全く同様なる社會的精神に於いて考へられた普遍的義務教育からとおなじく、それからそれがあべきところのもの全き反對を作りだすことに成功した。それにかかはらず兵役は、一人の善き士官とそしてすぐれた隊員とが合したときには（そしてそのやうなばあひは存在した）、社會的見地に於いてすぐれてよく作用した。今や勿論それを恢復することなどについては語ることはできない、それは甚しき濫用のために耻づべき有様で

崩壊してしまつた。今日は普遍的勤務は、ただ經濟的労働のそれであり得るのみである。もしも手工労働への参加がすべての人にとつての義務となるのでなければ、他のしかたではあこがれ望まれたる、すべての人にとつて生命的に必要な、手工労働の靈的滲透は達せられない。人はここでテララ組織テララ組織について語つてはならない、もしくは人は二様のテララ組織のあることを明らかにしなければならぬ、一は、それはただ労働するものの作業力の充分なる餘すところなき利用（またただそれ故に保存）によつての最高の業績の達成を考へるものである、他の一は、それにとつては回避すべからざる必要労働が労働するもの自身に及ぼす最良可能の影響がその第一の、規定的願慮であり、最良可能の業績はただまさしく却つてそのために補助となる副的収益にすぎない。

しかしここではそれはまた新しく詳述せられることを要しない、何故なら、まさしく自然的なものに於いての直接的労働の中に最深の創造勢力が眠つてゐる、といふことはまへの章に於いてくはしく叙べられたからである。全き無拘束をもつて教育學的理論はここに人間的生存の最後の生物學的根據に溯らなければならない。最低の、物質の新陳代謝にいたるまで生理的組織の自己



再産、ことにしかながらそのなかに労働のすべてのリズムが、最低より最高にいたるまでその根柢をもつ呼吸と血液循環の驚嘆すべき體系は、それは、古くから感知されてゐたごとく、人間であることの神聖視されたる原始的根柢である。そこから厳正なる聯絡をもつてすべての人間的なものが開展せしめられる。それは一つの今日殆んど一二の個々の點で着手されたばかりの、はなはだ深く迫り入る研究の課題である。しかしまたそれには、各人があらゆる學校の中でもつとも必要なるもの、労働の學校の嚴正なる眞摯について、自己の生きた經驗をもつて満たされそしてそれを一つの他所のこととしてでなく、各人のもつとも切實な事柄、まさしくもつとも高く精神的な人間の事柄として解するとき、そのときはじめて正しくそこに及ぶであらう。

もし人がそのすべてを心に留めてゐるならば、あたかも豫め儼存する抽象的概念にしたがつてかのやうに、汝はこの事務の、汝はあの事務の、才能がある、故に汝はこの事務學校を、汝はあの事務學校を卒業せよ、さうすれば汝は仕上げられそして我すなはち國家から汝の任職と給與とを期待する権利がある、そしてこれがすなはち汝の「社會的職責」である！ といふやうな一つの生活にうるとき、外的指令が國家から發せられるのは「統一的學校」の全く轉倒せる見かたである

ことが自ら示される。もし統一的學校の理念の完全なる轉倒のために賞が懸けられるなら、このやうな見かたは褒賞に値する。むしろ人間から、實になりつつある人間から、兒童から出て途は求められるべきである、そしてゲエテがそれを彼の「教育縣」(譯者註キルヘルム・マイステルの遍歴時代のなかの)に於いてかいたやうに、「これらの途は彼にもつとも細心なる指導に於いて開かれなければならない、さうすれば兒童は健康なる本能からおのづから彼にとつて歩みやすき途を見いだすであらう。そのばあひに二つの主要なる危險がある、それは一つの共通の源泉から發する、一にはもつとも深きそれ故には一般に表面に迫り出ざる才能は看過されるかもしれない、二には一つの特別の才能方向が明瞭に表はれ、そしてそれ故にそれのみが刺戟せられるあひだに、多くの他のまた存在する才能が隠れるかもしれない、すなはち才能の多方面性がその權利を欺き取られることである。理論は一般にすべて可能なる才能に對して一つの餘すところなき分類を、ことに硬固な區分をもつて、立てやうとすることを慎しまなければならぬ。それはいはば一つの才能の數學といふやうなものを求めて努力すべきではない、むしろ一つの工學として實に力學、最後にしかながらむしろ一つの才能の生物學(eine Biologie der Begabungen)に



向つて努力すべきである。人はすでに工學（エンジニア）に於いて「三天體問題」がいかなる困難を提供するかを知つてゐる、しかしここでは人が頑固な理論をもつて強制することを希望してはならないほど微妙なる事物を取り扱ふのである。唯一の可能なる解決は、成りつつあるもの自身にとつて、健康なる感情によつて少くも中心を、そこから彼にとつてすべてが出發しそしてそこにすべてが復歸する中心を、見出すことが可能にされることである。それは、より單純なる性格に於いてはたやすくそしてはやく、しかしより豊富に才能あるものに於いては困難でありそしてたしかに稀ならず全く晚く、自己を見いだすものである。プラトーンの要求にしたがつて、各人が「彼のもの」彼の特有の勞働すなはち彼が他の何人よりもよく爲し能ふところのもの、に適中しなければならぬ、といふことは、正しく解すれば、ただ各人がそこから彼に人（メンション）道の宇宙がひらけそしてそこへ向つて彼にとつて人道の宇宙が集注するところの、眞の中心點を見いだせ、といふことを意味する。各々のそのやうな集注は各々の他の集注とひとしく正當でありそして必然的である、ただ可能なる諸集注の總體が、あだかも一の積分式に於けるごとく、人道の全體を與へる、それはあだかも相對性理論にしたがつてただ相對性的見地の無限が、その相互間の法則的交互關係の

無限性によつて、存在するものについての畢竟一なる見地を與へ、そしてこれは従つて學問にとつてはその無限的課題の理念以上のものでないと、同じである。そのやうにいかなる固定せる限定も結果であつてはならない、すべてはそれ自らすべてに參與する、世界、無限の諸世界は自體にすべてのものに開かれてゐる、また各人は羅針盤指針面のすべての方向をとほして導かれなければならぬ、磁針はその中心のまはりに自由に動き得るやうに残らなければならない、またつねに變じつつある方位の測定に於いて引着の點を再び見いだすためには。

組織制定上には、そこから、<sup>15</sup>一つの共通なる基本學校の、一つの、多様な組織に於いてなほ有機的に統一されたる、中間學校の、そして一つのなほ一層多様な編成に於いてただそれだけますます厳正に統一されたるすべての人のための大學、一つの眞の「大（ウニヴァルジティ）學」の、要求が歸結される。身體的陶冶と手の勞働とはしかしながらすべての段階を通じて一貫しなければならぬ、そしてこのやうに多様に編制された學校組織、この全く本有なる學校國家は全く經濟の、そしてそれとともに法的關係の組織のなかに築き入れられなければならない、そして經濟と法的關係の全組織は全くこの見地からはただ諸組合の組合としてそしてつひに民衆國家となることによつて



可能である。そのやうにしてはじめて民衆學校は、吾々が要求したときものは、民衆の學校、そのなかで民衆が民衆として一般に自己を築成する學校となる。一つのかやうな學校がただ授業機關であるかまたは志操を教養するものでもあるだらうかは、望むらくは、今は何らの問題ではない。ただいかなる志操がそこから生育するか、そしていかにそれが自己を表はさねばならないか、はまだ一つの考量を要求する、それはしかしまだこの場所には屬しない。

また、高等なる段階に於ける授業の精密なる形成、ことに單に實科的ならざるものそれは、一つの獨立の章を要求する。ここではただ吾々によつて思惟せられた基礎の上ではいづれにしてもそれへの途が開けてゐる、といふことを示すのみで足りやう。しかし歴史的教養、そしてこれのためにまた言語的文學的教養（いはゆる死國語の、すなはちそれらが死んでゐないかぎり、吾々にとつてはなほ充分生命的になり能ふかぎりの、死國語のそれ）の全くいかにしても充分高く評價しつくせぬ重要さについては、人はそれを少年に引き入れることについてはなほだ用心深くなければならぬ。それは一つの全く換へがたき價值ある事柄であるが、同時にはなほだ重大そして困難な事柄であつて、現在の、實際の生活の拒否すべからざる要求の側らに、それに堪へるこ

とは、ただ少數のものが爲しうることである。それは日々の糧であることはできない、それは何らかの少年授業の中心點であることはできない、それは、勿論それに對して才能あるものが遊びながらわがものとする必要なる手工器具たるばあひはとにかくとして、大學に委ねられなければならぬ、むしろそれは、もしそれをまつたく眞劍に考へるならば、全生涯を要求する、それは一つのまつたく熟したる年齢の關する事である、それは哲學と異らない、ことにそれは哲學とは密接に相關し、哲學なしにはそれは、あだかも逆に歴史そして實に精神歴史に、それ故に文學そして實に世界文學のなかに深く根ざさざる一つの哲學のごとくに、虚空に懸垂する。實際すでに少年學校はまたこれへの基礎を置くべきである。しかしそのときには收穫されたる分量は第一には問題でない。慾望と愛とをさましそして器具の使用を教へること、それが中等の段階に於いて要求され能ふすべてである。それはすではなほだ多くである、しかしそれはただそれに向つて充分に能力ある學生と教師とに於いては確實にまたわづかの期間に於いて達せられ得る。ただ一人のすぐれた教師は一二年にそれをたしかに成就する、そしてさうすればすべてが獲られたといふものである。何故ならこの研究は、一度生き生きした自發的衝動によつて眞面目に把持せられ



ば、その受容性ある者をおのづから彼がそれをもはや決して放さないであらうほどそれほど堅く保持するからである。吾々の祖先は吾々よりもつとはなはだ軽い學校鞆をもつて大學へきた、そして人文的諸學問の創造者的建設者となつた。何故に？ 學校は彼らの脊囊を充分軽く包んだ。それで彼らは勇ましくそして自由にもつとも峻しい高みをも攀ち登ることができた。彼らはそれ故に快感と愛をもつて、盡きざる自己の発見の全き歡喜をもつて働いた、そしてそれが驚異を爲した。吾々にはこれに反して人は學校鞆の張り裂けるまで詰めこんだ、そのやうにして吾々、それを引きずつて勞苦多く這つてゆく、大多數がまもなく麻痺ししてあるひは忌はしき重荷を投げすてるか、または平板なる低地よりかなたには決して出ず、自由なる絶頂にまでは決して迫り登らないのは何らふしぎなことではない。

しかし正しく編制された統一的學校は何よりもこのことを、すなはち學習の二つの主要範圍たる人文學科と實科とが今のごとくに分離しないことを、確實にするであらう。一方ではまた人文學的教養課程に進むものも、まへに實科的基本教養を通過して居り、そしてそれ故にそれに對する充分な理解を人文學的研究そのもののなかにまでともに携へてき、これによつてそれは殆んど計

るべからざる仕方では活かされそして深められるであらう。他方にはしかし實科的學習にとつて人文學的な照明と溫化とが、今日幾重にも爲されてゐるやうに、喪失せしめられることを要しない。すべての無味乾燥なる一様性と組織の固定性とは避けられるであらう。それらは統一的學校の思想に全く實に矛盾する。何となれば統一的學校は實に差別化に向つて努力する、しかしそれは連續性を犠牲にしてではない、それは最高の運動自由性を求める、まさに今日支配する固定的組織に反して。この全組織の運動自由性はしかしながら單に授業にのみならず全學校生活に、それにとつていままでもつともいたましくも缺乏してゐた内面的なしなやかさと自己行爲の楽しさとを還し與へるであらう、むしろはじめて與へるであらう。學習者の最強度の自己參與は最低の段階から最後までその原則でなければならぬ。何を彼が達成するか、いかにそれにしたがつて彼の全學校過程とそして彼のそのさきの生活道程が自己を形づくるかを決定するものは本質的に彼自らに於いて存せねばならない。この決定はそのときはもはや今のごとく暫時の氣まぐれや、不明瞭なる嗜好やまたは將來の生活職業についてその曖昧なる、多分は誤れる（何となれば自己の經驗にもとづかぬ故に）諸觀念によつてではなく、嚴正なる勞働に於ける自己の力の眞率なる



試練にしたがつて、同時に他の學生と教師との恒常なる、敢へていへば兄弟のごとき共働の下に爲されるであらう。それでもなほ才能の方向について重大なる、もはや再び償ひがたき錯誤が生ずるときに、もしも學生と教師とが一般に於いて、何處に各人の主なる才能が存し、何處に存しないかについて、一致してゐなかつたならば、それは容易なことではないにちがひない。しかしもしこれについて両者が一致してゐるならば、そのとき私は彼らの子を全く、子とそして教師との一致して明晰なる確信にしたかへば彼の才能の方向には存せざる一つの道へと、強制せんと欲するほどに充分わがまゝな両親があるならば會ひたいと思ふ。

「11」ときとしては、十歳もしくは十二歳の人間の、然り十四歳の人間の才能の特性を充分な確かさをもつて認識することはまづたく不可能であると主張されてゐる。教師はそれをし能はぬ、生徒は勿論できぬ、彼はまるで自己を観察しない、自己について全く判断することができない云々。實際これに對して、實にいままで老成なる多數の者のためには決定は遅くも十四歳には、ただにそれ以上の教養過程のためでなく、職業のために、爲されなければならなかつたではないか、と答へたくなるであらう。人はそのやうにして再び——それは典型的である——有産階級の兒童のみ

について考へそして他を問ふことを簡単に忘れてゐる。しかしそれをまづたく眼中に置かないとしても、經驗は、まづ手の勞働に兒童のときに必要な機會と、刺戟とそしてよき指導とを一人のすぐれた教師のもとにそして同様に努力する相生徒のあひだでもつてゐたものは、彼がそれについて適能をもつか、そしてどの方面に特にさうであるか、について疑惑に留ることは不可能であることを、證據だてる。フアイヒン描くこと、モラーレン形どること、音樂等に於いては疑惑は同様に除外されてゐる、人はまさにそれを爲し、そしてそれとともに彼はそれを爲し能ふことを、もしくはそれを爲し能はざることを、經驗する。一人の兒童が描くことに才能があるか、音樂の才があるか、全く才能がないか、すぐれて、あるひは卓越して、もしくは尋常に才能があるかを定めるには全く簡単な試験で足りる。數學的なものに於ける試験も同様に容易でそして殆んど無謬である、そして殆んどすべてに於いてさうである。言語的なものについては實際疑ひなくより細かなる、徐々に表はるる差別がある。勿論そのやうな差別はすべての範圍に存する。しかしそれについてもまたもつとも通常のものはいく、母國語の最初の習得からはじめて、疑ひなく現れる。しかしここではただ才能の一般的方向についてまづ謂ふのである。いづれの學校兒童もしかしながらそれにつ



いては一般に於いて知つてゐる。「それは私にできる、これはできない」、児童たちはそれをまた相互について、多くは教師たちよりもはるかに優つて、よく知つてゐる。けれどもまた教師たちももし彼らがそれについて眞面目に注意深かつたならば、それをはなはだよく知りうる。彼らがそれについて誤るのは(そしてそのやうな誤謬ははなはだ夥しい)それはただ彼らが豫め定められた教授細目とそしてその他の通常の學校事業の共通の型式をすべての兒童に課するのに慣れてゐるからである。彼らのみじめな断片的な仕事を爲すことに満足して、彼らはすでに、すべて彼らの學童をあだかも一つの羊群のごとくに熟路の上に保ち、そこから實にただ一頭をも逸らせないやうに、配慮してゐなければならぬ。彼らがそれでは一般に何らの質的な才能の差異を認識することができず、ただ指定されたる業績に於いて點數にしたがつて十もしくは一を記録し能ふのみであることは驚くに足りない。これとは異つた他のあるものが實に可能であり、そして困難でさへもない、といふことはただ一年でもただある一つの科目に於いて一人の眞の教育家を教師にもつた人には、必らず明瞭であるにちがひない。私は私の學校時代のこと第三級に於ける一人の數學教師を思ひだす、彼は一言をもそれについて空費することなしに、四十人ばかりの生徒を

三つの群に分けた——明白に才能ある生徒の少數、これには彼は時間の始めに特別の問題を與へた、それについて生徒たちは正直に勉強し、そしてただのちになつて「出來たか？」と問うた。數學ではだれでもそのやうなことを自分で知ることができそしてそれには教師は要らない、と。またこれもあまり多數でない明白に才能少き生徒については、これに反して、彼は着實に時間の大部分中骨を折り、しかしたえずそのあひだに全く豫期されない質問を、最多數の中間の生徒に投げて、これがともに進みつつあることを確めた。そのやうにしてすべてのものは學習した、しかし少數の才能者は、彼らに於いては勿論彼らに與へられたる名譽によつてその事に對する愉悅が殆んど情熱にまで高まつてゐたのであるが、自發的繼續的な仕事に對して一つの障礙を與へられた、それはその後の四學年とそしてそれ以上のあひだ繼續した、何故ならそこでは人は殆んどまつたく自身に委られてゐたからであつた。今それは一つの稀なる例外的場合であるかもしれない、しかしそれはいづれにしても、十二乃至十四歳のものに於いて授業の對象に對する才能をより繊細に識別することが決して不可能事でないといふことを證據だてる。數學的なことに於いてはそれは比較的容易である、しかし何故にそれが他の事物に於いては本質的に相違せねばなら



ぬかは考へられない。人はいふ、吾々は「個性の秘密」に侵入することはできない、そしてそれを欲しないと。しかしここでいふのは決して深く隠れて存在する事物についてはない。私は、何よりも宗教的なもの、そして本来の藝術的なものに於いて、學校がむしろ兒童を放置し、そして神様とその九人の美神を遮つてその仕事に手を出すことを企てないことを、欲したのであつた。ここで曰ふのはまったく經驗可能な事物、確實に調制し得べき業績についてである。人が何事かを能くするといふことの簡單なる證明は人がそれを爲すことである。彼がそれを爲すか、それをしかし生徒は知り、同輩生徒たちが知つてゐる、そしてまた教師も知る、もしも彼がそれを知らうと欲し、もしも彼が一般にそれを知ることの責務を感じるならば、そしてもしも彼がこの知識への直路を進むならば、すなはち彼の生徒に向つての一つの深切なる、兄弟的な關係の途を進むならば。しかし今までその點では全く缺けてゐた、そしてそのやうにして、一人の、多分は一人のすぐれたる教育家てふ名聲を博しつつある教師が有能なる生徒らの全級をまったく誤つて判断し、しかもそのときに知的そして道徳的に何が各人のなかに在るかを精確に知つてゐるやうに臆斷する、といふやうなことは勿論起りえたことである。どうしてそれが可能か？ それは學校が

否勿論學校に強く反射的影響を及ぼす陰慘なる社會的分裂が、教師と生徒とのあひだに、生徒が教師に對して、もつとも有能なる教師に對してさへ、自己を故意に隠蔽するくらゐに、一つのそのやうな間隙を作るに成功した故に、それ故に可能である。たしかに例外はある。しかし何處でも、そのあるところでは、人はただちに生徒と教師とが互ひによく知りそして教師はその生徒の才能についてすこしも疑惑をもつてゐない——そしてまた生徒が教師についてもさうであることを確めるであらう。

事柄に即しての見かたに於いてはしかしながら、才能についての判断を困難にするものは、主として、言語的なもの、そして單に理論なるもの、の偏重である。その兩者からは學習者はたやすく見かけでは、彼が内的に自由に支配せざるところのものを、わがものとすることができる。それはまさしく間接的である、それに於いては人間は自己をいはゆる「事柄」のうしろに隠すことができる、しかしそれは純正なる事ではなくてただ型式・衣裳、舞臺裝飾にすぎない。それは一つの見かけの教養を與へる、そしてそれは人間のなかにそして人間に存する簡單なる眞理のうへに一つの覆衣をひろげる、そしてしかるのち人は「個性の秘密」について語る。しかしもしも個



性がこのやうな仕方では自己と他人に對して秘密となるならばそれは一つの病的兆候である。一つ  
の力に充ちた個性は自己を明晰に語らずにみられないものである。それは單純にそして直接に  
まつすぐに行爲と眞實とに於いて、言語の被覆に包まれてでなく、理論の迂路に於いてでなく、  
自己を興へる。この意味にことにケルシェンシュタイナーは多様に力強い表現を興へた。それは  
またゲエテの意味したことである、彼の「教育縣」は全く個性のこの行爲の證示の精神に満ちてゐ  
る。彼には、何らの素質、何らの才能を誤り導かざること、が教育のもつとも高き、もつとも聖  
き原理として妥當する。それ故に教育は兒童がまた彼の自然的性質に忠實であるかを精密に觀察  
しなければならぬ。教育は各人の才能を正路の上に導くために各人が何處へ向つて傾いてゐる  
かを究めるべく努めなければならない。ゲエテは、してみれば、各々の個々の人の才能を認識する  
ことを可能であると考へたのである。そしてそれへの道は何であるか？「思惟と行爲」——むしろ  
彼は直ちに訂正してゐる。「行爲と思惟」それがむかしから認められ、むかしから爲された、あら  
ゆる叡智の總括である、それはしかしどの人によつても透察されたわけではない……「新しく生  
るる者ごとに人間知力の守靈シユニウスがその耳のなかにささやく言葉、行爲を思想に於いて、思想を行爲

に於いて、ためせ、といふことを自己に法則とするところの人は、その人は誤ることはできない、  
そしてもし彼が誤るとも、彼は直ちに正しき途のうへに再び自己を見いたすであらう。「私はどう  
して統一的學校の原則がこれより短かくそしてこれより適切に言ひ表はされるかを知らない。そ  
れを學校が把握しないならば、そのときは學校のためにもまた、それが「新しく生まれ」さうし  
てそれが聴くことをいまやあたかも忘れてゐた「人間知力の守靈」がそれに再び聞えるやうにな  
ることを、希望すべきである。數行さきで更にゲエテに於いてまた更によき言葉がある。「私は彼  
ら（生徒たち）に呼びかけたい、心をひらけ——何故なら心は幸福よりも以上であるから。しかし  
もし上位のものがその才能をもつてゐるときには多數はつねに充分心をもつてゐる。」それはまた  
學校の生徒の「多數」に對してその「上位にあるもの」についても妥當する。（譯者註、以上「ケルヘル

ム、マイステルの通歴時代、参照）

これをもつて基礎に關しては充分である。すべての實際的細部はしかし實行そのものに決定す  
べく残されてよくそして残されねばならない。たたわづかの、實はまた實際的であるがしかしは  
なはだ普遍的な問題は、たしかに、こゝで全く通過してしまふことはできない。殆んど信ぜられ



ないほど、人は、それ以上の學校過程の選擇を共通の基本學校の卒業のうちに標準的に決定しやうといふ學校の要求を非難した。それを人は私的生活に對する、親の決定權に對する學校の、したがつて國家の、官僚政治の（何となれば係争のばあひには學務局シュールデヘーカゲが決定しなければならぬから）忍びがたき干渉であると考へた。しかしかく氣遣はるる軋轢の場合はさきに思惟された豫想のもとに於いては決して生じないであらう。しかしそれが生じたならば、さうすれば明瞭に證據だてられた無才能の場合に於ける學校の禁止權は決して何らの非難ではない。統一的學校の強制は親が子とそして學校との確信に反して爲す決定よりも決して鋭からず、却つて比較しがたく溫和かつ正當である。それでは子についての親の私法が存するといふものか？ 一人の辯護士はのちに息子がその繁昌せる業務に入りそしてそれを最後に繼承するといふことはなほだ尤もな願望をもつかもしいれない、彼はそれではそれ故に直ちに、私の子は必らず法律を學びそして辯護士になる、と決定していゝだらうか？ そしてさてそののちに、すでに六才、もしくは十、十二、十四才に於いてであれ、子のために學校を決定していゝだらうか、たとへもし學校と子とが一致して、彼は法律には適しない、まつたく別のものに適する、と宣言しても？ このやうなばあひ

に於いて簡單に子がまだ成年でないかぎり、子のために選擇をなす自己の權利を主張することのできる親があるならば、そのときは私には一つの公けの裁決への上告はまつたく正當であるやうに見える。

112  
その上にしかしながら何もものも、學校の官僚化ほど、吾々の解する意味での統一的學校の思想に遠いものはない。それは全く自律の上に据えられてゐる、それに於いては兩親と兒童自身とはまつたく教師たちと同列に於いてともに決定することができるといふべきである。すべてそのときに公共の事たるものはただその粹となり、そしてその實質上まつたく自己調整の上に築かれる一つの事業のため以外の豫件を與へるのみである。その普遍的指定と施設とが中央化されるだけ、個々のことに於ける實施はそれだけより自由に、より分散的であり得、そしてあらねばならない、そして個々の實施に對してはまさに國家の法律によつて運動の自由、政治的そして教會的獨立が保障されておなければならない。

人はまた統一的學校の編制によつて私立學校があるひは暴力的に除去されるか、またはさうならないときには、はなはだ多くの親たちは、すなはち富有なる親たちは、彼らの子どもを普通の



民衆學校に托さうと欲しないであらう故に、私立學校によつて公の學校に對する危険な競争者が生じはしないか、といふ懸念をも云ひ表はしてゐる。しかしまづ私立學校を除去すること、何人もそれを考へない。私立學校は、深刻なる改革を遂行することが必要であるときには開拓者として實驗學校として換へるものなき意義をもつ。一つの危険な競争はしかしながらそれについて憂ふることはない。人は公立學校を、それがたやすく凌駕されないやうに、それほどよく形成するがよい、さうすればそれはつねに自己を高位に保つであらう、ことに公立學校はいかなるばあひにも經費少く、時とともにしかしながら、無償となるであらうから。たかだか過渡の時期には私立學校は高く榮えるであらう、それはしかし何らの害ではない、何故なら私立學校はこの困難なる過渡時期に於いて一つのはなはだ重大なる任務を充足しなければならぬからである。政府は私立學校を、試験的施設の意味に於いて、進歩せしめ、しかし同時にそれに精密な限界を置かなければならない。政府は私立學校が少くも公立學校に對して立てられてあるのと同じ目標に達することを要求しなければならぬ、ただ、いかにそれが達するか、それについて私立學校に自由を渡し與へねばならない。そのやうにしてその利益は保存される、そして何らの害をそれに於

いて憂ふるに及ばない。

統一的學校組織の實際的遂行のすべてその他の問題からはここでは眼を離してもよい。もし原則が一たび承認せらるれば、さうすれば人は實際的な徑路をやがて見いだすことができやう。「不可能！」といふ悲しい言葉を吾々は吾々に向つて謂はしめない。必然的なことは、また可能であるであらう、今日可能ならざることは、それは可能にされなければならない、明日か明後日か、それはどうでもよい。内面的に必然的なことは——この事全體に於いてその上にもつとも偉大な重量を置くべきものをなほ一度簡短に總括するならば——いづれもの社會的に價值ある才能がそののちにそれが自己にとりそして全體にとつてその能ふ最善を作業することのできるその位置に来るために、己れの途を見いだすことである。それをしかし可能にするにはただもしも偏よつて両親が自己の子をあれもしくはこれの生活位置にもたらさうとする願望がことに直ちに學校への入學から、すなはち尋常には滿六才から全學校過程を通じてそしてそれをもつて本質的なものに於いて將來の職業までをも決定することを許されず、ただいづれもの兒童が一の精密にそれを目的として共通の基本學校、すなはち分化されたる、むしろ分化しつゝある統一的の基本學校に在



學することによつて、彼の特有の才能を彼の爲し能ふこととして然し能はざることの自らの経験に於いて試めず機會と刺戟と促進的な指導とを受け、それをもつてつきにこの共通の學校の少くも六年の在學ののち、両親と學校と兒童自身の確實に一致した判断の規則によつて、彼の特長なる才能を十分に發展させそして彼の才能の特性が彼をそこに指し向ける社會的活動に適能ならしめるためにいかなるそれ以上の學校道程を踐べきかはじめて決定するやうにしなければならぬ。私は信ずるであらう、これについてはもつともはやくも六年の在學のみで、そしてことにただ吾々の思惟したごとくに、基本學校に於いてはいづれにても問題となる主要才能の試練の充分な機會が提供される、といふ豫想のもとに於いては、充分な確かさをもつて決定されることができ。けれど私は、そのとき確實な決定はまだ可能でなく、十四歳までの以上考へたとき一つの共通的訓練は、すなはち至八年の民衆學校課程の共通は、その決定に必要な確かさを與へるのに缺くべからざるものであることが經驗に由つて示されるであらうといふことをさもあるべきことと考へる。しかしそれは實際的試験の事柄である。まづ人は四年の共通の學校をもつて始めよ、そのときこれが（殆んど疑ひなきごとく）考へられた目的に對して不充足であることを示

したならば、さうすれば人はすでにおのづから先へ進むであらう、しかし一方今は一つのそれ以上に出た試みはあまりに大膽であるやうに見える、恐らくは何故なら在來の諸學校の全型式によれば、教師團はこれに對してまだ準備されず、そして一つの突然な置換は多分は不可能であるからである。根本原理的な問題は遂行上のこれらそしてその他の困難の觸れるところではない。<sup>164</sup>もつとも斷乎たる反對を統一的學校の思想はいかなるときにも「高等」學校、ことに人文學的、ギムナジウムの側から期待しなければならぬ、それは理由なしにでなく、本質的な學習時期の短縮のために、その今までの目標がもはや達せられないであらうと氣遣ふのである。私自身昔から古典的言語の、ことにギリシヤ語の、保存を辯護した。そして今もそれについて一步も退かうと考へない。しかし私は人文的學習が今日甚しく危殆に瀕してゐることを私自身に隱さうとはしない。むしろ外部的なる問題、何個年の課程とするかそして一週何時間とするかのごとき問題に於いて古い立場をあまりに執拗に固執することは私には古言語教養の事全體のために危険に思はれる。むしろ人は目標を制限するがいゝ、それは大學への進入とともに達せられるべきである。私は實際確信してゐる、明瞭にそれに對する才能ある學生にとつてはまた非常に短縮された



時期のうちでもなほほんとうに善いものが達成され能ふ。しかしこれが、私の想定するごとく、普遍性といふ程度に於いては不可能であるとしても、それでも私はそれをもつて古言語の事柄がまつたく敗亡したのだとは思はない。古言語學習はただ古典的古代の學問的探究の全き高さに達する能力あり意志あるものにとつてのみ決する價值をもつ。しかしそれにはいかなるばあひに於いても、高等學校やそして大學をさへ越えて遠く達する、一つの研究を要する。少年學校の仕事はそれに對してただ準備的であることができ、決して完了的であることはできない。これを前提とすれば、それは、準備のうちのだれほどがまさしく少年教育の完結までに爲され能ふか、といふのは一つのまつたく隷屬的な問題である。必要なのはただ、それに對する才能を認識し、自己の自由なる前進的探究の愉快と愛とをよびますに足りるだけが達成せらるることである。それはしかしいかなるばあひにも達せられる。

同様の答へはなほ起りうる無数のその他の狐疑に對して充分である。もし内面的自由が得られなければ、そのときはすべてが得られたのである、それが今までのごとく繫縛されてあるならばそのときは學校のあらゆるその他の辛勞は徒らである。それはいままであつたごとく學校に對し

ての普遍的な、ただあまりに理由ある訴へであつた、學校には自由と歡喜が、内的生命とそしてそれとともにまた純正なる成果が缺けてゐた。休みなく國內そして外國にあるドイツの學校のもつともすぐれた友人たちはそれを指示ししてもつとも切に警告した。たしかに個々のことに於いては多くのことが、十年もしくは數十年まへにあつたよりは、より善くなつた。しかしまたそれを人が善しと呼ぶことのできるまへにそれはまた多くのことについて、否全體に於いてより善くならなければならぬ。つねに學校問題については爭論されたときには、争ひはたゞ一つこのことのまはり回轉してゐるやうに見えた、だれが子供を教へるか、だれが後見を行ふか、そしていかにしてそれがもつとも安固に達成せられるか？ 子供が教へられそして後見されてゐること、それについては争つてゐる人々のあひだに心からの一致があつた。「學校をもつものは兒童をもつ、兒童をもつものは未來をもつ」——恐しい言葉だ！ 何人も、それをもつべきではない、學校も、両親も、教會もそして國家も政黨もそして官吏政治もそれをもつてはならない。兒童は自らもたなければならぬ、そのとき兒童はまた彼らの最善を爲すであらう。そのときにはまた教へることが更に一つの歡喜であらう。自由へと教育することよりもつと立派な歡喜はない。



しかし實に今は日ごとに一層切實に、吾々にはまさしくこのことほど甚しく缺けてゐるものはな  
いといふ事を教へる。つねにまだひろくひろがつてゐるこれについての自己欺瞞こそ禍ひなるも  
のである。そこへと人が吾々を教育したといふ自由は何處にあつたか！もしそれがあつたなら  
ば、さうすれば吾々は今日鎖を破る奴隷のまへに戦慄する必要はなかつたであらう。しかし自由  
者を教育するかはりに、人は自由についてのものとも立派な詩を——強制的に暗誦せしめた。學  
校はこの點でたしかにひとり罪あるものではない。學校の誤謬は體系の誤謬であつた。しかし體  
系は誤つてゐた、それはいま難船した。今は學校を體系から根本的に解き放ち、それが、自ら内  
的に自由にされて、以後自由な人間を教育することを學ぶやうにすることが、第一のことである。  
吾々は曰つた、労働と教養とは再び合致しなければならぬ、しかし教養はすなはち自由である。  
これについては又プラトーンも訂正される必要がある。一方に非自由なる労働者の一大群が立ち、  
他方には、自らは粗野な労働から解任されて彼らの教養を生活し能ふ故に、自由なものとして自  
ら誇る少数者の群が立つ、ごときは不可である。後者のごときは彼らもまたいかに非自由で  
あるかをまつたく感知しない。しかし吾々は内的解放をまた最小の労働者のためにも要求する。

しかしそれは彼をそれに向つて精神的自由者なる吾々が、自己の剩餘から一匙づつ量つた自由  
を、吾々が彼のために適當と考へただけづつ上から指圖してやるべき、精神的非自由者として見  
ることではない、吾々は、彼と吾々のために共同に下から上へと自由を労働して得るために、兄  
弟として彼の側に並ぶのである。何故なら何人も、己の自由を自から自己行爲的に自由者の  
共同のなかで労働して得たものでなければ、自由ではない。それが民衆教育の精神にならなけれ  
ばならない、民衆教育はかの福音の眞理、吾々が吾々の魂を善きものと悪しきものとの上に輝く  
太陽の光にむかつて開き、正しきものと不正なるものとのうへに滴るかの實らす雨のまへに靜か  
に立つその瞬間より、吾々は僕でなくて、子どもである、といふ福音の眞理をもつてまつたく  
滲透されなければならない。人はこの自由の光と空氣を學校のなかに引き入れしめよ、そしてそ  
れを最後の間隙にまで滲透せしめよ、さうすれば吾々とそしてすべては助けられるのである。



## 六 社會的教育の内容

社會教育の吾々の計畫全體は今日や明日をめあててではなく、遠い未來をめあててに置かれたのである。たださうしてのみ吾々は、まだ決して充分に克服せられぬ一つの陰慘なる過去の勢力によつて拘束されざることを、確保し能ふ。しかし眞の未來は、眞の、そのたびに意識のなかにまづ築成すべき、過去とおなじく、むしろ永遠である。いかなる永遠か？ それは吾々には社會主義の理念、自由なる共同態の理念のもとに自己を表現する。しかしそれをもつて人間的教養の永しへの目標は實際包括的に、しかしただ形式的に、現はされてゐる。共同態の要求は例外なき普遍性に於いて人間であることすべての内實にまで、それが自由なる組合的勞働獲得によつてすべてのものの共同財となる可能性をそれ自身のうちに荷はねばならないといふ意味に於いて、擴張される。しかしそれをもつてこの内實にとつてはただ一の缺くべからざる、まさしく形式的な制約が立せられたのみである、それは「定言命令」の制約、普遍妥當的法則への歸一の制約以外のものではない。それによつて内實自身は、それに對してただ單に形式ならざるものは、まだ

與へられない。しかしそれでも内實を、そして實に嚴正なる普遍性に於いて、規定する途は指示された、それにしたがつて内實の純正さについて決定することのできる標準は與へられた。何故なら、人間たることの（すなはち人間的したがつて社會的教養の）形式と内容はたがひに對して一つの必然的交互關係に立つ、そしてその交互關係は畢竟一の同一の法則が兩者を支配しそして規定するといふことにその根拠をもつからである。

實にたとへ將來の發展の一つの豫言のそれではなくても、そのための一つの回避すべからざる目標樹立の基礎づけのための、一つのこのやうな人道の究竟規定的法則の要求は、支持すべからざる合理主義として幾様にも攻撃された。エルンスト・トレルチのごときそのやうに遠く遠く達觀する文化研究者の一つの新しい論說に於いてもまたこの攻撃に出會ふことは、吾々を驚かさない、それはそのうへに吾々の議論の考量と吟味とのためにすぐれた役目を爲すことができる。（トレルチの論文 „Deutsche Bildung“ Darmstadt, Otto Reichl, 1919. Dieselbe in der Sammelchrift „Der Leuchter“ S. 191ff）一つの「構成的に理性に於いて基礎づけられた統一」一つの究竟の「理性の普遍的理想」の前提とは反對に、トレルチは彼の「ドイツ的教養」（すなはちそれが今日ドイツ人に



とつて必然的にしか現はされなければならないところの、人間の教養の内實の規定のために簡単に「運命」を説いてゐる。その運命とは、たとへ最原始的そしてそれ故に絶對的に規定的ではないとしても、しかし歴史的結合によつていまや回避すべからざるものとなつたところのものである。彼は「己の、が運命を愛し、——そして同時にそれを創造的に支配することを最高の叡智」として讚へてゐる。この附加へをもつてすでに勿論合理主義に、全く僅かではなく、恐らくはすべてが、讓られたのである。自己の自由なる「創造」によつて支配せらるる一つの運命は、課題となる、そしてこれは結局永遠の課題として、すなはち理念として立せられることができ、しかしそのやうなものとしては理性のうへに以外には基礎づけられることができない。他方に、もしも批判的合理主義によつて努力されたる理念の普遍的法則に於ける基礎づけが、理性の一つの普遍的理想からの構成として、すなはち構成的（超絶的）に、そして畢竟理念の統制的方法の意味に於いて（超驗的）でなく、解せられたならば、それは吾々によつて代表された「批判的」合理主義の一つの平易なる、たやすく訂正せらるる誤解である。一つのこのやうな方法は一つの個別化、的課題規定と單に和解するのみならず、却つて、まさしく普遍的大前提から演繹する課題規定と

の反對に於いて、これに向けられてゐる、それは、カント的にいへば、反省的判斷力にもとづくのであつて、規定的判斷力にはない。しかしどうしてこの方法によつて基礎づけられた規定一般の統一の要求から遁れることができるか？ 「創造」や「支配」は統一にもたすこと（それをトレルチもまた明白に努力してゐるが）以外に何を意味することができやう？ 少くも一つの退歩的な浪漫主義の嫌疑を避けるためにトレルチ自身も、一つの「新しき統一」に向ふ、「對立の相互的滲透によつての「集注」に向ふ「全く本質的に能産的なる」決して「回顧的」ならぬ方向を高調してゐる。そのやうにして反合理主義からは、もつとも苛酷なる文化對立、緊張、然り矛盾の運命的な事實性の豫想そして卒直な肯定以外に何もも残らない、これらの對立、緊張、矛盾は統一にもたらされなければならない、しかしすでにこれらの互ひに抗争する歴史的「元素」がそれ自身のうちに一つの少くも制約されたる統一もしくは集注を現はし、これは翻つてたしかにたゞなほ一層深く位する原始的對立の克服から發出し能ふのであるから、統一にもたすとは「新しき」統一にもたすことであるほかはない。そのやうにして吾々はヘーゲルのそれのごとき一つの合理主義からさへ遠くはなれてゐない、それは對立や、他類、矛盾そのものをさへそれ自身に



於いて論理的なる性質のそれとして、斷然理性<sup>ラツトナリ</sup>のなかに、勿論絶對的のものとしてでなく、つねに再び征服せらるるものとして、ともに取り入れ、これとともにすべて吾々にとつて、非合理的なものを、それ自體に合理的なものとして、したがつて實現すべきものとして想定し、あらゆる不協和音の根柢に「一の唯一の節」(ヘラクライトス)の「隠れたる調和」を豫想する、しかしただ相當の理由をもつて、この隠れたる調和をまつたく把握することができるといふ要求をば斷念する、しかしヘーゲルはあるひはそれを把握したと思つたであらう。實際トレルチに於いては對立や矛盾が一つの絶對的に盲目な非合理者の深底から無選擇的に發出するといふやうな考へではないやうに見える、却つてそれらは疑ひなくその少くも制約されたる調和に於いてただ隠れたる深底のより深き、より純正なる、より強き調和を、認識せしめないとしても、豫覺せしめるものでなければならぬ。それらは、恐らくはたがひに軋轢削磨して、しかしながら新しき、より豊麗なる創造へと再び自己を形成するために、そこに衝突する諸世界である、すなはち諸創造である。そのやうにしてのみ争ひは、「父」、「すなはち物を、このやうな「物」を、法、法律、國家のごときものを生む者であり能ふ。どうして悪魔は「ルチフェル」光をもたらすもの」たりえやう、どうして悪

魔は「悪魔として仕事する」ことができやう、もしもそれが神に欲せられたもの、然り神からのものでなかつたなら。そのやうにたしかにロゴスは、「永遠の然り」は、永遠の否に於いて耻しめられはしない、それはいつまでも、かの「一なる唯一なる節」のより深き、無限の自己上昇に於いて創造的ロゴスによつて罰せらる氣早やな偽ロゴスの近視眼にすぎない。永遠の否のなかへは否定そのもののほか何も沈まない、あだかも、エツケハルトに従へば、地獄のなかで燃ゆるものはひとりただ否のみであるのとおなじである。

根本的對立としてしかしながらトレルチの構成に於いて現れるものは、太古から哲學的思惟が問題として、宗教的想像力を刺戟したところのもの、カントの二律背反の議論に於いて特に印象深き形態で形づくられそしてその後の思辨的研究全體に課題を置いたところのもの、すなはち有限的完結と無限への進行との對立、にほかならぬ。有限性の見かたには、その意味全體にしたがつて觀察の靜止に、(何となれば存在する對象に向けられてある故に)、向けられた理論が、それがひとり支配的であらうと欲するや否や、避けがたくそこに歸つてくる。これに對して原始的そして本然的に實踐的なもの、當爲に於いて自己を表示する無限への努力が對立する。



カントに於いては、無限の課題としての理念に於いて、ことに自由の理念に於いて、そして理論的に對する「實踐理性の優位」すなはち存在に對する當爲の優位に於いて、無限説インフィニテスマスが勝利を保有すべきかのやうに見えた。それはしかしすでに彼に最後の言葉となりえなかつたらう、さなくば彼は「判断力の批判」に於いてはじめて彼の積極的な著作を書くことを要しなかつたであらう、彼はこの著作のためにあだかも理論的そして實踐的理性の矛盾を一つの更に上位にある統一に於いて諧和にもたらすことの課題を立てた。諧和はいまカント自身にとつては満足に完成されなかつたかもしれない、——しかし單なる要求はすでに、思想の世界創造を生き生きと保つかの根本的對立の緊張がそのなかに於いて一つの本質的な對立項の相關關係に於いて解決されなければならぬところの、第三者についての思想を刺戟するに足りる、そこからやがてカントの後繼者たちに於いてあの偉大な三歩調の法則が出發した、それがことにヘーゲルの哲學を全く支配してゐるのである。

それは本來ヘラクライトスのいはゆる「隠れたる調和」であつた——不滅なるものの死滅性、死ぬべきものの不滅性、死の生活的意味、生の死的意味、それによつて永遠なる回歸のあるひは明る

い側、あるひは夜の側の相繼ぐなかに、緊張は自己を單につねにますます維持するのみならず、無限にまで深める、そのやうにして萬有の永遠に生ける「理性」の盡きざる富みは開展する、そしてただこの過程をあまりに短かく考へる「悟性」のみじめな肯定が——理性に對する瀆神的反抗の劣らず近視眼的なる否定も同様に——つねに再び——耻をかかなければならぬ。しかしかの原始的相關關係の回避すべからざる必然性に一度に徹入したものとつては、たしかに創造者意志と被創造者意志とは少くも理念に於いて一とならずにはゐない、それは個體の全く自己に來れる意識にその固有の「存在への生成」を、すべて生なるもの、神的なるものの永遠に生ける自己創造の一の形態としてそのやうに直接に原始的に啓示しなければならぬ、あだかも宗教の素朴なる深き意味が——つねに哲學的反省のはなはだ明瞭な感化なしにはないが——肉となれる、全くその創造のなかに進入したる、そして人間自身をその神の子たること、然りその本來神と一たることの意識に救ふべく、人間となつた神に於いて現れたる、ロゴスについて語るとおなじやうに。

この最後に要求された、しかし單に要求されたのでなく自己生命のもつとも鋭敏なる澁澗さに



於いて經驗された諧和の、神話のあらゆる暗黒から解放された、純粹に方法的な意味は、しかしながらカントの哲學のみならず、殆んど在來の思辨的哲學全體、然り、哲學的體系學一般の意味全體の體系的哲學的豫想の一つの一層根本的な訂正にみちびく、それは更に劣らず、歴史のあらゆる意義の訂正、單に何らかの歴史的に與へられた、いかに深くそして遠く把握するものであらうとも、哲學的、詩人的また宗教的等の直觀であらうとも、歴史的に與へられたものではなく、歴史的思惟一般の訂正にみちびく、それはここでは吾々にとつてすべてが關係する一つの訂正である。何となればそれなしには、現在の考察が一度敢へて踏み出したそして踏み出さなければならなかつた領域の上で、一步も充分に安全には進みえず、ただ一つの問ひでも正しく設けられずまたはその解答にただ一つ的方法的に正しい始點も得られず、何らの立言もただ假定としてさへも適切に形成されることができないからである。

吾々は、カントが吾々を「理論的」そして「實踐的理性」の、究竟は有限説と無限説との對抗に復歸する、對抗のなかにしかしながら途方にくれて術なく立ち上らせやうと欲せず、吾々に少くも第三のものに於ける諧和を問題とすることを教へた、といふことから出發した。しかしこの第三

のものがまたたしかに「理性」でなければならぬこと、ただそれが理論的もしくは實踐的でなく一、の唯一の、それ自身に於いて超理論的であると同樣に超實踐的な、理性でなければならぬことは、それだけではすでにカントとともに考へてゆく讀者に自から明白にならなければならぬ、まさしくそこまではすでにカントに由つて問題は回避しがたく設けられた、しかしそれとともにまた答へが、少くもこの最大なる問題の一つの解決の必然性が、目がけられるやうになつた。しかし事物の單に理論的な見かた、そしてまた單に實踐的な見かたの、兩者の共通の誤りは（それはカントの叙述に於いては表面にこそは現れてゐないが、しかしより深く研究するものにはやがてまもなく開かるることである）規定的理性規則の普遍性と必然性とに對する偏頗的固執であつた、それに於いては普遍性はただ隨時の全範域の外的包括を、必然性は、觀察の眼ブリアックツンクト目としての同一の内面點への關係の統一によつての集注を、代表する、その反對面としてはしかしながらつねに特殊者が、究竟は個々のものが、單に事實的なものとして、普遍者から必然性の力によつて規定されそして制約されたものとして、したがつてそれにただ絶對的に隸從せしめらるるものとして、ただそれから理解せらるるものとして、思惟せられる、しかしかの規定的法則とそして



それによつて規定せらるる事實性の單なる二面性が、「理性」の唯一のそして全體なる意味として固定せられるかぎりには、すべての自己固有性は必ず喪失されなければならない。これをもつて「判断力批判」の核心の問題として開き出さるるものは、個體(Individuum)の問題である。個體は、その言葉の意味上、部分をもたざるもの、いかなる分割によつても生じ得ざるものである。それは決して普遍者の最後の部分などといふやうなものではない、すなはち一般に一つの(外的なる)外延の、または(内的なる)内包の分割の結果や、一つの項から項へと進行する論理的關係(いかなる種類のものである)の末項ではない。このやうな一つの最後のものは純正の論理的なものに存在しない、純正の論理的者はむしろ永遠に自己を清め自己を高昇することに於いてつねに自己と同一であり、始めでなく、中間または終りでなく、また何らかの種類は何らかの單なる關係ではない、それはすべてこれらの彼岸に、すべてよりも根源的に、分割や制約や關係づけのあらゆる媒介を超越して、あらゆる特殊性を超えて、直接的に原始生命的に、永遠に若く——一言でいへば生そのものである、かの生、何故にもしくは何がためにそれが生くるかを問うてはならぬいかの生である、それはもし一つのそのやうにもおろかなる問ひに答へなければならなかつたときには、(エツケハルトによれば)、ただ答へてかう謂ふのみであらう、われはわが生くる故に、しかして生くるために、生く、と。

いまそれは勿論何ら「合理的」な答へではない、もしも人が合理的といふことのもとに(ピタゴラス派とともに)計量し能ふものもしくは計量すべきものを意味するならば。計算することはすでに分つ事でありそして單に制約するものや制約せられたものに関してのことである。またもし吾々がそれを無限的合理的者と名づけたところで、それでもそれはまたなほ合理化の課題の視點のもとに、すなはち單に理論的理性ではないが、實踐的理性の視點のもとに、觀察されてゐる、それはしかしむしろすべて他のものとともにまたこの分割を——單にのちに克服するといふのではなく却つて本源的に自己からまづ發出せしむべきところのものである。何故ならあらゆる分割に先だつて位する「部分なきもの」から出てこそはじめて分割がある、すべての單なる制約としての意味を抛棄したる超制約的なものからすべての被制約性が存する、あだかも生から、生そのものなかに隠されて、すべての死があり、そして死からそして死のなかに生があるごとく。生のなかにすべての否が——のちにふたたび否滅されるのでなく、はじめからまさしく存しない、



何故なら生は然りを生き、否ナイを生きないからである、それはただそれをもつてそれが然りを生きんがために否を否定する、それは生を生きそして死を生きるのではない、それはそれが生を生きむがためにのみ死を死ぬ。カントは「自スポンタニイテ發性」として「先驗的自由」とに於いてそれを實は手中に握つてゐた、しかし彼はそれを認識しなかつた、何故なら彼には前者は理論的の範圍に、後者は實踐的の範圍に残り留つてゐたからであつた。フイヒテは、彼がこの一つを一つのなかに置いたときにこの認識によほど接近した。しかしまた彼も生を實踐的の一方にのみ求める以上に出ることはできなかつた、彼はこれと他の方向、すなはち理論の方向とをただ理論が前者によつて吸収されるやうに合一することのほかできなかつた、彼は眞の自己性と自由とを單なる「自己が自己に還つて見出すこと」に於いて、もしくは單なる隷屬状態からの解脱に於いてでなく、生き生きた創造の原始的自己存在と自由であることに於いて認識しなければならなかつたはづである、その創造は造られてあることといふ單に受働的な意味に於いてでなく、また造るといふことの單に能働的な意味に於いてでなく、中間の、そしてそれをもつてはじめて全く根本的なる自ら自己を創造することの意味に於いてである。

そこからしかしながら——すでに指示されたごとく——はじめてすべての根本的な哲學的、思惟的、またすべての歴史觀の一つの確實なる立場が成立する。そしてそれが吾々のここに要するものである。歴史は單なる成起ではない、また單なる行爲ではない、むしろすでに事行、しかし自己事行、直接に永遠性根據からの自己創造である。何よりもそれは單に爲されたことではない、しかしまたこれから爲すべきことでもない、されば過ぎ去つたことでなく、また、近ごろシュベングラーは歴史を過去へのかはりに、未來へ關係せしめやうと欲したのであるが、來るべきことでもない。しかし人はそれを來るであらうところのものへと指向することによつて、そのためにまだ生きてゐるあひだに、生の「傳記」を、誕生から少年、成熟、老年——全くヘーゲル的である——をとほして豫め日時までも精密に算定した死まで、書くことによつて、生きた生命を經過てふ墓の囚はれからよびさますことはできない。それについてはただ一つこのことが正しい、すなはち何らの過去のことも、そこから今をとほして未來のなかへと方向線が引かれるかぎりには、於いてのほかは、吾々に關係なく、吾々を動かさない、そしてそのやうにのほかは全く何らの過去も吾々にとつて存在しない、といふことである。そのやうにしてしかしながら過去は吾々にとつて過



ぎ去らず、むしろ保たれてゐる、それは内面化(記憶)によつて全く吾々のうちに進入し、吾々のもつとも生き生きした生の一部となる。しかし全く同様にまた未來も、言葉とほりには、吾々に向つて來るべきものとして、吾々にただ何ものかを語りそして意味しなければならぬ、それは一般に吾々にとつてただ、吾々がまた未來をも全く吾々のうちに取り入れ、それを今現在の、永遠の今に於いて、そのみ真正なる、超時間的な生命そのものの永遠の現在に於いて、體驗するときのみ、存在し、そして吾々自身の未來である。

これに反して時間の意味に解したる兩者、過去そして未來は、その助けを假りて吾々がそれ自體には無時間的に體驗されたるものの永遠性内實を、生そのもののために、そしてその内實にとつて外的なるものに留まる一つの認識のためにでなく、内面化(記憶)する(すなはちそのそれ自身には意味なき斷片を一片づゝ思想的に再び組みたてて、體驗内實の分たれざる全體性に、組成する)諸坐標の一つの對位點コイグンクンクンにほかならぬ。シュベングラは(一體不精密であるが)自然科学を空間の論理にしたがつての、歴史學を時間の論理にしたがつての認識として解釋してゐるが、それに對しては、單に時間と空間とは決して互ひから分離することができないこと、そして

同様に學問と學問とは必然的に一なる學問のなかで相互倚屬的であること、をもつてのみ反駁するべきではない、却つてそれ以上に他のことがある、すなはち、時間そして同様に空間は、それらの不可分なる相互倚屬性に於いて、もしくははこの全體の、一の時空間性は、一の多項的坐標系の一項であるだけであり、ただ諸方程式を可能にするためにのほか何ものにも役にたたない、しかしてそれらの方程式は、人がいかにそれを遠くまで計算しやうとも、いかに人がそれを諸體系やそして諸體系の諸體系のなかに堅固にそして精密に總括しやうとも、決して、それらが與へるべきであつたところのもの、すなはち生きた生命を與へるもしくは算出し出すことはできない、それらは生活に對してただ、あたかも經緯度網が地圖に對して、律格の圖表が詩に對して、もしくは譜が音樂に對して關係することくに、關係するにすぎない、それらは字を綴る、しかし語らない、それらは文字を列ねる、しかしそれをもつては何らのイリアツドを詩作しない、それらはむしろこれに、この不滅なるものに死を告知する、それはただその活字箱が一つの有限数の字以上を與へないからである。しかし生命は彼の運命をトするこの新しい仕方の未來の死について咲笑する、またおなじくそれは歴史構成の古い自然化的な仕方の過去の死について咲笑する、生



命は、兩者にかゝはらず、永遠に今なるものの侵害すべからざる、自己確實なる現在に於いて生きる、この永遠に今なるものは決してかの二つの、消極的と積極的との、有限であれまたは無限であれ、根底に於いては、ただ顛倒によつて相合し、そしてその各々が任意に積極的としてもしくは消極的として解釋せられ能ふ、系列のあひだにある一の中間のもの、一の空虚なる零點ではない、それはそれに對して兩者の系列が回顧的そして前望的思惟に於いて永しへに新しくそしてより豊富に自己をまづ築き成す原點である、それは自らはしかしながら曲線の一方の下降的分枝に於いても、また他方の上昇的分枝に於いても、また決して全曲線に於いてさへも、況んや何らか一の顯著ならしめる標識（いはばもつとも明るき照明のごとき）によつて目だつやうにされたほかはしかし他のものと類と價值を同じうし、全體の連鎖のなかに排列されもしくは全體によつてのみ存立すると考へられる單なる個々の項として、盡されることはない、それを「點」といふのは最終のもの、もはや分つ能はざるもの、彼處ならぬ此處、彼時ならぬ今、といふ消極的意味に於いてでなく、絶對的唯一的有規定性、自己有規定性、そしてしたがつてむしろすべて彼ならぬものすなはち個體ならぬもの、部分をもたぬものならぬもの、まさしく部分的有規定性に對する能規定的勢力であることの純粹積極性に於いてである。

それがしかしはじめで、あたかも何らの單なる見るが及ばざる純正なる觀のごとく、そのやうにまた何らの單なる成起が及ぶ能はざる純正なる「歴史」である、それはそのなかに自己を映すために、しかし決して鏡のめぐみによつて生きるためにでなく、むしろまづ成起を創造する。それがはじめて純正なる「理念」である、理念はこれとともに勿論充分には「無限の課題」といふことによつて言ひ現はされない（たとへ一方すなはち實踐的方面には當つてゐるが）、またそれは本來プラトーン的な「實在をもつて在るもの」てふ（また他の一方すなはち理論的方面に於いては）標識によつても言ひ現はされない、たゞこれらの兩者を全く一に抱合し、自ら存在する當爲に、みづから永遠の「べし」に發展する存在、すなはち生に、永遠の今の、時間から開放された「創造」に、よつてのみ言ひ現はされる。かの歴史の未來觀は、なほいつまでも、古い過去觀と異らずして、時代の精神を吾々のなかに移し入れる（すなはちただ一契機として無時間的實在のなかへ還元することせずして、吾々を時代の精神のなかに（あたかも時代の精神が豫めに吾々のほかにあるかのやうに）移さうと欲する。そのやうにして過去の、すなはち「もはや無



し」の、もしくは將來の、すなはち「まだ在らざるもの」の有限的もしくは無限的項系列のなかへと、または兩者から組成されたる「成起」の全連鎖のなかへと、分割されそしてそれ自身それらのなかに繫縛されるものは、それはもはやまつたく「精神」ではない。もしそれがそのなかに繫縛されてゐるならば、さうすればそれはそのなかに囚はれてゐるのであり、囚はれそしてすでに實は死刑に處せられてゐるのである、そしてそのときには勿論精神に對して、落ちつき拂つて、次に來る論理的窒死を公告するよりほかのことは残つてゐないであらう、むしろ精神自ら、一人の正直なる、己の「職」に於いて乾燥せる醫學者のごとく、その窒死をみづから豫め算定しそして徐々たる瀕死に於いてますます緊密なる絞窄の階段を一つの曲線とそしてそれに附隨する表とに於いて記録することができたであらう——これに反して純正なる歴史に於いては過去と現在と未來とに於いて、自己を、彼の固有の、決して死なざる生を思想的にかつ同様に生命的なる行的勢力に於いて、ただ行のために思惟しつつ、築成するところのものは精神である。

吾々がこのやうにして吾々の考察のための立場を確實にしたあとで、吾々はさきにトレルチが吾々に答へやうとしてゐた問題、吾々の及び將來の時代のためのドイツ的教養の内實の問題、に

より近く進むことができる。そのとき彼の解決の試みに於いて直ちに二つのことが注目を惹く。第一に、彼はただに一般的に過去からのみ現在と未來のための課題の構成の「原素」を得やうと欲せず、かへつて次にこれらの原素を更に最小數(即ち三つ)にまで減ぜんとし、そして彼にさへなほあまりに甚しく思はるる混亂を、より以上に單純化することによつて支配しやうと欲する、それはむしろ一つの故らに狹隘にする合理主義に——その反對によりは——類似して見える。次にはこの圖式化がなほ非常に遠くまで進められることである、何となれば一般に過去に對しても現在そして未來に對してと同様に、教養の問題に實際にかゝはるものとして、一つの最高の精神的者が眼中に置かれ、すべての單なる有、自然的なもの、しかしまたこれにあまりに近く留れるものとして、すべて單に經濟的、そして政治的なるもの——すなはちまさしく歴史てふ稱呼のもとに今まで特別な注目を見いだしてゐたもの——が考量から除外せられるからである。それは彼れには「本質の核心」に屬せざるものとして、單に使用せらるべき、形成を俟ちつつある質料として、ただ運命的に與へられたるものとして考へられる、それを人は豫じめ知り、算定しなければならぬのであるが、しかしそれは「教養」には本來關するところなきものである。然りこの非「本質



的」なものの除去はつぎに實證的諸科學の、自然科學や歴史科學の全内容にまで擴張されてゐる、何故ならずしてそれはただ秩序、實在の透明化であり、そしてこの透視と知識はしかしそれ自身の裡に何らの意味と目的をもたない、それはただ(一)個々のものの法則そして聯絡、序列と繼起とを示す、そしてこれらすべては決して本來價值と意味とを與ふる魂の中心から出てくるものではないからである。單に自然科學そして歴史科學のみならず、またすべての「價値世界の單に個別的そして既成的固定」さへ、單にかゝるものとして、單なる間接的意味のみを精神的教養に對してもつものとして除去されなければならない、精神的教養の自由なる運動と能産性はこのやうな、たとへ内實ゆたかであらうとも、保守的な勢力によつて拘束されてはならない。しかし、たとへ人が今すべてこれらのトレルチによつて除外を宣告された諸因子に於いて、文化の老大なる組織全體から一つ一つに取り出された運算量、いはば係數のごときもののほか見やうと欲しないとしても——それ故にとて、人はそれを、全計算を單に不精確にするのみならず、全くそしてまるで非眞實にすることなしに、除去して差支へないか、否除去し能ふか？ これらすべてを、それがしかし實に疑ひなく在りそして生きてゐる故に、また充分に承認しそして計算に入れ

るといふことは不當な要求であらうか？ それは却つて單純な正直の命令ではないであらうか？ もしすべての運命的に與へられたもの、既成的なものが、ただ精神によつて「克服」せられるためにのみ、存する、といふことが一度妥當すべきであるならば、さうすればそれは吾々にとつて單に與へられたるもの、既成的なもの、「運命」たるに留る能はずして、全く自己行爲に、創造に變じなければならぬ、精神は、それが、既成的なものが、精神を奴僕にすべきでないならば、それをまつたく支配しなければならぬ。それをもつて、否認すべからざることく混亂と矛盾とが測りがたく高められやうとも、吾々はまさしくヘラクライトスの確信の勇氣へと自己を奮ひ起さなければならぬ、その確信とは、深き、吾々には恐らく永遠に隠されたる、調和こそより強き、より鞏固なるものであるであらうといふことである。吾々はそのときには不協和音をもはや回避しやうと欲しないであらう、むしろそれを探し求め、その鋭さ全體に於いて、あるひはなほかの一層深き和絃の幾分をそのなから聞き取るために、吾々の意識にもたらさうと欲するであらう。

しかしこの普遍的な、恐らくはあまりに形而上學的な考察はここでは唯一決定的なものではな



いであらう。吾々には、トレルチによつて指示されたる途に於いては、今日の事態境位の重大さに對していかにしても公平であることができない、といふ他の考慮が一層密接に迫つてくる。何故ならまさしく經濟と政治の切迫せる與件から、實證諸科學が以前よりも一層甚しく明快にそのなかに照し入つた苛酷なる諸事實性から、それをもつて一層透明になつた既成的なもの、一般の多様な葛藤から、そして深められた歴史的意識に由つて起されたる、人類がいままで生き通してきた形相（そのいづれも死んではゐず、單純にそこにはないのでなく、それはすべて死ぬ能はずとして死ぬべきではない）の單にいくつかの少數のみがでなくすべてが吾々の現在に作用を及ぼすことから——一言でいへば人間精神に何らかの仕方、意識されたる、彼に、ただ彼にのみ生きてゐるものの全き充實から、これが一般にしか理解すべきであるごとく、そのなかへと吾々が投げ入れられた巨大なる危険は一に理解せられる、そしてまたトレルチさへもが「もつとも尨大なる設問」「間斷なき世界革命」として感知してゐるところのものは理解せられる——しかしそれはたしかにまさしくただ、それが彼には安全でないために、彼をして救ひを一つの「單純化」に求めるべく誤り導いたのである、しかししてこの單純化は、恐らくは、危険をその全體の大いさに於いて明らか

にすることを回避することによつてそれを一層大きくするであらう。この全體の尨大なる問題錯綜が經濟、政治、實證的諸科學もしくは何らかの固定的な、個別的な價值固定の無数の個々の問題によつてはただ周延的に、中心的にはただ「精神」の最後の、深奥の根柢よりして理解すべくして克服すべきであることは確かに眞である。しかし實にそれらすべてはそれ故に精神そのものにも屬する。もしも畢竟全圓周がそこから規定され、そのなかに總括され、集中するのでなかつたらそれは中心ではない。トレルチ自身も、「單純化」としては單に充分に事柄の最後の深みから言ひ表はされぬのみならず却つて人を誤りやすく言ひ表はされてゐるところの課題を幾たびかはより正當に「集（コンツェントラチオン）中」と名づけてゐる。集中は決して後退を蔽ひ隠してはならない、それは中心からの圓周の充分なる支配でふ、最後の勢力中心に於ける合一むしろ原始的一在てふ意味をもたなければならぬ、「集中」はもしそれがその全領域を眞剣に支配せず、すべてのそのまだもつとも兩極的なる矛盾をも自己のなかに取り入れそして統一へと強制すべきでなかつたならば自己の意味全體に反して、自己をまつたく表面的に淺薄にするであらう。そしてそれがはじめて非常に困難な問題境位全體のもつとも鋭利なそして客觀的な見解にみち



びく。これもまた更にただ形式なる相互關係、外面と内面、圓周と中心、殻と核、手段と目的、素材と形式、文字と意味もしくはその他何とでも名づけるがよい、等の相互關係をもつては、問題の境位はそれ自身ただ外的に、表面的に、間接的に、素材的そして文字的に記述されるのみである。「自然は核でも殻でもない、それは一度にすべてである (Alles ist sie mit einem Male)」そして「汝らは自然觀察に於いてつねに一事をすべてのことと同じく注意しなければならぬ、何も内でない、何も外でない、何故なら内なるものは、それは外である」といふことを人はそこに再び一度引用したくなる。人は「精神的核心」の問題をそれ自身核心なく設ける。經濟や政治の既成態、自然科學や歴史科學の、そして自然と歴史そのものの既成態が精神にとつて手段であり、自己目的でなく、間接的なもの、導來されたものであつて、何ら根源的そして直接的なものでないのと同様に、精神にとつてはまた何ものも、それがすべての手段的なものを自己に從屬せしめるかぎりのほかは純粹目的でなく、何ものも、すべて根源的ならざるものがそれに於いて根源をもつべきかぎりのほかは、根源的でなく、何ものも、もしそれが自然的なものの自身の精神でありそしてそれにそして實にすべてに精神的貫徹の力を與へるにあらざれば、精神的ではない。

言葉は肉となつた、言葉が肉から離れた、ではない。光は闇へと照らす、闇をまつたく徹さうと欲する、いかなる闇も光から遁れることは許されずそしてできない、それは最後まで徹されるものでなければならぬ。今日吾々はたしかにまへよりも重くすべてその千萬の形態に於ける既成的なもの、自然的なもの、卑しきもの、非精神的そして反精神的なものの壓迫を感じるが——もし精神の要求がすべてこれらの虚しきものを滅し、吾々にそのやうに幾重にも對峙する死を、生が生きむがために、殺す要求が、吾々の裡に於いてまへよりも強くなかつたならば、吾々はその壓迫をそのやうに重壓的には知覺しなかつたであらう。精神と非精神との對立全體は、絶對的なものとしては、倒れなければならぬ、人は非精神をたとへ敵としてでも、承認するほどそれほど多くを非精神に與へてはならない、人はこれに向つて、これ(非精神)が全く存在せざることを證明しなければならぬ、人は幽靈が消えそして空虚な幻像に散失するまでそれに衝きかゝらなければならぬ。

それは勿論散失してもまつたく無にはならない。もしそれが積極的なものに基づくのでなかつたならばまつたく消極的なものはなく、もしそれが究竟の眞實に基づくのでなかつたならば假象



はないであらう。對立、然り矛盾は方向と反對方向との相互關係性に於いてその充分な、それ自身全く積極的な意味を受け取る、プラトーンに、ヘラクライトスにとつてさへ、すでに、對立はそこに於いて融和したのである、「上る道そして下る道は一である」、對立は、それらが同時に、その純粹なる轉向に於いて、相合致するときのみ隠れ去る。

これを吾々はいまトレルチが全體の葛藤のなかから主要なもの、そのみ核心的なものとして取りだした少數の對立についてもまづたく保證されてゐると信ずる。このやうな主要な對立として彼には古典的、古代の精神、基督教の精神、そして北方的精神の、ことにゲルマンの特色をなすもの、更にそのなかでドイツ的精神の特色をなすもの、が數へられる。疑ひなくこれをもつて、そこから全山塊の形層がたしかにある統一に於いて見渡されそして一つの全像に合一せしめられるこれだけの數の卓越せる山頂は列擧されてゐる。しかし實際これをもつては今日のそして將來のドイツ文化と世界文化がそれから自己を築きあげなければならない「元素」は確かに悉く擧げられてはゐない。東邦の測りがたく豊富なる世界はしかし吾々にむかつて自己をひらきはじめそして目に見え手に觸れられるほど日毎により深く西邦に侵入する。もはやそれに注意を拂はず

に通り過ぎること、もしくは、トレルチがあらゆる眞面目さをもつてしか信ずるやうに見えるごとく、簡単にヨーロッパ的活動性の「強き判断」と創造的なるものゝ尊重、吾々のうちに吹く「大いなる突進的そして未來信仰的な呼吸」がいつまでも東と西とを分離して置くであらうと豫想することは、もはや正當なことではない。さればたゞ一つの恐らくは甚しき不精確をそれとともに吾々に負ふであらうといふ保留のもとに、吾々は、かの近代精神的發展の全潮流がかの三つの源泉の合流から發生したものだといふ作爲一般を許容することができる。

つぎに、もしも人が、ヘーゲル以來といはずともしかし實際全く特別に彼のたとへ誤謬ありしにせよ實に強大なる思念の影響の持續のもとに、また社會的勞働生活の、そして決して休止することなき改造、撤廢、新建設の勿論混亂しつゝある多形性に於ける政治的構造の、また同じくつねにますます概觀しがたくなる知識世界の錯綜の、至多様性に於いても、實にそれを貫ぬく根本的諸對立への、はなはだ内面的なる諸關係を認識しやうと求めるとも、それは決して一つの賢人の石を求むる鍊金術の無用なる街學ではないであらう、(それらの根本的諸對立は、その支配的な意味が、それらがいかなるところに由來するものであれ何らかの特別の文化因子の歴史的



有意義性に對して一つの高さの標準を提供するといふことに於いて自己を證示するところのものである。しかし鍊金術からは化學が成りたつた、それは賢人の石をこそ發見しなかつたが、しかし固着せる「元素」の觀念を漸次に分解して、すべてのものを貫ぬく根本的諸關係を、たとへずでに開き出したのではないが、けれどそれを豫想しないといふことがもはやできないほどそれほど近く引き寄せた。實に最後に擧げられた諸文化力素はトレルチによつて設けられた三つの根本元素と同じ次元に位しない、恐らくは却つて前者こそ元素と名づくべきものであり、そしてトレルチがしか名づくるものは、例へばエムベドクレスにとつては元素であつたところの、しかしより深く徹入する學問にはしか認識せらるゝ、混合状態に比ぶべきである。

經濟、國家、學問について、また他の、これらと同じ次元に位する形象、倫常と道德、藝術、世界觀、宗教についての、一つの古代的解釋、一つの基督教的解釋、一つの北方的解釋がある、それならば古代的、基督教的、北方的もしくは何らかこれらと同格にされ能ふ精神態度の特色は、かの固有なる「元素」とその組成の解釋のしかたそして形成のしかたを貫ぬく一つの特色によつてのほかに、何によつて識別せられやう？

今吾々は精神的態度全體の性格的特色の、それがいかに西邦の發展のかの三つの根本形態に於いて刻印されたか、の認識のために、トレルチから何ものかを贏けやうと欲するならば、さうすれば吾々は失望するほかはない、何故ならそれらはたゞ、このやうに豊富な精神的世界形成の非常に複雑なる個性に對當せざる、非常に一般的な範疇的な種類の標識に由つてのほか殆んど何らそれ以上に區別せられてゐないからである。そのやうにして古典的古代の特性は一つの平靜なる感性に於いて自己をはたらかす法則によつての感性の神化より發出する調和的そしてそれとともに世界肯定的なる態度といふ特色づけによつてたゞに充分に言ひ盡されぬのみでなく、また決して普遍的に的中するやうにも言ひ表はされてゐない。またこれをもつて、都合よき場合に、一の、吾々には多分は特に注目を惹く、しかし自體にはそして普遍的には區別的ならざる、第二義的な契機が、内的理由づけなしに、取り出されてゐるといふこともはや誤認されるべきではない。まさしく古代の歴史的にもつとも意義ある文化力素の一序列は——例へばチイタンの反抗やプロメトイスの力闘がそこから震撼的に力強く發出するアイスキュロスの悲劇性、バルメニデスやプラトーンやプローチノスの爲せることき感覺的に對する精神的の峻嚴なる對立、一つの、靜かに



自己をはたらかす法則性の平和のなかに一面的に固執せざる、かへつてカタストロフ的に兩極端のあひだに彼方此方と投げらるゝ人間的地上の世界に對しての一つの天空のかなたの國と一つの地の下の國との二重の分離、それにまつたく類縁ある密儀ミステリオンの救済宗教（これは古代のそして中世の基督教に深く影響しそして今日までそのなかに生きてゐる）——これらのことそしてたしかになほ多くの初期もしくは後期の他の純正に古代的なものはヘーゲル的にもしくはドイツ的新人文學的典型の傳統的方式例へば、排出世間性、人間の神化、感性に於ける美の内在、與へられたるものそして存在するものへの信依、實在の畢竟合理的なる、擬人的形成と典型化、等の方式に一致するやうにはいかにしても強制することができない。世間性も超世間性も、兩者は近代적であると同様に古代的である、それ故にそれに於いては一者もしくは他者の區別的特性を見ることはできない。しかし視線が一般に自然と人間世界の上に中心的に向けられ、そして實に本質的に、純粹なる客觀化すなはち形相支配の意味に於いてあるといふことは正當である。またヘラクライトスとともに怠惰なる平和よりは争ひを優れりとするものも、しかし一の自己を無限に深めつゝある、まさしくそれ故に實に現はれざる、調和を求めそして豫想する、彼は形成の奇蹟力をま

さに反對や矛盾の盡くることなき富みのうちにこそ求める、それらの反對や矛盾の決して現實に和解せられざる争ひは破壊でなく、却つて創造を、法と法則すなはち形相の創造を意味する。勿論形成の、そして形相に由つての支配の決定的意志は、それに於いて若者らしい仕方で過程をあまり短く取るために、一つの著しく有<sub>レ</sub>限<sub>レ</sub>的思想と意志の緊縮に、そしてそのやうにまた藝術的解釋と形成とに誘ふ、そしてこれらは一つの比較的にまた大いなる自然の近さとそして一つの全く若々しい根本感情とに由つて補助せられて、殆んど何處にも地上の住人の精神的存在の諸問題の深淵を全くその最後の、無限の深みまで開かしめはしない。そのやうにして、たとへ早くから有<sub>レ</sub>限<sub>レ</sub>的と無<sub>レ</sub>限<sub>レ</sub>的との對立が古への哲學に於いて知られそしてその最深の發展を制約したにかゝらず、そしてたとへ無理數や無限や微分の數學や宇宙の無限觀の、そして神的なものについての一つの全くもはや擬人的でない解釋の明瞭なる萌芽が存するにかゝらず、しかし自己のうちに終結せる實在の觀念がつねに再び正面に立ち、「人間性の限界」が本質的に定められてゐるといふことはそこで説明せられる。そしてもし古代人が一般に何らの意志をもたなかつたといふことは實にシュペングラの甚しき、たやすく反駁さるゝ誇張であるとしても、しかし、靜止的な、



安息的な観、「テオーリア」が彼らには優つて親しみ深くそして自明的であり、そこに存立する「有」は彼らにはつねに上へとそして前方へと迫進する「ファウスト的人間」の「努力」よりも近く位するものであつたといふことは正しくそしてまた古くから知られたことである。古代精神の深奥の核心そして不朽の偉大さそして勝利的なもの、そのまことに不滅なるものを吾々は有限的領域に於ける停立（そこにトレルチのあげた諸特徴は悉く復歸する）といふごとき單に消極的な標識に於いて認識しない、吾々はそれを形成の精力の、吾々のゲエテによつて讚美された「*Verisimilitudo formae*」形相のけだかき力の、積極的標識に於いて認識する。古代は前者のために崩壊した、後者に於いて古代は生きてゐる、そして人間が人間でありそして、吾々にとつて動物がしか思はるゝ意識なき生き放しに沈まぬかぎり、もしくは超人の舞臺的な高履コトワラシをはいて濶歩しやうと思はないかぎり古代は永しへに若返つて再び甦へるであらう。

しかしあだかも古代精神が世界に對する一つの本質的にもしくは全く排他的に肯定的な立場の標識によつてとおなじく、私には基督教的精神もこれに簡單に正反對に對立された出世間性、憎世間性、ユトピアそして文化對立、あらゆる力を一つの全く不可見なる靈の國に、絶對者への衝

動の究竟完成に向つて緊張すること、等の標識によつて非常に不精確に特徴づけられるやうに見える。これに向つての一つの強い傾向は疑ひなく基督教の精神のうちに存し、そしてたしかに吾々今日のものにはこれについて特に著しく感ぜられるであらう。しかしまた私にはこれをもつて基督教的精神の最後のもの、恒存的なもの、積極的なもの、したがつて眞に核心をなすものとしてそれ故に不滅なるものには當つてゐないやうに見える。もし問題が、それが、吾々にとつて何であり能ひ、何であらねばならないか、どれほどまでそれに於ける何ものかと、吾々の問ひに答へ、吾々の困厄から救ひ出すか？ に向けられてゐるのであるならば、これらのことこそ吾々にとつて重要なものでなければならぬ。何よりも、基督教は「形而上學」ではなくて、宗教である。それがいかにはなはだしく二様であるか（トレルチのいはゆる「宗教的形而上學的理念」に反對して）は看過されることはできない。そして基督教のもしくはその他の宗教は、内面性とそして最高者におもむく故に、二様ではない、そして宗教がさうであればあるだけ、それだけそしてそれ故に宗教は「世界と文化、社會と倫常、國家と法、藝術と學問に對して無援」である。しかるときは宗教は賭にまけたのであつて、それは自己の課題について眞劍である人道から、畢竟は驅



逐すべきであらう。けれど基督教に於ける世界に對するこの絶對的に否定的な立場は、あだかも古代に於いての貫徹的ではないがしかし優勢的に世間的なすなはち有限的な思想位置とまつた同様に、たゞあるより深きものゝ結果、そして實際決して必然的ならざる結果である、このより深きものはいかなる世界肯定ともたしかに合一されるものでなければならぬ、さなくばたゞ中世的、例へばクリスチー修道院的基督教とそして終末觀や禁欲などに赴く初期基督教とのみがあつたであらう、そして一人のルーテルやプロテスタンチスム全體は基督教の一形態況んや進んだ深化ではなくて、たゞそのまゝに——勿論多くの人はさう考へやうとしてゐるが——基督教の自己分解であつたであらう。このより深きものは「ユトピア」といふ唯一の言葉によつてつねに觸れられてゐるが、しかし再びたかだか消極的に特徴づけられるのみである。それは場所や時の聯絡の全拘束から、一つのまことに最深奥なるものゝ最高のもものゝ思念に由つて、無にあらす虚しさにあらずたゞ源泉點を意味する一つの零點、その内包的無限性と超限性から生の流れが濁るゝことなく湧き出づる零點への復歸に由つて、離出せんとする老なる冒險である。何故なら神性とは宗教にとつてそれを意味する、生の永遠性、永遠性の生。そして實に人間に於いて、その

時空的存在むしろ此處に在ることのたゞ中に於いてこそ。しかしその存在は決して軽く取られ、蔑視され、誚はれ、一言でいへば否定されるのではなく、却つて恒久に嚇やかす死から救はれ、自己の上に高く擧げられ、神的なる純淨と無罪とに淨化され、「救濟」せられるのである。原始的に神の子たることに「再び生れたる」更新されたる人間の、ともに救はれたる、根源的な純潔へと新たにされたる被造物(そのやうに神は世界を愛し給へり)といふではないか!)のあひだに於ける、このやうな子供らしく自然的な、神のなかに包まれたる生命はすでに福音書の譬喩や福ひなるものゝ讚美やそして道德的解釋から自己を語り出し、そしてそのやうに、多くの純正そして原始基督教の、また後期の、神秘思想的もしくはプロテスタント的基督教に於いて、ルーテルの「基督者の自由」に於いて、(また基督教的な啓蒙思想や、吾々の實に非基督教的ならぬ詩歌、文學、藝術、哲學、についてはこゝではまつたく沈黙するとしても)自己を語つてゐる。たゞあだかも古代の強い形成衝動のなかには有限觀への誘惑があつたやうに、そのやうに宗教の、ことに基督教の超限性には、有限のなかに於ける生の生活可能的形成の、そしてしたがつて勿論消極的意味に於けるユトピアの重大なる課題の全然の看過、延いては文化の全的否定てふ反對の危険が



存してゐた。しかしそれはこの邪路に導いてはならなかつた、却つてそのなかには自體に、かのもつとも深奥なる源泉點から顧みて見かけは闇の力に墮ち入つた世界全體を勝利的に照徹し、愛しつゝ魂をもつて貫ぬきそして精神（何故なら神は精神であるから）の力をもつてまつたく内面から、純粹に言葉に由つて、何ら外的の力に由らずして、強制する可能性が存してゐる、それはあだかもすでに基督者らによつて充分しばしばそして充分深く謂はれそして歌はれたことである。

たゞそのやうにしてのみ、北方人すべてそしてことにゲルマン人が兩者、古代とそして基督教とを取り入れそして自己のうちに醇化したことが、理解される、もし人がトルンチとともに北方的そして特に深くドイツ的精神の根本傾向を、有限のなかに自己を固定する反抗とそして超無限へのあこがれとの對立の緊張の意識的保持、もしくは、それによつて吾々の精神世界が地上のもつとも豊富なるそしてもつとも生動的なるもの、普遍的人間的でありそしてもつとも創造的なものであるところの、限りなく貫ぬく内面性と體系的全的把持との合一、に於いて見るならば、それはますますよく理解せられる。私自身も同様のことを謂つた、(『Universalismus, Individualismus

und „Staatsgesinnung“ in der Sammlungsschrift, Vom inneren Friedendes deutschen Volkes. Fr. Thimms Leipzig 1916 及び „Deutscher Welberuf“ (Eugen Diederich, Jena 1918.) Bd 2. Kap. 2.)そしてエルンスト・カツシーラーが自由と形相との對立の交錯から近代的の、ことにドイツ的精神形成の特性を理解しやうと企てゝゐる (E. Cassirer, Freiheit und Form. Berlin, Bruno Cassirer, 1916.) のは、これとはなはだ近く相觸れるものである。實際この根本的對立はあきらかに最原始的に人間たること一般に根ざすものである。けれどそれは、この根本對立が中ヨーロッパ及び北ヨーロッパの、そしてこれらのなかでまたドイツ的精神世界に於いてそのもつとも強き、生命勢力的な展開に達し、そしてドイツ的精神世界の上に一方には古典的古代が、他方には基督教が、前者によつて對立の一面が、後者によつてその他の一面がより深き發展に刺衝せられそしてそのやうにして兩者のあひだの緊張がはじめて最高にまで高められそして意識に擧げられるに到るやうに、そのやうに作用したこと、そして必然的にさう作用せねばならなかつたことを、妨げない。それをもつてゲルマン的精神に於いては本來何ら一つの第三の、さきの兩者と同一線の上に位する元素を認むべきではなく、却つてむしろかの二つの根本的要素の一つの最深の深化を認識すべきであ



る、そして兩者はこの深化に於いて、それらの異質性の結果として、はじめてその創造的な勢力を證示したのである。そのやうにしてつぎにこの精神形成の第三の様相は、客觀的に事實的に判斷して、必然的にかの兩者に對して支配的なものであり、それとともに主觀的にドイツ人にとつては、それが北方人そしてゲルマン人としての彼には、それをギリシヤ、ヨーロッパ的なものもしくは基督教的なものとして任意に交換し能はざる、自然的な精神形成である故に、それ故に支配的なものでなければならぬであらう。しかしそれは一つの「原始民族」(「フイヒテのいはゆる」としてのドイツ人に消滅しがたく刻印された性格などのあらゆる神秘的假定なしにはなはだよく理解せられる。有限と無限との緊張はそれ自體に「無限的精神をもつ有限的なもの」(「ベートーフェンによれば」としての人間の深奥の本質に存する、そして吾々を吾々の限界を超えての休みなき溢出へと、そしてそれとともに吾々の全存在のための、不斷の格闘へと、強制するものは恐らくはたゞ吾々の教へ込まれた境遇の強制である、これによつてやがてかの自體には原始的人間の傾向はまさしく吾々に於いてもつとも強く意識せられた高さに昇らせられるのである。そのやうに恐しき、内面的そして外面的の危険のなかに吾々はそれ故に生きる——吾々はそれによつて、私は

信する、他の民族すべてよりも強き、より深き一つの生活を生きる、そしてそれ故に彼らはいかにしても吾々を全くは理解することができない、そして同様に吾々をば、彼らはその満足を地上に見いだす仕方は、いかにしても満足させないであらう。彼らは吾々の缺乏を知らない、それともにしかしまた吾々を深奥より缺乏からつねに再び解放するところのものを知らない。彼らは決して吾々の「一つのかたき城」Ein feste Burg」もしくは「このとき神吾らとともにあまさずば」„War Gott nicht mit uns diese Zeit”のやうな一つの歌を歌はなかつた、そして決して第九シンフォニーのやうな一つの解放の頌歌を作りだしもしくは全くともに歌ふことができなかった、もしくはカントやフイヒテのそのやうな一の自由の哲學を考へなかつた。吾々に負はされた、自己をただつねに深めつゝある、決して一の現實的平和締結に導かぬ、却つてただますますカタストロフからカタストロフに導いてゆく戦ひの無限の悲劇性のなかで、吾々は吾々の絶對的に死ぬ能はざる生を、吾々のいつまでも朽廢すべからざる青春を感じる。吾々はつねに一つの戰闘的な、あらゆる疑ひなき平和の愛をもちながら平和の能力なき、民族であつた、そして今もさうである、それを他の民族もたしかに知覺し、そして吾々自身知覺する。それ故に彼らは、彼らの威力を合



せて吾々を平和へと強迫しなければならぬと信ずる、そして彼らはあきらかに彼らがまさにそれによつて吾々の彼らによつて氣味わるき精神の様相をますます深き内包的發展に驅つたこととしてなほ驅りつゝあることを理解しない。それはたしかにさうでなければならぬ、そして吾々がいま經驗するものはたしかにこの深く悲劇的な發展のただ一の形態であつて、最後の形態でもなくまた第一のでもない。私はトルルチに於いて、あれほど多く悲劇の根本概念たる運命について説かれてはゐるけれど、ドイツ的教養の内實を規定せんとする課題とこの吾々の今日のそして永遠の運命境位との明晰なる關係づけを見ないのを不足に思ふ。吾々のいま遭遇しつゝあること、吾々をあらゆる靜かな持續的發展から突然に引き離しそして殆んど吾々のだれでもを心の奥底まで捉へそして變化せしめたものさへも、彼の叙述に於いては殆んど何か外面的なこと、副的なこと、經濟的そして政治的發展の一つのただ偶然な結果であるかのやうに見える、そしてそれは精神的生命の核心とは自體に何ら關することなく、内面的には決してこれに觸るるべからざるもの、觸れてはならないものである、何故ならそれらは(トルルチには)それ自身に於いて非精神的であり、すべて單に既成的なもの、また單に既成的なものとしてのすべての學的なもの、と同じく、

精神によつて、「形而上學的に」、ただ一つの脅威であり、實に一つの死の危険であり、これに對して精神が畢竟自己を守るべきところのものである。それはしかし吾々にはすでに全く支持しがたきこととして證示されたところである。

「資本主義」てふ流行語をもつては勿論單に何も根柢から説明せられず、ただもつとも外面的な兆候が原因とせられるのみならず、歴史的判斷の立場が押し除けられるのである。それをもつてただ他の方面から、これと反對の偏狹が爲したとおなじ誤謬が爲されるであらう、すなはち經濟は一つの外部から添加されるものとして考へられ、それが次に「精神」の上に何らかのしかたで作用し、これをその軌道から脱せしめまたは自己の使役のもとに強制することができやう、といふことである。しかし「資本主義」は人間の上に一つの見しらぬ、氣味わるき反精神の國からきた一つの盲目なる禍ひとして襲來したのではない、それは却つて、それに對して經濟やまた政治もはなはだ深くそして本質的に關聯してゐる科學や技術と同じく、精神自らの業である、精神自らがそれについて責任を負はなければならぬ、そして、もしもそれが責任を負ふ能はざるときは資本主義を克服しなければならぬ、すなはち、この一たび爲されたる業を單に元に戻し、贖罪



するのではなく、ただ一層厳密にその全體の歸結を遂行することによつて自己以上に出なければならぬ。それは、すべての精神の業とおなじく、これを爲し能はねばならぬ。それは誤謬であつた、それは道を過まつたものであつた、しかしそれは精神の誤りそして過ちであつた。ただ精神のみが誤りと過ちについて知る、何故ならただそれのみが眞實と正しきものについて知る故に。誤りと過ちとはそれ自身精神のものである、それらは非精神的なものに於いてはまつたく理解できない。それらは、たとへば矛盾<sup>カイヤシユルツ</sup>であるとしても、なほまさしく言<sup>シユルツ</sup>である、しかしただ精神が言ひ、そしてただ精神に對してのみ何ものかが、即ち精神が言ふ。それが敵であるならば、しからば精神に對しては精神以外の何ものも敵たることはできない、ただより低き精神がより高きものに敵するのである。更に敵對が甚しければそれだけ敵らは互ひにより近くあらねばならない。休みなき向上の格闘に於いて、各々のより高き立場にとつて敵はもつとも近きより低きものである、すなはちすべての以前のものに對して最高のものであり、勝利たるものである。しかし、精神がその諸問題の無限を、そして諸問題のこの無限の根據を自己の中に認識し、それを全く自己のうちに收めそいで肯定し、そしてその實に決して終了的ではないがしかし永遠に前進的な克服を信ずる、といふことが、それがはじめて最高の勝利、永久に奪はれざる精神の勝利である。各々の終了的な克服に於いてはただ有限的な勢力が有限的な反對勢力に對して主人となつてゐるにすぎない。有限的なものはしかし終らなければならぬ、それはそれ自らのうちに死の萌芽をもつ、それはすでに死刑を宣告せられてゐる。決して終了的に勝利者ならざるもの、しかしまた決して打ち勝たれざるもの、それこそまことの威力あるもの、無限に生命勢力的なものである、それのみがひとり不滅の生命の確かさを自己のうちにもつ、何故なら生きるとは戦ふことである、實に勝つことである、しかし何らの勝利をもつても戦ひから解放されるのではない。

人が精神的なものに對立して思惟するところのものを、物質的なもの、と呼ぶならば、物質は實に素材を意味し、素材はしかし精神にとつてただ形成すべきものを意味し、そして、それが素材であればあるだけ、それだけですす形成の要求と可能性とを意味する。それがすでに精神によつて形相づけられてあることが少きだけ、それだけその精神的形相づけが要求せられる。物質的なものは微分されざるもの、したがつて微分すべきもの、究竟は無限に微分すべきものである。質量は質量としては勿論死物である、何故ならそれは諸勢力の相互的拘束、すなはち麻痺



を意味するからである。もし人があらゆるエネルギーの展開の終末に一つのエネルギーの死を(例へば形而上學化せんとする物理學者の普通の觀念に従つて、宇宙の冷却死滅を)考へるならば、人はこれを、エネルギー論自身の諸原理にしたがつて、實にただ何らより高きエネルギーもそれに對してもはや適應せざる、諸エネルギーの一つの最終の拘束として思惟することができ。しかし一つのより高きエネルギーがないといふことは一つの豫想であり、それはいづれにせよ吾々の非知識に由つて權利づけられてゐないものである。もし萬有が死に能ふものであつたならば、それは疾うに死んだにちがひない、そしてそれは一つの最原始的な無から無をとほつて或物となりそののちまた他の或るものとほつて再び無となつたにちがひない、しかしそのやうなことはすべて解すべからざることでありそしてただ絶對的有限性の豫想の虚偽を罰するものである。

吾々が今日の崩壞の意義として知覺するところのものは、根柢に於いて、有限説の崩壞である。終るてふ誤りの終りである、生ではなく死の死である。もし「西邦」が無限性の充實せる承認、永遠なる「向上と前進」、無限的課題としての理想の肯定、を意味するならば、それは「西邦」の没落<sup>フイェントラント</sup>ではない、それは却つてそのやうに解した西邦の完全なる勝利である。人はしばしば

今日の問題境位を沈落しつゝある古代のそれとつぎのやうな方向に於いて比較した、すなはち恰かも後者が、古き文化勢力の内面的分解をしばらく除外して考へれば、ギリシヤとローマから出發した精神的運動のなかへと新しき民族すなはちアルペン以北の民族が加入したことに由つて制約せられたること、今日のは下層の民衆階級の上昇に由つて制約せられてゐる。人はそのやうにして一つの新しき、内的な「民族移轉」について語る、それはあきらかに一つのなほ一層重大なる問題を意味しなければならぬ、何となればこゝではそれは一つの高き文化のなかに生活しつゝ、ただに原始的階級に立ち停つてゐたのみならず、この彼らに到達しがたき文化によつて暴力的に抑壓され、自然的地盤から分離され、しかし一つの他の彼らに適する地盤に移されず、それにしたがつて一般に根柢なきものとなつた一つの民衆集團<sup>フォルクスマス</sup>の勃興に關するからである。それではいかにして吾々はいまそれとともに立てられた問題の解決を社會主義の思想に於いて認識するか？「吾々は社會主義を單にもしくは第一義的に經濟的そして幾分はなほ政治的に解することによつてではなく、ただ吾々はそのもとにあらゆる労働の、生活財の原始的労働取得そして更に獲取されたるものの加工の、充實せる組合化を思惟するやうに、そのやうに理解するのである、そ



れに於いて精神の労働は單に生理的労働に並ぶ、もしくはそれと同列なる、もしくはそれに優れる、第二のものとしてでなく、却つて一つの契機として、そして實に支配的契機として、すべての労働のなかに存するものとして理解せられる。何となればすべての労働は、支配としては、精神的であり、すべての労働は、もし人が支配せらるるものを見るときには、物的である。悟性のすべての誤り、意志や藝術形成のすべての過ち、偽はりの宗教は、すべてそれらは精神に對する<sup>フユリス</sup>物の、思想の精力に對する非思惟の、奮起の要求に對する非意志と意欲不能性の、藝術的淨化に對する非藝術の、創造者なる神に對するそれ自身に死物なる「世界」の主人なる非精神の、情性抵抗にもとづく「社會主義」はしかしながら精神の非精神、その共同の敵に對する戦ひ——萬人の戦ひが、勝利に達するために、共同的に戦はなければならない、といふことを意味する、共同的とは、微分化せられたる（すなはち物質化されたる）全體を微分化されざる敵、粗雑なる質量の非精神性に對して、謂ふのではない、それは「組合的」である、すなはち、それに於いて各個人にその差別的特性が單に保有せらるるのみならず、却つてはじめてその正當なる効力に來る自由なる協力的労働に於いてである。社會化の意義はされば、調和を無限にまで深めるためにそのなか

で諸對立の全緊張が保有せられなければならないあの調和化である。されば集團の支配ではなくて、むしろ集團としての集團の全き分解である。それは主體に關して、精神の負擔者、精神のための闘士、神の戰士たち相互に對しての關係に於いて妥當する、あだかもそれが精神的なものである。すべての客觀的内實に關して妥當するとおなじである。そしてこの兩者は必然的に合同するたみにすべて精神的なものが一つの負擔者すなはち闘士を、そしてその多様性の限りなき豐富のために、同様に限定すべからざる精神負擔者、精神闘士の多様性を、要求するからのみではなく、最後の根柢に於いて精神そのものがただ一であり、すべての精神的なものの内容統一に於いて一であり（何故なら何ものでもただそれが精神の内容統一のなかに歸入する故にのみ一の精神的なものであるから）、そして一の精神の多數の個別的鏡映であり、そしてそれに由つて同時に彼らすべてのすべてに於ける鏡映たる、諸精神たちの多に於いて一である、からである。そのやうにみれば理想社會主義が一種の社會主義、社會理想主義が一種の理想主義ではない、社會主義は根柢まで考へぬけば、必らず理想社會主義である、理想主義は、根柢まで考へれば、社會理想主義である。これが問題の一の解答である、それは實際、すべていまままで曰つたことにしたがつ



て、問題の止揚ではなく、その永遠なる持続的存立の認識を、しかしいづれにしても、形式的方面には、そしてまた形式の内容に對する純粹なる關係の方面には、その完全なる清算を、意味する。

この清算を眼中に置かない人は、恐らくは、世界の運命の現在のカタストロフ的な轉回について何らの明晰なる見解に來ることがなく、またその人は現在の轉回が一般にそれだけとして觀察すべきでなく、あだかも一が二につきに三に導くごとく、また諺にいふとほりAを曰つたものはまたBをも曰はなければならぬごとく、そのやうに確かにそれから結果せらるる、多くのカタストロフの一全序列の第一項として觀察すべきであるといふことを理解せずもしくはそれに甘んずることができないであらう。それを誤認せしめるものはしばしば知力の弱さではなくて意志のそれである。トレルチのがさうであるとはしかし謂ふことはできない。むしろまさしく意志勢力の一つの二面的な優力がここでは彼を誤らしめたのである。彼には意志と運命とは究竟の概念である、吾々には意志は創造に、運命は創造せらるるものに分解し、兩者は第三のもの、最後のもの、自己を自ら創造する創造、に隷屬しなければならぬ。そのやうにして吾々にとつては一つ

の有限的な問題解決、問題の克服を意味する何らの支配について語ることができない。けれど創造として吾々の行爲は吾々には一のそこから線が照し出て、その方向に完成が求められる——そのやうに意志は欲する、何故なら行爲はつねに何ごとかを爲さんと、すなはち終了せんと、欲するから——断片ではない、吾々の行爲はその決して完成せざることがまさにその分つべからざる全體性を確保する一つの永遠の仕事にはたらきつつあることを知つてゐる。完結は終了であり終了は死である、生は終了を輕蔑する。そのやうにして吾々には、その最深の、「形而上學的」(すなはち吾々には單に、精神的)意味に依つての、革命の充全なる肯定に於いて、巨大なる勇氣と信仰とが生長する、それはまた、革命をとほつて——ただより遠きしかしより精神的なるそしてますます精神的なる——諸革命へと歩むべく覺悟してゐなければならぬ。

もし吾々がトレルチに於いてこの革命の究極の、遲疑せざる肯定を見いださないとしても、それでも吾々は彼の、まさしくその不充分によつてこそ設問の深化へと刺戟しそして衝き動かす叙述のために感謝する。しかし吾々がその事柄についての吾々の見解のための一つの支柱を同様に方向づけられた他人の思惟に求めるならば、さうすればその支柱はたやすく近くに同じ輯録的な



かの一つの他の論文・すなはちアルトウル・ポーンヌスの「物理學者」<sup>デルフアイゼーカ</sup>と題する對話的フアンタジ  
ーに於いて提供せられる (Der Leuchter. Darmstadt, Otto Reichl. 1919. S. 313 ff)

實にここでもまた精神の創造者の原始勢力はしばしば意志でふ稱呼のもとに現れる、しかし終  
りの方にはかう謂はれてゐる「……まづ比較的弱き諸勢力、すなはち感覺的知覺のそれ、それを  
もつとも強度に鋭くしたるものに於いては科學——すなはち知力——更に深く意志と意志意  
識、そしてはじめてその底に創造者の諸勢力。」されば彼には創造者のものは知力と意志との  
彼岸なる一つの第三のものである。「物理學者」はいま彼の立場をまづ科學に於いて取る、しかし  
科學が彼にとつてそれ自身をますく深めるときに、つひに「他のもの」、すなはち認識論者と、  
(吾々はまた曰ふことができる、先驗的哲學者と)、出會ふ、後者は己のが立場を直ちに反對の側  
究竟の精神性の意識に於いて取るが、しかしいま科學の對象たるもの、物的なもの、機械的なも  
のから彼が念頭に置いてゐる最後の精神的なものへの「過程」<sup>ユルバーガング</sup>を見失つてゐる。しかし兩者が一  
歩一歩近く進んでくるあひだに、ここでは一つの過程は全く求むべきものでなく、まして確かに  
見出されないことがあきらかになる。物理學者自身にとつては、彼の設問の漸進的深化によつて

物的なものは全くそれにとつてのみ物的なものがただ對象たるところのもの、すなはち精神と一  
列に歸し、そして精神は他方ただその對象に於いてそして對象から自己を見いだすことができる  
のである。精神は世界創造者、素材創造者となる、しかしそれは精神的なものが自己を素材化す  
ることによつてではなく、自己を絶對的に素材的なものの上に置くことによつてである。「そして  
世界創造はそのなかに物體が存在する空間の觀察のなかに入らない、そのなかで物體が運動す  
る時間の觀察のなかに入らない、それは初めに於いて始らず、終りに於いて終らず、つねに時  
間と空間との下方にありそして吾々に由つて起る。」つねにもしくは「絶えず」といふのは「無  
時間的に、それ故に自體に未來と過去とをその脈搏をもつて打ち貫きつつ」である。そしてまづ  
たく眞率にここでは創造は無から造りなすことを意味する。しかしこの無はただ素材との對立に  
於いて妥當する、すなはち非素材から造りなすことである。自己から、無限の精神から、彼らは、  
(彼らとはまさに精神の原始諸勢力である)「絶えず」(すなはちまた時なく)「世界を創造する。  
それ自らには限界なく、ただ己れの創造によつて限られる。」そして「それらの勢力の作用の  
なかでまとめるもの、それが随時に現在である。」この「随時に」<sup>イェウツァイト</sup>はいま勿論一つの時間規定を意味



するのではなく、それはむしろ超現在のなものとまた超過去のなものである。そのものの創造を意味する。そのやうにしてここに何らの「過程」が求められるべきでない事は理解される。それはただ精神の二つの視線方向に於いて精神そのものに自己を二重に表現する同じもの、精神の一なる創造である。一はその表面の網のなかに向けられた整序的視線である、そこ（すなはちカントが悟性と名づけたもの）に於いてそれは創造を側面的に結束されたものとして、原因的に、機械的に見る、他の視線は諸勢力の深底を洞察する、そしてそれはこれを強くしそして勇気づける、この第二の視線をもつて精神はすべてを創造者的に、自由形成的に、見る。それは單に意識についてのみならず、自覚、意識の意識についての、カントの「先驗的」見解である、もしくは批判的「理性」の見解である。第一の視線は認識の、もしくは「更にその底に」意志の線の上に留まる、第二の視線は兩者を創造へと、*natura naturata* としてでなく、また單に *naturans* でもない、吾々がすでに上に規定したやうに、自ら自己を造ることとしての創造へと深める。いかにそれらすべてが——勿論非常に「形而上學的な」、しかし厳正に先驗的に解釋し能ふ、言語に於いて——吾々の思想に近く立つてゐるものであるかは、それ以上言葉を要しない。これをもつて

しかし運命の歌は歌ひ終つた。すべての地上の運命が、然りすべて吾々に認識せらるる世界運命がただ一の絶壁から絶壁への抛擲であれ、また吾々の遠く迷ひたる思想が自己を懸くるもつとも遠き空間的または時間的形相が、無時間的なる、無運命的なる永遠のまへには單に一つの刹那であれ、この無運命者、天なるものの静けき永遠の晴朗をただに思惟し、深く痛ましくそれを事缺くのみならず、却つて痛ましむる缺如に於いて自ら生き、呼吸するところのものは吾々自身である。何故なら吾々は生を、したがつて神性を生きるほかに何ものをも生きないからである。

ポロヌスに於いて特有なるそして新しきもの、同時に吾々にとつてここで意義深きものは、全く物的なものから出て、すなはち科學の道が抛棄せらるることなくして、この究極の高みへと、求めずして、全くおのづから、單に、この恐るべき時代の體驗が、すべての盲目ならぬもしくは卑怯ならぬものとおなじく、彼をそこに移し入れた老なる緊張の秘密なる衝動のもとにのみ、道が見いだされたことである。彼はこの道をおどろくべき「物理學的根本法則」、「より小さきだけ、それだけより強い」の導びきのもとに見いだす。原子は強力なる動物もしくは機械（例へば水雷）よりも千倍も強い、電子は更に恐らくは二千倍もより小さき質量をもちながら原子よりは二



千倍も強い。しかし物理學者は、原子から電子への復歸は單に一つの無限なる連鎖の第一の項として現はれるであらうといふことについて用心してゐなければならぬ。それがまづただ願望や問ひであるならば、このやうな願ひや問ひは單にそれだけではない、それは、あだかも天に於いて輝くものが、しかしつねに吾々のまはりにそして裡にあるやうに、同じやうに實在的に取られることを要する、さなくば吾々はそれについて何も知らなかつたであらう。またもつとも粗雑なる物質的なものも吾々にはただ吾々の意識に於いて與へられ、ただ經驗せらるるもの、一方の限界である、しかして他の一限界、吾々にもつとも近き限界は吾々自らのうちに存しそして意志の性格を荷へるものである、これらの諸限界はしかし精神そのものの創造に限界を立するものでなく、すでに曰つたやうに、ただ精神の自己限定である、それによつてはじめて時間や場所、この吾々の世界の全體の、唯一でもまた究極のでもなき、形相が發出する。

この極少量の威力の逆理的な法則は吾々に何を語るか？ それはただに、すべての外延が内包的なものに於いて自己を基礎づけ、内包的はただ外延的より見て無限小（つねにより高き階級の微分）であることをのみならず、またいかなる點に於いても宇宙の萬有力ははたらく、しかしな

がらただ吾々の認識がますます深く迫るだけ、それだけです／＼深く吾々に自己を開くが、けれどそれ自身に於いてはつねにそしてすべてに於いて分たれざる一であることを、意味する。ただ吾々の抑止されたる視線はそこに死せる物質以外のものを見ない、そこでは吾々は外延的なものの中に、あだかもそれが堅く自己のうへに安立するかのごとく、餘儀なく佇立し、そしてそれをなほ遠く内包的なるものの根據にまで追窮してゆくことができない。質量は假象である、すべては勢力である、そして實に萬有の一なる勢力である。

そのうへ、吾々がその究極の眞實まで徹しえぬものを、畢竟非眞なる「假象」として斥けることはまた更に不正なことである。物質には、經驗せらるる事實的なものの實證性には、對象てふ問題てふ充分なる意義が残存する。すべてただ運命的なるものはただ吾々によつて克服せられんがためにのみ存在する、しかしまさしく、吾々がそれに於いて吾々自身を引き裂きそして「吾々に缺くるその人」を吾々自らの裡に見いだすことを學ぶためにそこに在る。もし吾々が休まざる自己深化の途を斷然として踏みだすならば吾々はその人を見いだす、そして自己深化は吾々のうちにあるすべて拘束されたるもの、質量的なものを救ひそして自由に運動する勢力とするであら



う。個性てふ大いなる神秘は、それが己れをただそのなかで萬有が自己みづからを思念するかの無限に多數なる集注點の一として、他のすべてに、そしてしたがって超越的なる全而一的統一、統一の統一、諸唯一性の唯一性、すなはちすべての究極ならざる諸個性の究極の個性、に結びつけられて、見いだすことに於いておのづから解ける。

そしてそこから今やまた我と汝の意味もまた理解せられる。個我は、彼のまだ眠れる諸勢力が一つの等種類の、そして實に自己發展的な、相互に對しての作用に進入するによつてにあらざれば、作用する能はず、彼の能作用性を開展するあたはず、したがつて「現實的」な生にめざめることができない。そのやうにして次に内面力は、言葉、言語として、外部に向ふ、しかしそれは自己を外面化するためではなく、却つてむしろすべて外的なものを内面化する爲にである。けれどそれはつねに對語、答へを、そしてそののなかに責任を求めそして要求する、これによつて、單に内面的なものとしてはいつまでも自己に疑問的に残るであらうところのものが、自己のまへに己れを義しとすることを欲するのである。そのやうにして「悟性」と「理性」とは相互的自己了解として自己を解らせることとして、我と汝のあひだの「交渉」となり、それに由つて測るべ

からざる、さなくば内面に眠りつつ留つてゐたであらうところの、諸勢力が自己を解放する。そして——またこれをも語らずに残さないならば——ゴットハイト神性の、そして、神に對する人間の關係の、意味がおのづから開ける、その神とはすべての、我に對しての、それなしには我が全く自己を見いだす能はず、むしろ一般に我であらぬ、最後の普遍的汝である。

そしてそこからいまやまた人間共同態の意義について、そして社會學的意義に於ける「集團」と個體との關係についても解答が生ずる。集團としての集團は、それをはじめて集團たらしめる個體勢力の相互的拘束に於いては、彼らのなかに眠つてゐる神々しき諸勢力を自由に作用せしめるやうに自己を救ふことは勿論できない、ただ個體はそれらを自己に於いて「もつとも靜かに自己に聽くことに於いて聽き取りそして感じ取る」ことを能くする。しかし人はそれらが彼らのうちに眠つてゐることを信じ能ふ、そして信じなければならぬ——それらは勿論眠つてゐる、それ故に、それらが自己を認識しそして外へと自己を顯はし能ふにはまづ覺醒せられなければならぬ。しかしながらすべての個體らの力は究竟は一なる神的威力である故に、それ故に、いづれも個體から、もしそれがただ最後のもの、最深奥のものまで開かれさへすれば、一なる、無限な